
月陰に咲く光の詩

白亜迦舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月陰に咲く光の詩

【Nコード】

N6095G

【作者名】

白亜迺舞

【あらすじ】

吟遊詩人ジルコニアとその従者ソウジは、とある街で若き騎士ジュンと、並はずれた魔力を持つ金髪の美少女カミエと出会う。神の力を持ち世界を滅ぼすことができるカミエは、極北の地で自らを滅ぼすために旅をしていた。世界を護る為に、非情な心でカミエを北の地まで護送するジュン。だがその心がやがて裏返ることを彼はまだ知らない。———愛のために世界を犠牲にすることをテーマとした、純愛バトルファンタジー。

戦場は赤く染まっていた。

剣や槍を手にした重装の騎士と、物々しい宝杖をもった魔術師と、それらが三十ほどが焼き払われた町の跡に集まり、戦い、そして傷ついていた。集った者達はいずれも「教会」において高い能力を持つ者ばかりだったが、すでに半数が重傷を負い、中には手足をものがれ戦闘不能となった者もいた。

「くそ、やっぱり小隊一つではだめだったんだ！ このままでは全滅だ。総員撤退するぞ！ ^{ブリスト} いますぐだ！」

「お待ちください、隊長。怪我をしている者は……」

「構わん、戦闘放棄だ！ 奴は動かないものには攻撃しないはずだ。這って帰ってくるだろう！」

兜に一際おおきな飾りをつけた——しかし今は焼け焦げて無残となっている——大柄の騎士は、崩れた家屋の影に隠れ、部下を一頻りがなりたててから、腰に下げていた角笛を吹いた。

高く澄んだ音は、炎のけぶる戦場に響き渡り、その場に立つ戦士たち全員の耳に届いた。皆、いま吹かれた角笛の音の意味を知っている。「退却」だ。ある者は心から安堵し、ある者は身動きできない仲間を憂いた。しかし彼らが戦っている敵、一体で三十人の小隊を戦闘不能に追い込んだその敵を思った時、皆戦士達は逃げることを善しとした。

たった一人を除いては。

「おい、何処へ行く！？ ベースはそっちじゃないぞ！」

「十二章三十五ページ『敵に背を向けてはならない。退く時も敵を怯ませ、その眼を閉じさせよ』。——俺は囃になる」^{ビショップ}

「馬鹿な！ お前一人で何ができる！ いくら若くして一級騎士に成り上がったからって調子に乗るな！」

そのとき稲妻の電光にも似た光が走り、衝撃が押し寄せた。

『神よ、我にラザルの防御を与えよ！』

退却を否とした唯一の騎士が、楯を掲げ成句を唱え光のシールドを作り上げた。押し寄せた衝撃は周囲を薙ぎ払ったが、数名の騎士は楯をかざした彼によって護られた。

おとなし　じゅん
「音無・盾……」

「奴は倒れた者には興味はないが、逃げる者は追ってくるぞ。早く行け」

ジュンと呼ばれた騎士は命じるように短く言うと、そのまま先程の衝撃が送られてきた方向へと歩きだした。

「敵」を厚い瓦礫の向こうに置き、ジュンは背をその瓦礫に預けながら装備の確認を行う。籠手、手袋、胸当て、胴巻き、ブーツ、腰につけた聖符、楯、そして聖句の刻まれた剣。銀色の剣の腹の文字を指でなぞれば、赤い光で鈍く輝き始める。

『神よ、我に聖霊を遣わせ給え。御身の巷を荒らし、葡萄畑を焼き払う者に、御身の怒り、鉄槌を下すために我に代行させ給え。ソドムとゴモラの奇蹟、総てを硫黄の炎の中に吞み込む恐れべき汝の怒り、悪を塩の柱と化す聖なる力をここに、聖別され御身に捧げられし我が手の剣に顕わし給え』

剣はまばゆく輝き始める。

そのとき、また光が爆ぜた。ジュンの身を隠していた瓦礫は外周を大きく削られたが、ジュンはしゃがみ込み身を小さくすることで攻撃を受けずに済んだ。

敵は何を考えているのだろうか、ジュンは静かな心で思った。左手の楯の固定を確かめ、右手で剣の柄を強く握り、ジュンは一息に瓦礫から躍り出た。

敵の姿が見えた。

白く光輝く一双の翅。光る瞳に、波打ち煌めく髪。全身を光に包んだその敵の姿は、いっそ神々しくもある。――それは一人の少女

だった。肌の内側から光を放つていようと、身を包む擦り切れた木綿の服は、ありふれた村娘の服装だった。細い手足も、慎ましげな胸の膨らみも、光さえなければ平凡な少女のものだった。

だが、如何に容姿が少女のものであれ、「それ」が振るう力は尋常のものではない。軽く、虫を払うように手を動かしただけで、何百キロもある瓦礫ごと地面を吹き飛ばす衝撃が発せられる。

——攻撃は大ぶりで、単純。

ジュンは回避しながら見極めた。敵の力は無尽蔵で強大だが、効果的に振るわれているわけではない。反射的な攻撃である故に、戦略を練りながら回避するには問題はない。

近づくことも容易だ。

「敵」を囲むように走りながら、彼はさらに敵を観察し、隙を探った。

ジュンは剣士だ。接近して、一刀で切り裂くことは、剣士である彼が何よりも得意とすることだ。対して、敵は剣士ではなく、剣士と相対する戦い方も知らない。勝機があるとすれば、そこだ。チャンスは一度。ジュンは剣を低く構えながら走り、好機をじっと待った。

すると、手榴弾を投げるような小刻みな攻撃が一瞬止んだ。——薙ぎ払う攻撃が来る。

待っていた好機だ。

ジュンは左手の盾を振り捨て、敵に肉薄しながら腰につけていた聖符を取った。

『讃えあれ！ 砂漠の辛苦も、悪魔の誘惑にも耐えし勤行者克肖者聖大アントニイ！』

聖符は燃え、身代りとなってジュンの身を護った。

理性も知性も持っていないさそうな敵が僅かにひるんだ。距離は五歩、ジュンは地面を蹴り剣を振り上げた。

『思い知れ！ 神の威光、神の怒り。おお、その名に栄光あれ！』

剣が光に包まれ、最上段から打ち込まれる。

「敵」は実体のない光の翅で身を包みシールドを張る。

背徳の街を焼きつくした聖句の力を発動させた剣が、敵のシールドと激突した。

光が爆ぜる。ぶつかり合う力は空間を軋ませ、周囲の瓦礫を塵埃へと変えていく。二つの力はほぼ互角に見えたが、咄嗟に護りに入った敵の方が劣勢だとジュンは確信した。

そしてすべてが弾けた。

プロローグ（後書き）

とりあえず公開しましたが、更新は遅いです。すみません。でもお付き合ってください。

act 1 「吟遊詩人とその従者が

「ねえお兄ちゃん、あたしあれ食べたい」

「昼飯さつき食ったばかりじゃなかったか？」

「ねえお兄ちゃん、あたしあれ欲しい」

「え？　——おい、高くね？　駄目だ駄目だ。そこまで金ねえ」

「ねえお兄ちゃん、あたしあれ見たい」

「ああ、良いかもな。でも先に宿を見つけないとな」

少女と青年が連れ立って、談笑しながら歩いていった。穏やかな日差しの下、やや大きめの街の、賑わうマーケットの中。混みあう人通りの中、手を繋ぐ二人は仲の良い様子だった。

「奏治お兄ちゃん？」

「あ？　何だ？」

道が交差する広場で、青年の手を振りほどいて少女は彼と向かい合った。

「あたしのことあしらってない？　何か、煩い子どもを扱っているように感じられるんだけど？」

「……あー」

青年は答えに窮した。黒い短髪を掻きながら、少女の姿を見ながら対策を考えた。

青年の前で腰に手を当て威嚇するように立っている少女は、背丈からしてまだ十と少しくらいの見た目。オリーブ色の顔立ちは年相応にあどけなく、トパーズ色の大きな眼が剣呑な光を放っている。耳には大きな青く澄んだ石のイヤリングを付けている。彼女はサイズの大きな青を基調とした色鮮やかな木綿の服を、多く重ねて着ていた。特徴的なのは頭にかぶった大きなつば付き帽。ばさばさのスカートの裾から見える靴も、ペンキを塗りたくったような色彩で

異様な気配を放っていた。——青年はこの靴に話を持っていくことにしてみた。

「お前、その靴いつから履いていたっけ？」

「去年くらいだけど、三か月前くらいに直してもらったよ」

「……」じゃあ当分はあのままで良いか？

「あ、もしかして服買ってくれる？」

少女は期待を込めて『奏治』と呼ぶ青年を見上げた。

少女から見る青年は、とても背が高い。実際、彼の背はかなり高い部類に入る。服装はゴワゴワとした羊毛の生地、裾がきつちりと縫い付けられた暗い青のシャツとパンツ。短め袖から覗いている、筋肉質の腕の色は少女と同じオリーブ色。体型はやや細めで、顔立ちもそこそこ整っている。すくなくとも少女は気に入っていた。

青年は後ろ手に持った、布に包まれたちょうど二メートルくらいの棒をもじもじと弄っていた。——このまま押せば何か奢ってもらえる。少女は確信した。

「ソウジお兄ちゃん。あたし靴はいらないけど、靴下がちょっと良くないの」

「靴下か？」ソウジと呼ばれる彼は少し安堵した。靴下ならそう値は張るまい。——「そうか。ならちよつと見ていくか」

「ホント？　ありがとう！　ねえ、あれ！」

少女の指差した先には、チェックの可愛らしい長短の靴下を売る露店があった。

「……違うのにしないか？」

「えー？　これがいい」

その靴下は、今いる地域の特産羊毛を使ったもので、ソウジの価値基準の三倍の値段を付けられていた。

「ジル……」

「あー、このキルトも可愛いー！」

ソウジは懊悩した。――これはもう取り返しがつかない。

高い分よいものだろうと自分を納得させ、ソウジは口を開いた。

「じゃあどの靴下にするんだ？」

しかし不幸なことに、少女の狙いは靴下ではなかった。

「んー、やっぱりキルトが欲しい。スカート飽きた。ぼろぼろだし」

「待てよ、ジルコニア！ 買うのは靴下だ！」

「あーん、キルト欲しいよー」

「く……！」

窮地だった。今晚は宿代を削って野宿になるかもしれないとソウジは思った。

そのときだった、

「あらあら、賑やかですわね。お姉ちゃん、もしかしてその格好――その耳飾りは吟遊詩人の物？ ねえ、それだったら一つお話を吟じてくださいな。私、歌物語に目がないの。そうしたら、そのキルトあげてもいいわよ」

露店の暗がりから、まだ若々しい女性が現れた。服を売る者だけあって、器量の良い身体にエキゾチックなファッションだった。

彼女の言う吟遊詩人――それは歌と物語を奏で旅する者。独特な服装と、宝石の耳飾りで他人にもそれとわかる。楽器を手にとって歩く者もいるが、少女はその類ではない。因みに、吟遊詩人は宝石の名前を自らの名前とする習わしで、この少女もジルコンを持ち『ジルコニア』と名乗っている。

救いの手だと、ソウジは思った。

「うお！ 本当ですか！ あ……でも、この場合は良いんだっけか、ジルコニア？」

「えっと……まあ、何とか良いんじゃないかな？ もう少し値段が上だったら駄目かもしれないけど」と少女。

「大丈夫ですよ。前にも吟遊詩人の方に服を差し上げたことがある

わ

「本当？　なら、良いね」

少女——ジルコニアは心の中で小躍りした。そんなジルコニアの様子を見ながら、ソウジは周囲を見渡した。

「この店先でいいのか？」

「あ、この椅子を使って。ねえ、とっておきの聞かせてね」

「まかせて！　さ、お兄ちゃん」

「おいよ」ジルコニアに促され、青年は深く呼吸して声を張り上げた。——「さあさあ、お立会い！　これから天下公認の吟遊詩人、若いけど技は十分のジルコニアが物語を歌いますよ！　どうぞ立ち止まって耳を傾けてくれ！」

人々がソウジの声を聞き、彼らの前にスペースを作りながら集まり始めた。その間に、ジルコニアは空を見上げながら小さくハミングをした。すると、何も無い空間から楽器が現れ、ジルコニアの手に落ちた。

「あら、すごいわ。吟遊詩人は三人見たけど、みんなそんなことはしなかったわ」

「私、才能には自信があるの」先ほどとは打って変わった大人びた口調でジルコニアが答えた。——「これは私を取り巻く音空間に仕舞いこんだ楽器を、鍵となる音で取り出したってわけ。楽器はあまり外気にさらすと痛むからね」

期待できそうね、衣装屋の女性は心の中で思った。

「変わった楽器ね。ハープみたいに見えるけど」

「これは輪琴ディスク・ハープっていうの」

それは普通の竖琴のフレームの中に、弦ではなくシンバルのような円盤が収まったものだった。ジルコニアが鋭い爪で、円盤に刻まれた溝をなぞると、ギターを重奏させたような音色が建てられた。

「ちょっと特別製よ。これを奏でられるのは、今の時代だと私だけね」

ひとしきり楽器の調子を見るように和音を奏でてから、ジルコニアは自分を取り巻く群衆を見た。

「ま、能書きはこれくらいにするわ。ソウジ、下がっていいわよ」

——仕事モードに入ると可愛げがないな、と苦笑しつつソウジはジルコニアの背後に回った。

場の雑音が小さくなった。ジルコニアが手の中の不思議な楽器で短い旋律を奏でると、人々の顔に期待の色が宿った。

「これはある東の国、海に囲まれた数多の神々が住まう国の物語り。一人の少年が異形の怪物に追われているところから物語は始まる——」

流麗なジルコニアの歌声。ディスク・ハーブ輪琴が奏でる音色は、ヴァイオリンを何台も共鳴させたような音、彼らの知らない「笙」の音色を作り出していた。

「真紅の髪、珊瑚の瞳のうら若き乙女、颯爽と立ち現れ異形を焼きつくした。焰を使い、赤き羽衣を纏い舞うがごとく、次々と現れる異形達を乙女は滅していった——」

歌の途中でジルコニアの手が止まった。

「——？ ジル？」

彼女は椅子を蹴って立ち上がり、目の前の人だけに体当たりして分け這入った。どよめき、彼女の道を開ける人々の先に、大きな十字の描かれたマントを羽織る騎士の少年の姿があった。

「ねえ、その『教会』の騎士のお兄ちゃん！」

音無・盾おとなし じゅんという名前の教会騎士の少年は、その街の教会に定期連絡を済ませ宿に帰るところだった。

『教会の騎士』、と呼びかけられジュンの足が止まった。声はあどけない少女の物、だがそのいでたちを見て足を止めたことを後悔した。吟遊詩人——無味乾燥した生活を好むジュンにとって、芸事をする者は好ましくなかった。

ジュンは一度は足を止めたが、面倒なことになる前に去るべく歩きはじめた。

「あー、待ってよー！」

身体に釣り合わない大きな楽器をもった吟遊詩人の少女が、褐色の肌の手でジュンのマントを掴んだ。——暑いのにマントを着なければ良かったと、ジュンは内心で思った。

「ねえ、お兄ちゃん旅してるの？　そうでしょ？　あたし吟遊詩人なの。お話聞かせてよ」

「お断りだ。手を放せ、吟遊詩人。俺は忙しいんだ」

「嘘！　もうやること無くて、今日は寝るだけだとか考えてるでしょ」

ジルコニアは目付きを鋭くしてジュンを見上げた。

ジュンは男性として標準的な背丈。ソウジよりは低い。身体つきは鎧の下でわからないが、割と頑強そうだ。鈍色に光る鋼の鎧も、十字が白抜きされた茶褐色のマントも、そのいでたちは機能的な理由よりも、周囲を威嚇するような理由で作られているのではないかと吟遊詩人は分析する。肌は薄い琥珀色、パールオレンジともいう色。やや暗い色の紅い髪は後ろは短い、前は長く紫の瞳を隠すように伸びている。

天邪鬼で強がりそう、そうジルコニアは結論した。交渉は難しそう、手練手管使っても疑心が強くてすぐ見破られそうとも。——とりあえず自然体で行ってみるか。

「ねえねえ、お願い♪　お兄ちゃんかっこいいし、強そうだし、いっぱいお話してくれそう」

「失せろ。お前に話してやる話はない」

「うーん。――なら、お兄ちゃんじゃなくて、お兄ちゃんと一緒に旅をしている人でも良いよ」

「……！」

ジュンは動揺した。反射的に右手が剣の柄にかけられていた。

「驚かないでよ。あたしは『吟遊詩人』だもん。お兄ちゃんに巻^マきついている運命の旋律が、あたしには聞こえてるのよ。そして、その旋律は一人の物^{モノ}じゃない。旋律は今のところデュエット。だからお兄ちゃんの旅には、一緒に行く人がいるってあたしにわかったわけ」

宝石のぶら下がった吟遊詩人の耳は特別なものだ。ジュンは思い出した。――吟遊詩人は物理^{マテリアル}的な音以外に、人やその他の感情や、星の動き、風のささやき、大地の蠢^{ムネ}きや雲の流れ、さらには万物を動かす運命などといった不可思議な現象を音楽として耳にしている^{アストラル}と。

ジュンは目の前の幼い吟遊詩人に感心した。しかし、それでも相手にするつもりはなかった。

「失せろ、吟遊詩人。さもなければ、斬り捨てるぞ」

ジルコニアは楽しくなってきた、このやり取りに。眼の前の少年は拔身の刃みたいで、ジルコニアが揺さぶりを掛けるほどに隠されもしない殺気が伝わってくる。ジルコニアは平穩を愛するものではなかった。――今の状況は、スパイスの効いたスープのように感じられていた。

「短気だね、お兄ちゃん。そんなんじゃ神様に愛されないよ」

「お前が神を口にするな。――畏れ多い。――それに神は仰られた『汝を阻む者があれば、剣を使うが良い』と」

「あー、そうだった。デミウルゴスは嫉妬深く、戦を好む神様だったね」

チン——ジュンの剣が鞘から僅かに抜かれた。

ジルコニアは笑顔を作りながら、口の中の唾をのんだ。と、そのとき背後から自分の同行者が近づいてくるのを感じた。

「おいジルコニア、お前なにやってんだ？」

「何って、このお兄ちゃんと話してる——って、逃げられてるじゃない！ お兄ちゃんの馬鹿！」

吟遊詩人の注意が逸れた瞬間に、ジュンはすばやく彼女の眼前から逃げだしていた。

「おい、お前、歌の途中じゃなかったか。どうして途中で止めていつちまうんだよ？ その教会騎士のガキが、そんなに面白そうなのか？」

二人は人通りの多い道の中を早足で突き進んでいた。格好としては、輪琴を抱えたジルコニアが先頭に立って人々を押しつけ、その周りの人々に謝りながらジルコニアの後を追うソウジの姿があったわけだが。

マーケットであるこの道は、進むに従って人の密度が濃くなっていた。夏になっても気候の穏やかなこの街は、人いきれを感じさせない穏やかな風が吹いていた。道の両側の露店には、毛織物を売る店が多かった。染色は地味だが、織る技術がこの地方は優れている。それに構造としてのデザインも面白い。服屋に並んで多いのは肉類の食べ物屋で、ソウジはだんだん間食が欲しくなってきた。

けど、今は目の前のジルコニアに集中するか。

「わかんないの？ あたしが——この吟遊詩人のあたしが、わざわざ歌を止めたのよ？ ——それにあのキルトも。——あのお兄ちゃんは、きつとすごい物語の中にいる。それを歌うことができたなら、あたしの名前は偉大な吟遊詩人として記録に刻まれること間違いないなのよ！」

ジルコニアの血がたぎっている。

吟遊詩人は歌や物語を吟じるだけが仕事ではなかった。世界中を旅して、歴史に残すべき大きな事件や壮大な冒険に関わって、新しい歌や物語を創るのも吟遊詩人の領分だった。その創った作品が素晴らしいものなら、作品と共に吟遊詩人の名も後世に語り継がれていくのだった。

ソウジはやれやれと首を振る。齡十二歳くらいのジルコニア、だが生まれた時から吟遊詩人として仕込まれたソウジの同行者は、その生業に関しては物凄い情熱を注いでいる。吟遊とはジルコニアの本能だった。そして、ソウジはそのことを理解して、できる限り力になりたいとも思っていた。時には呆れて今みたいに首を振ったり天を仰ぎたくなることもあるが、それもまた良い。――何故なら、彼女はソウジの実の妹なのだから。

「――ここね」

ジルコニアが呟くように言った言葉は、ソウジの耳には届かない。眼前からジルコニアの姿が消え、ソウジは焦る。背の高さを生かして周囲を見渡し、右手にあった人の流れが乏しい横道に飛び込むジルコニアの姿を見つけ、慌てて後に従った。

横道の、さらに横道、石造りの家々の外壁に囲まれた涼やかなせまい路地裏に、背筋を伸ばして行儀よく歩くジュンの姿があった。

――真面目そうな奴だな、めんどくさそうな奴、ソウジの抱いた第一印象はそんなものだった。

「ソウジお兄ちゃん、あれ、つかまえて」

「――放っておいてやる、とかは、無し？」

ソウジは、ジュンがジルコニアと関わることで与えられるであろう様々な気苦労を予想し、憐れになって提案した。

「お兄ちゃんっ」しかし言外に却下された。

ソウジは頭を掻きながら、自分より少し背の低い、ついでに年齢も低そうな憐れな犠牲者に歩み寄った。

「よお——」「何用だ？」

棘のある声だった。ジュンは踵を鳴らして立ち止まり、勢いのある動作で振り返ってソウジを睨み据えた。

嫌だな……とソウジは苦々しく思った。

「悪いけどよ、その、お前にちょっと用があるって奴がいて。……ていうか、俺の妹なんだが」

「教会騎士のお兄ちゃん。さっきは逃げちゃって酷いじゃない」
ジュンの太い眉が顰められた。

「またお前か……。お前に話してやることはない。あっても俺は話さない。ついでに、俺は神に仕える者として、逃げるなどという聖典に逆らう行いはしない」

「はいはい。——でね、お兄ちゃんじゃなくても良いって言ったよね？　どんな人かはさすがに分らないけど、その人と会わせてくれるだけで良いんだけど」ジルコニアは食い下がる様に言う。

「断じて否だ。むしろ、あいつにこそ、お前のような口さがない連中を近づけるわけにはいかない。——去れ」

「えー、でも……」

押し問答だった。ソウジは溜息をつき、剣呑とした空気から意識を逸らそうと、手に持った長棒の布の包み具合を確かめてみることにした。

柔らかくなるように編まれた麻布の包みを一通り点検し終わっても、まだジュンとジルコニアの問答は続いていた。ただ、ジュンの雰囲気は刻一刻と悪くなっていた。——これ以上放置すれば血を見ることがなるかもしれない。

「そこまでにしろよ、ジルコニア」

ソウジは小さい吟遊詩人の肩に手をかけた。

「でも……」

「お前の詩人守護者の言う通りだ。もう帰れ」ジュンが冷たく言っ

た。

そのとき、ジルコニアの瞳が、ぎらりと危険な光を放った。――ようにソウジには見えた。

「やめろジルコニア――」咄嗟に牽制しようとする。彼女は輪琴の円盤の上に指を這わせようとしていた。

吟遊詩人の歌と音楽は、単なる音楽以上の、特殊な現象を起こす力でもある。

だがジルコニアが奏で始める前に、ジュンが先に行動していた。

『聖グレゴリウス！ 清らなる聖歌を、ここに！』

聖句と共に腰の聖符を地面に叩きつける。パァン、とその音は見た目の現象にそぐわず高らかに、威厳を持って鐘の音の如く響き渡った。

「――うあ！」

ジルコニアが楽器を取り落として耳をふさいだ。

その隙を突いて、ジュンは走り去った。

「おい、どうした？」

ジュンがすっかり走り去るのを見届けてから、ソウジは耳を押さえてしゃがみ込むジルコニアに声をかけた。ソウジには今の瞬間に何が起こったのか感じられなかった。羊皮紙の聖符がずいぶん大きな音をたてたな、くらいの認識しかなかった。

「音波攻撃よ。あのお兄ちゃん、吟遊詩人の耳のことを少しは知っているみたいね。逃げる時に足音を追われないように、あたしの耳を塞いで行っただの」

「よく分かんが、あの札の効果がそういうもんなのか？」

「あの聖符は、狙った対象の耳だけに大きな音、それも音域が広くて更にはアストラル的な振動まで伴った音波を叩きこめるみたいね――やってくれるじゃない」

ジルコニアがおそるおそると耳から手を離した。そして取り落とした輪琴を手にとって構えなおし、天然木のフレームに頭を預けて眼を閉じた。

小さな指が楽器の円盤をなぞり、微かな音が響き始めた。――ソウジにはそうとしか聞こえない。もう一年半共に旅をしてきたけれど。

「見てなさいよ。吟遊詩人が、この私が、本気になったら聞くことのできない音楽なんてありはしないのだから。私の耳は絶対に逃がさない」

a c t 1 「吟遊詩人とその従者が（後書き）」

今回は説明少なめで行くつもりです。

しかし詩人^{コーダ}守護者のソウジ君のことですが、すっかり従者あつかい
です。

騎士と独り子を捕まえ

ギシ、ギシ、

木造の階段を上がる、重々しい足音が響いていた。階段が軋むのは構造が弱いからではない。上を歩く者の履いた鉄製のブーツに、階段が抗議の声を上げているのだった。ここは三階建ての宿屋の、三階に続く階段。宿自体の作りはしっかりしていて、廊下の隅に置かれた花や、白い紗のカーテンが揺れる窓などには慎ましながら高級感が漂っていた。

「チツ……あんなやつらに聖符を使ってしまうとはな」

不機嫌に十字の描かれたマントを揺らしながら、ジュンはひとりごちた。――街を出る時に支給してもらわなければいけない、と。

『聖符』とは『教会』で使用される『聖霊魔術』――あるいは『法術』や『霊術』とよばれる魔術の一種――を短時間で発動させるために使用される、羊皮紙に聖句を記した札のことである。羊皮紙とインクは聖別されたものであり、教会でしか製造されない消耗品なので支給品とされている。使用を許可されるのは上級の教会騎士のみであり、例え持っていたとしても、ある程度の信仰心と魔術の知識が必要で、使いたい魔術は聖符なしでも使えなければ使用できない。主に教会付きの魔術師――神父とか呼ばれる――が使用するが、ジュンは剣士でありながら魔術の知識も持ったために聖符を使用できる、教会でも有数の騎士であった。

――聖符の使用と剣術だけが彼の能力のすべてでは無いが。

窓から街を臨むことのできる、広い廊下を歩いて、ジュンは取った部屋の前に立った。さきほど会った者達のことを振り返り、この部屋の中にも同様に頭の痛い人物がいることを考え、ジュンは僅かに戸を開くことをためらった。――しかし気晴らしに街にでるという状況ではない。街に出れば、確実にさきほどの吟遊詩人にはちあわせるだろうと、彼は苦々しく思った。

「あ……ジュン、おかえり」

迎える言葉は、大人しげなものだった。——そう言えば『こいつは熱を出して寝ていたのだと、ジュンは安堵しながら思った。

「ねえねえ、おみやげは？」

「あるわけないだろ。黙って寝てろ」

話しかける人物と目を合わさず、普通より少しひろい部屋の隅に移動。壁にマントを引っ掛け、胸当て、胴巻き、鋼のベルトを甲冑用のハンガーに引っかけて、黒い肌着姿になってから自分のベッドにどかっと腰かけた。

「お疲れ？」

「ああ、変な連中に会って……いや、そんなことはどうでもいい。とにかくお前は寝てろ。明日には出立するんだから」

「さっきから『寝てろ』しか言ってもらってない」

そう言いながら、彼女は枕に預けた顔をほころばせていた。

ジュンのベッドと、ワインテーブルを挟んだ向こう側にあるベッドに寝ているのはうら若い少女。ターコイズ色の明るい瞳、小さな鼻に薄い紅色の唇、色白の瓜実顔は美人というほどでもないが見れた物だと、ジュンは高飛車に思う。——彼の好みとは多少違うのだ。——白い寝具の上に寝乱れて広がる長い金髪は、陽光に透けて煌めく金色の麦畑を連想させる。細い眉、細く白い指は少女に可憐な雰囲気を与えていた。

「ああ、そうだ。神恵、カミエこれを飲め」

七那瀬・神恵ナナセ カミエというベッドに伏せる少女に向かって、ジュンは懷から取り出した丸薬の入った袋をほおり投げた。

「ちよっ……よつと。——ジュン！ 投げるなんて酷いじゃない」

慌てて起き上がり袋を受け取ったカミエは抗議した。

だがその瞬間には、ジュンは興味を失ったように布団の上からベツドに横たわっていた。

「もう……」カミエは嘆息しながら受け取った小袋の中を見る――
「これ、薬？　もしかして私に？」

「魔術師が自分の発散する魔力を隠すために使う薬だ。飲みすぎると体内の魔力の流^{アストラル}れが阻害されて、魔術が弱くなる。つまり、お前の莫迦みたいなポテンシャルを封じることができるんだ」

「うわぁ……私のためにお薬を持ってきたんだ。嬉しい！」
カミエは心底うれしそうに言う。

「お前のためじゃない。俺が卒なく任務をこなすためだ。わかったらさっさと飲め」しかしジュンは釣れなく答えた。

ちらり、変わらずベッドに仰向けになりながら、ジュンはカミエの方を横目で見た。

ごくりと思わず唾をのんだ。――その美しさに。

通りに面した窓から差し込む陽光に、カミエの金髪が極細の金糸のようにきらめいている。そして、その細やかな金の髪は、熱で汗ばんだ白い肌になまめかしく纏わりついていて、鬱陶しげに髪を整えているカミエの姿は妖艶だった。白いふんわりとしたランジェリーの下の身体のラインは良くわからないが、胸は程よく小さくかった気がする。露出した、汗の雫が輝いている鎖骨や、なめらかな首筋などは申し分ない美しさを持っていた。

「あ……でも、水がないよ。ジュン、お水」

人間離れた美しさ。――まあ、確かに人間じゃないからな、とジュンと思った。そのように思考に耽^ふつていて、カミエの言うことを聞いていなかった。

だから、気付かれた。

「ジュン？　――えへへ……さては欲情したな？」

「――！」

ジュンはすかさず、顔を天井に向ける、さりげなく。

上を向いた視界の中に、カミエの顔が入ってきた。

「別にいいんだよ？　見たって。せっかく一緒の部屋なんだもん、色々しようよ。色々。私はジュンのことが好きだから、何されたっ

て良いって言ってるでしょ？」

「……その台詞は聞き飽きた」

覆いかぶさっていたカミエを押しわけ、ジュンはベッドから立ち上がった。――心臓が、少し早く鼓動していた。

「水だな？ 待ってろ」

「服脱いで？」 おどけた口調。だが――本気だ。

「……馬鹿なこと言っていないで、大人しく自分のベッドに潜ってろ」

「あはは。そうですか」

――どうして同じ部屋かといえば、カミエを見張るのがジュンの仕事だからだ。

ジュンにとっては、カミエはあくまで仕事上の付き合いだ。言い寄られようと、誘惑されようと、何もすることはない。これまでも、これからも。ジュンが知る限りでは、カミエは処女だった。

――無垢なる大量殺戮者、か。

そんなシニカルな表現に、外行きの服装を整えながら、ジュンは密かに口元を歪めた。

「はあい。お兄ちゃん、また会いに来ちゃったよ」

上品なレリーフの施されたマホガニーの戸が開き、姿を現した騎士にジルコニアは明るく声をかけた。

「……」 ジュンは思わず凍りついた。声が出なかった。

「何？ 聞いてたのか、て？ ——大丈夫、聞こえたのはあたしだ

けだから。でもお兄ちゃん、そんな声の素敵な女の子を相手しないなんて。——もしかして、奥手？ 剣にしか生きてないとか？」

「——！」

ジュンの手が腰の剣にかけられ、ほとんど反射的な動作で抜き放たれた。

このときジュンは本気で剣撃を放ってしまった。寸止めのための呼吸を忘れていた。真剣を振りながら紙一重で止めることは、一流の剣士であるジュンには容易いことだが、感情的に剣を抜いてしまったのが失敗だった。——この子供も終わったな、そうジュンは諦めたした。——吟遊詩人を「教会」の騎士が斬ったとあれば「詩会」の連中が黙っていないだろうが、仕方ないことだ。

だが次の刹那、高級感漂う宿で散ったのは少女の血肉ではなかった。

キン——！ ジュンの白刃は、木製の柄の槍の穂先と火花を散らし、弾かれた。

「槍か……！」

小声でつぶやき、ジュンはバックステップして槍から距離を取った。

「おいおい、今の本気じゃなかったか？ お前、そうとう短気な奴なんだな」

軽い口調で言うのは、ジルコニアの背後に控えていたソウジ。彼の手には、白い布が半分ほど解けて姿を露わにしている槍が握られていた。

ジュンは感嘆した。ソウジはおそらくジュンが剣を抜くことを予想していなかったはずだ。しかし剣が抜かれてから反応し、咄嗟に槍を突き出しても柄の部分で剣を受けずに、冷静に刃の部分で剣を弾いたのだ。それも、あの二メートル近い長物を使うには不利な屋内で、正面にジルコニアを置きながらにして。

ジュンは剣を握りなおした。——戦うために。

だが相手は、どこまでも力を抜いた態度だった。

「まあ、そういきり立つなよ。気持ちは分かるが、お前も大人げないぜ。クールに行こうぜ？」

ソウジは軽々しくそう言っ、槍を布に包み直しはじめた。

「あー、びっくりした。お兄ちゃん、ひどいよね」

平然としたようすの目の前の二人。ジュンは舌打ちしながら剣を収めるしかなかった。

「悪かった。騎士たる者の威厳を損ねてしまうところだった」

「ううん、いいのいいの。お詫びにお話を聞かせてくれればいいんだから」

——結局はあの子供の言いなりか。

喰えないやつ、そうジルコニアを見ながらジュンは思った。——だが、真面目一本のジュンが、口八丁のジルコニアに敵う道理は始めからなかったのだった。事態を傍観していたソウジは思う。

「……わかった」ジュンにこれ以上の拒否は無理だった。——「下のカフェに行くぞ」

えー、とジルコニアは抗議の声を上げる。

「お兄ちゃんの部屋がいい！」

「駄目だ」

「でもー！」「大声を出すな！」

「ジュン？ さっきから何を騒いでるの？ 誰か来てるの？」

部屋の中で一部始終を静観していたカミエだったが、ここでついに声をかけた。

ジュンにしては、これが最も恐れていた事態だった。身体で戸口

をふさぎながら、カミエに向き直った。

「何でもない」

「お客さんなら入れてあげれば良いのに」

「……お前、それ以上余計なこと言ったら、今晚は口きいてやらんぞ」

「いつものことじゃない」

カミエが立ち上がった。戸口の向こうにいる男性——ソウジのこ
とだが——を憚ってか、下着姿の身体をシートで包んでいる。

「クソ、こつち来るな」

「もう、黙って聞いているのも飽きちゃった」

ジュンは進退極まった。部屋に入れば、背後の者達が侵入してく
る。部屋の外に出れば、カミエが出てくる。

これを見ていたソウジは、名前をまだ知らない少年のことがとて
も気の毒になった。しかし、彼が状況を動かす権限は一切ない。

と、カミエがたたたらを踏んだ。あ……、と儂い声を上げ、彼女は
床にへたり込んでしまった。

「——チツ、カミエ！」

状況を忘れ、盾は神恵ジュンに走り寄った。汗で甘い体臭を放つ彼女の
身体を抱きあげ、力強い腕でベッドに運んだ。

「やさしい……」

カミエは熱に浮かされ、輝きの乏しくなった瞳でジュンを見上げ
た。

「黙れ。——だから大人しくしていろと言ったんだ」

ジュンはいくまでも、煩わしい物を扱うように、憎々しげに言っ
た。

「ふーん、アストラル力の暴走かぁ。お姉ちゃん、良く抑えてるね。
本当だったら、とっくにこの宿屋なくなってるよ」

「マジ？ 風邪じゃねえの？」

「違うよー。——って、ソウジお兄ちゃん、何でついてきてるの？
ついてくるのは良いけど、女の子が寝てるんだよ？ 変態！ あ
っち向け！」

すかさず部屋に侵入して、カミエの枕元まで寄ってきた二人がそんな話をしていた。

変態、と言われソウジは傷ついた心を押さええて一同に背を向けた。

「お姉ちゃん、大丈夫？ 騎士のお兄ちゃん、このままじゃお姉ちゃん
は長く持たないよ」

「クソ……なら急いでこの街を出るぞ、カミエ」

「うん……そうだね……」

このような事態は何度もあった。その度に、死人はいないにしろ、
建物の破壊と軽傷者を出してきた二人だった。

ジュンはカミエを抱き上げようとする。だが、その上にジルコニア
が覆いかぶさった。

「駄目だよ！ お兄ちゃん、頭おかしいんじゃないの？ ——あた
しに任せて」

「貴様！ いい加減にしろ！ 本当に殺すぞ！」

ジルコニアとジュンが睨み合う。紫の瞳と、トパーズの瞳の間で
火花が散るのを見て、ソウジは頭を掻き耑った。

「やめろやめろお前たち。病人の前だろ、静かにできないのか？」

背丈が大きく、手足の長いソウジが、二人の額を抑えて引き離し
た。

「ジルコニア、お前の言うことはもつともだな。けどよ、こいつは
頭が固いんだ。あまりむきになるな」

少女は唸りながらも引き下がった。

「それとお前——ジュンって言うのか？ さっき言っただろ？ ク
ールになれって。格好悪いぞ」

「貴様に何がわかる。これは俺達の問題だ」

「はいはい。でもよ、ここは紳士にいこうぜ。魔術のことは俺はよく
知らんが、ここにいるチンチクリンのガキは吟遊詩人だ。吟遊詩

人といえば怪我や病気を治すこともできる。どうだ、試してみないか？ 何、時間は取らんよ。そのあとどうしようも無かったら、好きにしてくれ。誓ってもう二度とお前達に関わらない」

ジュンは歯軋りした。

だが道理はソウジにある——ジュンは認めざるえない。自分の態度も言動も、すべて理不尽。理不尽は結構だが、カミエの様子はそろそろ本当に限界だ。薬を飲ましても今すぐには利かないだろうし、街を出るにも間に合うかどうかわからない。途中で暴発されたら、事態はさらにまずいものになる。なれば——ここは吟遊詩人に賭けるしかなかった。

「宿の人払いをしてくる」

本当は頭を冷やしたいだけだが。

ソウジはそれを理解したが、あえて言った。

「ま、ここにいろよ。本当にすぐだから。——ジル」

「ん、おっまかせ！」

ジルコニアはカミエの横たわるベッドの縁に腰かけ、輪琴を構えた。

ソウジとジュンは、反対側に立ちそれぞれベッドから距離を取り、二人の少女を見守ることにした。

「大丈夫？ ——七那瀬・神恵？」

ジルコニアは彼女の『音』を聴き、誰も教えてない彼女の名前を知覚した。

「カミエ、あなたの中のアストラル力の流れを、このジルコニアが調弦するわ。呼吸を整えて、私の音を聞いて」

朦朧としたカミエの意識に、ジルコニアの声が明朗に響き渡った。カミエは、あまり判断できない頭で肯いた。

「いくよ——tuning」

聴こえるか聴こえないかぎりぎりの低音から、ゆっくりと上の可

聴音まで音階が奏でられる。ジルコニアの指は輪琴の円盤の、端から端へと静かに移動している。部屋中の物がそれぞれの固有周波数で共鳴し、カタカタと震えた。

「あなたの音——これね？」

高いシの音が響いた。ジルコニアの小さな指が円盤を一突きすると、音叉のような音色でポーン……と響いた。それは穏やかな波紋のようにカミエの身体に、精神に広がり、やがて彼女の中で荒れていた力を鎮めさせた。

一度音を弾き、音が聴こえなくなるとジルコニアは指を輪琴から離し、ベッドからピヨコンと飛び降りた。

短いな、ジュンは思った。

「カミエ——気分はどうだ？」

呼び声に、カミエの瞼が開かれる。むくりと身を起こし、愛らしく彼女はほほえんだ。

「すごく良い……！ 詩人さんってすごいんだね」

「まあねー！ あたしは未来の大吟遊詩人だもん。これくらい当然！」

すっかり子供の口調に戻ったジルコニアが、誇らしげに胸を張って言った。

カミエは恥じらうように眼を伏せながらジュンを見た。

「ジュン……ごめんね」

「謝ってもらうことはない。——それより、その馬鹿みたいな恰好をどうかしたら良いんじゃないか？」

「あ……！」

バツとソウジを見て、カミエは下着姿の身体をシートで隠した。

——ソウジといえば、賢く後ろを向いていたが。

「おら」

ジュンは荷物の中から、カミエのリンネル生地のカーディガンを出して手渡した。

「ねえねえ、旅してるんでしょ？ お話聞かせてよ。お姉ちゃん、何者？」

ジルコニアがカミエのベッドに手を付き、身を乗り出して会話を始めた。

「そうねえ……」

カミエはジュンを憚る様に見上げる。

ジュンはいえ、もはやこの場の主導権を失った形なので、何も言うまいと黙っていることに決めていた。

「うーん、でも、私が何者かって、一言でいう言葉はないよね」

「大罪人、殺戮者——だな」ジュンが素っ気なく答える。

「うん、そんな感じ？」カミエは軽い口調で、その恐ろしい言葉を肯定した。

「それは、何かの喩え？」

「ううん。本当の話。私は自分の生まれた町の人達を一瞬で皆殺しにした……らしいから」それに関するカミエの記憶は曖昧だった。しかし、状況からしてそれは確実だった。——「そうだ、その前に名前を聞いてないよね。私は七那瀬・神恵。あなたは？」

「あたしはジルコニア。——本名は知らない。あっちの背の高いのはあたしの詩人守護者で織深・奏治」

「じゃあ——ジルちゃんね」カミエが明るく言う。

「あ、それいい！ じゃあ、お姉ちゃんは……ナナお姉ちゃん？」

「うん、それがいいね。よろしくジルちゃん。それで——詩人守護^コ」

者って何？」

ジュンは知っていたが、一般人なら知らない者も多い。

「詩人^{コード}守護者っていうのは、吟遊詩人の世話をしてくれたり、お金を稼いでくれる人のことよ。吟遊詩人は自分でお金を稼いじゃいけないって知ってる？ 物をもらうのは良いけど、それだけじゃ世の中歩けないからね。それに、コードと吟遊詩人の中には魔術的な契約があるから、戦いの時とかに吟遊詩人が支援することができるの」

「へえ……」感心しながらカミエはソウジの、その背中を見る。――

――「よろしく、織深^{しきみ}さん」

「よろしく」背中越しに彼は答える。

「お兄ちゃん？ いつまでも後ろ向いてないでよ」

彼が一同に向きなあった。

「よろしく、カミエ。俺のことはソウジで良い。俺もそっちのことが名前で呼ぶから」

「うん、わかったソウジ。――あ、そうそう。こっちの無愛想で、ちつとも自己紹介しようとしなのは音無^{おとなし}・盾^{じゅん}だから」

紹介されたジュンは、険しい顔で一同を見る。

「よろしくジュン」

「……」ソウジの言葉にジュンは答えない。

「本当に無愛想。気が短くて、奥手で。――童貞じゃなさそうだけど。――ナナお姉ちゃん、でもこのお兄ちゃんのこと好きなんですよ？」

「わかる？」

カミエがにやりとした。――わからないほうがどうかしている、ジュンは密かに思った。

「ジュンは私のナイト様だからね。私だけの騎士なの。素敵じゃない？ なかなかつれないけど、それも可愛い」

「誰が可愛いって？」思わずジュンが言ってしまった。

「お前のことだろ。ナイト様」

「貴様……！」

「はいはいそこまで」ジルコニアが仲裁の言葉を投げた。

どうやら男二人は相性が悪いみたいね、幼い吟遊詩人は思った。
二人から意識をそらし、居住まいを直し、一息ついていよいよ本題に入ることにする。

「じゃあお姉ちゃん、お姉ちゃんはどうして旅をしてるの？ 何処を目指してるの？」

カミエが口元を歪めた。――妖しく、あるいは皮肉っぽく。

美しい金の髪を弄って、彼女は考えるような仕草をした。

「知りたい？」

「知りたくなかったら、聞かない」

「じゃあ教えてあげる。私たちは、私は――」

「自分を殺すために旅をしてるの」

「ああ？ 今、なんて言った？」

素っ頓狂な声を上げて驚いたのは、ソウジだった。

「あいつははっきり言っただろ。詩人付きの守護者は耳が悪いのか？」
「険のある声でジュンが言う。」

「いや……そんな……訳わかんねえ。――冗談だろ？」

ソウジは戸惑いながらジルコニアを見た。ジルコニアは相変わら

ず微笑していたが、目には何の感情も無かった。

カミエはベッドの中で上半身を起こしながら、悠然と一同を眺めていた。

「話すと長いけどね——もう判ったと思うけど、私は普通の人とはちよつと違う力を持つてるの。この力は私の手には余る。勝手に暴走してあちこちを壊してしまうときもある。壊すのが物ならまだ良いけど、人だったら取り返しは付かない。封印できれば良いけど、誰がやっても、何人集まってもそんなことはできない。私を殺そうとしても、うかつに殺したら力が溢れて何が起こるか分からないからできない。——でね、私の中の力が、神様が囁くの。『北へ来い』って。——北には、ずっと北には雪と氷に閉ざされた、年中白夜の土地があつて、そこに——私も良くは知らないけど——訪れた者を飲み込んでしまう場所がある。特に、私のような人間をきれいさっぱり殺すための場所が。——だから私はそこに行くの。私が私を殺すために。もう誰も傷つけないために」

彼女はあくまでも淡々と、微笑さえ浮かべて語っていた。——自らを滅することが、当然であり悲しむべきことなど何も無いかのよう。

ジュンは眉間を深く顰めてその話を聞いていた。

すっかり表情を無くした能面のような顔で、すべてを見透かそうとしているジルコニアがいた。

そして、憤り、手を小さく震わせているソウジ。

「そんなの……そんなの、ありがよ——！」

ガタン——椅子を蹴飛ばして立ち上がったソウジは、カミエのベッドの向こう側にいたジュンの前まで歩みよった。

自分より背の高い、褐色の肌の男——その威圧的な風体を、ジュンは冷ややかな目線で見上げた。

「お前……お前、どうしてそんなに冷静なんだ？ あんな女の子が

自殺することが、当然だと思ってやがるのか……!？」

激情を押し殺した声で、ソウジは問いかけた。

「お前に何がわかるんだ？」ジュンは凍りつくような声で問い返した。――「あいつは、自分の力で生れ故郷を根こそぎ焼きつくした。ついでに、それを止めに来た教会騎士六名の手足をもいで不具にし、三名の心に拭うことのできない恐怖を植え付けた。どいつもこいつも、将来有望な連中だった。――合わせて千百八十七名。その分の未来を奪った――奪ってしまったあいつの後悔が、お前にはわかるのか、詩人守護者？」

「……っ」

騎士は必要以上に言葉を重ねることはなかった。

ソウジは言葉をなくす。言葉は無くなったが、まだ感情はくすぶっていた。――今にも掴みかかりそうな様子で、彼は立ちつくす。

「奏治、大概にしなさい。――あなたは吟遊詩人たる私の従者なのよ？ 物語に心動かすことは許すけど、それ以上の行動に走ることは、私が許さないわ」

感情という音色を失くした、機械のような声でジルコニアが言った。

ジルコニアはカミエの横顔を見続けていた。ソウジが憤りを露わにしても、眉一つ動かさない美しい少女の横顔を。

そして誰もが黙り込んでしまう。

沈黙――

と、窓の外が不自然に騒がしくなってきたことに、その場の四人すべてが気付いた。

カンカンカンカン——早鐘が叩かれ始めた。

「警報——！」

早鐘は教会が鳴らす物。教会騎士たるジュンが立ち上がり、窓の外に頭を出して様子をうかがう。

「何事だ？ ……チツ、行ってくるか。カミエ！ お前はついてくるなよ」

「うん、わかった。行ってらっしゃい、私の騎士様^{ナイト}」

装備一式、街を歩く時も持っていなかった盾さえ手にして、音無^{おとなし}・盾は出撃した。

—— 騎士と独り子を捕まえ（後書き）

これくらい長く書くのは久しぶりなので、まだ不調子です。
今回は下書きがなかったり推敲が少なかったりします。

旅の同行を交渉する件

宿から少し離れたところで魔獣モンスターが出たらしい。

ジュンは逃走してくる人間を捕まえて情報を仕入れた。現場にはすでにこの街の教会騎士や自警団が出向いているらしく、人々の避難は速やかに行われているようだった。

教会は存在する地域一帯を護る働きを持っている。いわゆる「教会」とは世界に数ある宗教の一つなので、信仰の理由で教会のない街も存在する。しかし教会のあるところ教会は比較的篤く信頼され、信徒になる者も聖職者を志す者も多かった。

ジュンもまた、人々を護るという教会騎士の一面に共感して騎士になった人間である。両親は教会の信徒ではなかったが、教会騎士となった彼は、無辜の民を護ることには静かな情熱を持っていた。

——神の名を唱え、人々を護る、能力も振る舞いも立派な音無・盾は、教会騎士クルセイダーの鑑だった。

総じて十二キロの装備を身につけ、全力の八割くらいで現場まで走った。だんだん近づいてくると、普通の魔獣とは違う——どろりとした気配が漂ってきた。それは魔獣の中でもかなり特殊なもので、滅多に現れない「もの」だとジュンは知っていた。だが、一たび現れれば並みの戦士では歯が立たない。

嫌な予感だった。

しかしジュンは恐れずに最後の角を曲がり、戦闘が繰り広げられている路上に躍り出た。

果たして、そこにいるのはジュンの予想した通りの「もの」だった。

「混沌獣……！」
カオティツク

闇を纏う、昆虫と哺乳類の合いの子のような異形のモンスター。それらの姿を確認したとき、ジュンは思わずその名称を口にした。大きさはそれぞれ違う。一応の形態はあるが、身動きするたびにその動作に合わせるように身体の形が変わる。影が濃く、動いたあとにもこびりつくように闇が残っている。――絶望と、呼ぶにふさわしい禍々しいモンスターでもだった。

十名の騎士が分隊を作り、十五体ほどのそれらと交戦していた。剣兵が三、槍兵も三、神父の装いをした魔術師が二人に弓兵が一人。最後の一人は他と少し違う修道士フラザーの装いした大男で、身体と同じくらしい宝石の嵌められた大斧を持っていた。分隊の者達は果敢に闇をまとうカオティックと呼ばれるモンスターに果敢に挑んでいたが、効果は芳しくないようなのは一見して明らかだった。

――彼らはカオティックのことを知っているのだろうか？

カオティックは通常のモンスターとは違う肉体構造を持っている。彼らを攻撃するには強力なマテリアルの攻撃か、もしくはアストラルの属性を持つ攻撃でなければ通用しない。だがアストラルに影響を与えるのは、魔術の中でも小さな一部にしかすぎない。――このことを知っている者達はカオティックと正面切って戦おうとはしないはずであるが、目の前の騎士達は物理武装と中程度の魔術をもつて果敢に戦い続けていた。

ジュンは目の前の敵勢力を観察した。

飛ぶものはいない。狼ほどの大きさのものが七、熊ほどのものが六、豕ほどの蠍の形の一つに、ティラノサウルスみたいなのが一体いた。どれも攻撃されれば返してくるが、本気にはなっていないようだった。

状況を見極めたジュンは、剣と盾を構えなおして歩み出た。

「おい、ここの指揮は誰が取っている？」

戦いから一步退いた場所で全体の指揮をとる、斧を持った大男を捕まえ、ジュンは問いかけた。――昼前にこの街の教会を訪ねたが、

その時には見なかったなと思いつつ。

「私だ」彼は唸る様に答えた。――「私はブラザー政清。ここの主教を務める者だ」

「そうか。俺は音無・盾。特級十字騎士だ。お前がここの指揮を取っているなら、職権を発動して今から俺が指揮を取る」

いいな、とジュンは鋭く問う。

ジュンに比べれば位階のひくいブラザー政清は、若い騎士を訝みながらも、その彼を認め一礼した。

「まずは隊列を整えるか……」

自分たちより数の多い敵に、騎士達はすっかり分断されている。放っておけば遠からず全滅する。

『則を超え、神の巷に彷徨いでたる魍魎魍魎。聖ヴァルプルガよ、彷徨う者達を炎で包み退け給え』

低く構えた剣を地面と平行にゆるく振ると、切っ先から赫い炎がほとばしりジュンの眼前にあるすべての敵を包んだ。

騎士達も炎に巻き込まれたが、熱に焦がされることはなかった。何事かと戸惑い、彼らは周囲をきよろきよろと見回した彼らに、ジュンは集合の合図を出した。

「俺は特級十字騎士だ。今からお前達は俺の指示に従ってもらう。いいな？」

集った自分よりも年上の騎士達を前に、ジュンは昂然と宣言した。

騎士達はみな得心が行かないようだった。しかしジュンの位階が確かなので逆らうわけにはいかず、これを受け入れた。

「知らない者もいると思うが、あいつらは混沌獣——カオティックだ。奴等にマテリアルの攻撃は効果が薄い。魔術、聖符なら多少効くから使える者はそれを優先しろ。それと、まだ負傷した者はいないようだが、あれの攻撃には毒がある。負傷したらすぐに撤退しろ。——無理はしないでいい。俺が戦うから、お前達は奴等が逃げないように見張りながら、俺の援護をしてればいい。わかったか！」

傲慢とも言えるジュンの言葉。だが、この場でカオティックと渡り合えるのはこの若い騎士をおいて他にいないと、騎士達は理解した。

「剣と槍を持つ者は路地を固めろ。ブラザー、お前は弓兵と魔術師を護ってろ。弓兵と魔術師は俺の援護だ」

「はっ。かしこまりました、特級十字騎士殿」

指示をしているうちに、一団となった騎士達をめぐってカオティックが集まりはじめた。指示された剣兵と槍兵はカオティックの横をすり抜け、防衛を務めるため道の分岐点に立った。

ジュンは剣の切っ先を迫りくるもの達に向け、聖句を唱えた。

『聖エラスムスの焰、神の怒りたる蒼き雷により、我が剣に魔を払う力よ宿れ』

バシッ—— 一条の雷がジュンの剣の切っ先を打ち、刃全体をプラズマのような青白い炎が包んだ。

「それは——聖剣技ですか？」

ブラザーが問う。

ジュンは彼に背中を見せたまま答えた。

「ああ、俺は魔法剣と呼ぶ方が好きだがな。これがあれば、マテリアルとアストラル、両方の攻撃ができる。——さあ見てろよ、奴等との戦い方を！」

まずはじめに四足の小さめのカオティックが三体、ジュンをめぐって走り寄ってきた。

闇で出来た身体の中から、無数の鋭い触手が打ち出される。ジュンは左手に持った鋼で裏打ちされた盾でこれを逸らし、黒いモンスターに肉薄した。

一体がジュンを向かい撃つように飛び上った。すばやく、黒い残像にしか見えない。しかしジュンは冷静にこの動きを見切り、その軌道上にプラズマを纏った刃を構えた。

ズーと、剣で切りつけても形を変えるだけのカオティックが、柔らかいゴムのように切り裂かれ、再生せずに塵となった。

足元から別の一体が、身体の側面から百足のような大きな牙を生やし、迫る。

ジュンの刃が、カツン……とカオティックを切り裂き、勢いのまま地面に突き刺さった。さらに返す刃で一体を切り裂いた。

流麗、そんな言葉が似合う彼の剣術。刃が纏うプラズマの光が、その鮮やかな剣筋に光る残像をつくり、さらに美しく彩る。後ろの騎士達からは、溜め息のような感嘆が漏れた。

ジュンの動きは止まらなかった。突進してきた大型のカオティックを軽く避け、横腹に一閃。振り返りざまに上段からの一撃を加え、滅した。

バサー——十字を印したジュンのマントが華々しく翻った。

「素晴らしい……あつという間ではないか。それにあの魔法剣、まだ持続しているぞ」背後でブラザーが言った。

魔法剣の難しいところは、剣術と魔術をどちらとも修めている必要があるところではなく、発動させた効果を立ち回りの間も保ち続ける必要があるところにある。精神の刃で斬る——そのように言葉にされる魔法剣は、並はずれた集中力と攻撃性を必要とする。——その魔法剣を操ることこそ、ジュンの本当の強みだった。

と、そのときジュンの視界が翳った。楯を頭上に構えると、とてもなく重い一撃が降り注いだ。

「チッ……！」

潰される前にジュンは後退して逃げる。

視界に入る恐竜のようなカオティック。

「十字騎士殿を援護せよ！」

声が飛び、それと共に魔法の矢が飛んできた。闇の竜がわずかにたじろぐ。

だがジュンに迫る敵はそれだけではなかった。大型のカオティックが二体、彼を押しつぶさんと砲弾の如く飛びかかってきていた。身体に沁みついた反射的な動作で、ジュンはベルトに打ちつけてある聖符の一つを引き千切り、聖句を唱えようとした。

が、そのときジュンは違和感を感じた。

「音無殿——！？」

若い騎士が動きを止める、そのことに街の教会騎士の指揮を執っていた男が疑問の声を発した。

ジュンは構えを崩さず、黒い砲弾と化した二体の敵が落下しきるのを見届けていた。すると、二体はジュンの上ではなく、彼のすぐ横の地点に重なり合うように落ちた。

フウケッセン
『風穴閃！』

二体のカオティックをまとめて槍の一閃が貫いた。一閃は闇をまとうモンスター^{モンスター}の身体に大砲で撃ちぬいたように大穴を開け、そのまま滅ぼした。

「織深・奏治か……」

「おうよ、助太刀してやるぜ」

後衛をつとめていた騎士達を飛び越え、颯爽と現れた長身の男。剥き出しの褐色の腕の筋肉がたくましく隆起していた。彼の右耳では、詩人守護者であることを示す音楽記号^{コード}の形をしたピアスがキラキラと光っていた。

——ということとは、

ジュンは控えている騎士の一団を見やる。と、小型のカオティツクが二対、全体に不釣り合いな大きな角を顕わして彼らに迫っていた。

ブラザー政清が手に持った大斧を横に構えた。

「神よ、我が戦いを祝福したまえ。——ぬう！」

豪快な一撃が二体を打ち据える。身を大きく削がれたカオティツクは、傷口から蒼白い炎をチロチロと出しながら塵となった。

「おみごとです、政清殿！」神父姿の一人がブラザーを讃えたが、「ちよっと、それは私の戦果よ。私があいつらの再生を音楽でとめているのよ」彼らの背後から声が割り込んだ。

騎士達の間を割って現れたのは、輪琴を抱えた幼い吟遊詩人。琥珀色の形のよい指は、いつでも輪琴を奏でられるように円盤の上におかれている。——さっき敵の動きが狂ったのも彼女のせいだろうと、ジュンは推断していた。

「や、ジュン。手伝いに来てあげたよ」仕事口調でジルコニアが言う。

「頼んでいない。帰れ」

「まあ、そういうなよ」ソウジが言った。——「ほら、次が来るぞ」半数を倒されたカオティツク達が、殺意をむき出しにしてジュンとソウジを囲み始めた。

グルルル——闇が唸った。あの巨大な恐竜の形のカオティツクが、高みから二人を見下ろしていた。

「ソウジ、お前、時間を稼げ」ジュンが半歩退がりながら命令するように言った。

「あ？——わかった。任せておけ」ソウジは素直に聞き入れる「——「ジル、援護を頼む」

「はいはい。じゃあ、二長調でマーチを奏でてあげる」

ソウジは頼りにされれば断れない男。——単純な奴、ジュンは思いつつも彼を当てにした。聖符を無駄に使いたくなくなった彼は、少し時間にかかる強力な魔術を聖符の助けなしに時間をかけて発動

させることにしたのだった。

ジルコニアが奏でる甲高いヴァイオリンのような音色で行進曲が響き始めると、槍を手にした黒髪の青年が飛び出した。

敵が彼の動きに反応して、攻撃を仕掛け始める。

四方からの攻撃にソウジは囲まれる。だが——速い。奏でられるリズムカルな旋律に合わせて動きながら、軽やかな長い槍のリーチをうまく使って木枯らしのように立ちまわっている。——吟遊詩人の支援は契約を交わした守護者の身体能力を高めるものであり、ソウジの動きは超人的な力、速さ、反射を発揮していた。

『彼の血に竜あり。呪われし力の権化、毒を撒き、畑を荒らし、人も家畜も食い荒らし暴虐の限りを尽くしたり……』

ジュンが魔術のための集中に入る。唱える聖句は叙事詩。かつて存在したと呼ばれる聖人の、一本の槍で竜を倒したという物語。

『……かくして神をあざける愚かな者、聖大致命者凱旋者ゲオルギイの名の下にその浅はかな力と共に滅びさるがいい!』

ジュンの剣が燦然と輝き始める。それを彼は頭上へかざすと、太陽のごとく剣は輝きを放った。

「聖霊よ、主よ、我が戦いをしかと見届けたまえ!」

「ちよっと待て! 俺が巻き込まれる」

闇の竜とその他カオティックがソウジを中心に集まったところめがけて、ジュンが剣を振り下ろした。

剣は虚空を切ってひとまず地面に食い込む。カーン! ——鐘の音の様な澄んだ音と共に、剣に込められた力が噴流となって敵の一団を襲う。

竜を一撃で滅ぼす聖なる力が炸裂。黒い竜と、他二体が完全に消し去られた。

「すごいなあ……」ソウジが感心しきった声音でいう。——「けど、まだいるみたいだな」

「ああ、少し数が多いな。——すべて消してやるけどな」

残ったのは、小型が二、大型が三、そして蠍のような禍々しい姿

をした巨大な混沌獣が一体いた。闇の蠍の尾は二又に分かれており、不気味にうごめいている。

『その名を記憶さるる、聖エラスムスの焰よ……』

また、ジュンの剣が青白いプラズマが纏う。

ソウジはジルコニアの音楽を耳にしながら槍を構えた。

二人の男と、六体のカオティックが再び衝突を始める。いよいよ本気になったカオティックは、闇色の風のように二人を囲み、しつこく攻撃した。ジュンとソウジの攻撃はなかなか彼らに当たらず、敵の数を減らすことはできなかったが、自然と動きを合わせた二人はまるで舞い踊る様に、苦のない動きで敵と刃を交わした。

周囲で見守る教会騎士達は、その鮮やかな戦闘を息をつめてみていた。

ジルコニアも、旋律を奏でながらその光景に目を凝らしていた。

良い見せものだと、愉しむように二人の男の戦いを見守る。

だがその時だった、路地に面した扉が開き、その中から中年の女性が出て来たのは。

「逃げてない奴がまだいたのか……!」

女性は目の前の光景に小さく悲鳴を上げた。と、彼女に気付いたカオティックの一体がその方へとすかさず迫った。

ジュンも、ソウジも、それを止めようと思うが、敵に囲まれて動くことができない。後衛に控えていた騎士達は急な展開に反応できないかった。

唯一救えるのはジルコニア。彼女はすぐさま指の動きを変え、敵を直接攻撃する旋律を奏でようとした。

「シューティングスター!」

突然、少女の声と同時に光の流星が降りそそぎ、女性を狙った力

オティックの横腹を直撃した。

「な、なんだあの者は！」

騎士達が見て驚愕する新たな登場人物の姿。金細工のような美しくたなびく髪、蒼空のような澄んだ瞳、抜けるように白い肌に天使のように愛らしい小柄な人型の身体。そして何より異様で、美麗な、背に生えた二枚の光の翹。

「逃げて、おばさん。――それともお姉さん？ とにかく、早く！」

背中に光の翹を生やしたカミエが強い口調で言った。女性のコクコクとうなずいて速やかに戦場からいなくなった。

「……カミエ！ 来るなって言っただろう！」

ジュンが怒鳴った。しかし、全身に光を纏わせた彼女は、ただ無邪気に笑顔を見せただけだった。

「だって、見てられなかったんだもん。それに見た？ 私、今、狙って攻撃できたんだよ？」

ジュンは何を言っても無駄だと思った。

肌の内側から力を溢れさせるカミエに、ジュンとソウジの周りのカオティックが畏怖し、動きを止めていた。逃げ出すわけではないが、じりじりと後退していた。

ジュンはカミエと立ち位置を入れ替える。

「話はあとだ。さっさと片付けろ」

「はあい。――あ、ソウジもちよつと離れててくれるかな。巻き込んじゃうかもしれないから」

「巻き込む？ 一人で大丈夫なのか？」ソウジが訝しんだ。

「大丈夫、大丈夫。おっまかせ！」

「ソウジお兄ちゃん、良いからこっちに来なさい」

周囲から言われ、ソウジも前線から後退した。

白いジャケットにパンツというラフな格好で、カミエは闇をまとうモンスターの群れと対峙した。場にそぐわない風体の彼女だが、ほとぼしる力がカオティック達を震え上がらせていた。

「行くよ！」

カミエが無造作に腕を振ると、力が幾つもの矢となって放たれた。力の大きさでいえば先程ジュンが撃った「ゲオルギイ」の魔術に匹敵するぐらいのものを、カミエは軽々しく放った。

カオティックは防御した。が、その防御は容易く破られ、二三体があっけなく消滅させられた。

「なんと。圧倒的か……！」

その人間離れた戦いぶりに、街の教会騎士達がどよめいた。

「カミエ、遊ぶな」

「はいはい。じゃ……」

フワ——

カミエの翅が大きく広げられ、燦然と輝き始めた。手のひらにマグネシウムを焚くような、小さくも眩い光の球がつくられる。

目も眩むような光。ジルコニアは音をもって強すぎる光を弱らせるなどしていた。

身の危険を感じたカオティックが、一挙にカミエへと襲いかかる。騎士達は動揺したが、ジュンと、カミエ自身は敵が迫っても悠然と構えていた。まるで、取るに足りない雑魚と対峙しているかのよう

に。

「これで消えちゃえっ……シャイニンググレイザー！」

敵の目と鼻の先で、カミエは手の中の力の球を地面に叩きつける。その瞬間、すさまじい閃光と衝撃が発生し、周囲を力の洪水が飲み込んだ。空間が力の奔流に軋んで悲鳴を上げ、轟音がなり響いた。あっという間のことだった。騎士十名にジュン、ソウジとジルコニアがかかって戦い続けていたカオティックが、カミエの登場からわずか三分足らずで全滅していた。

衝撃の余韻が消え去った後、チカチカしているソウジの視界の中で、カミエが頬笑みながら風に髪をたなびかせていた。

バシン！――

戦いのあと、街の教会騎士達が被害状況と敵性残存勢力の確認を行っている中、叩きつけるような音が響いた。

「何故ついてきた？ 部屋で待っていると言っただろう？」

強張った声音で詰問するのはジュン。彼の前に突っ立ったカミエは、白い頬の片方を赤く腫らしていた。

「ごめんなさい……。でも、ジュンが心配だったの」

心から申し訳なさそうにカミエは答えた。

「お前に心配されるほど俺は落ちていない。――帰るぞ」

「あ……」

十字架のマントを翻し背中をみせたジュンを、カミエは慌てて追った。

その二人を見送る、ソウジとジルコニアがいる。

「行かないのか？」

「お兄ちゃんこそ、行かないの？」

まるで牽制し合うように言葉を交わす二人。

短い沈黙があったあと、ジルコニアが口を開いた。

「あたしは吟遊詩人として、物語を乱すような行動はできない。お兄ちゃんはあたしのコード。物語を追いかけるのも大切だけど、あたしはお兄ちゃんを失いたくないから、あの物語を諦めるほうを選択できる」

「俺は……あいつらに何か言う気はない。何かしてやる気もない。」

あいつらはどうせ何言ったって聞きはしないだろうからな。——でもよ、気になるのは確かだ。できればあいつらを見届けてやりたい。けれどあいつらに干渉することはできない。——俺はまだ自分の気持ちを整理できないんだ」

ソウジは矛盾しあう気持ちを意識して、葛藤していた。

ふん、とジルコニアは詰まらなさそうに鼻息を荒くした。——「大人ぶっちゃって。気にいらない」

ソウジは晴れ晴れしく笑って応じた。

「俺は大人だぜ。二十三だったっけか？ 変人な妹もいるしな」

「誰が変人な妹よ！ ——じゃない、あたしはソウジの妹じゃないよ」

ジルコニアの言葉に、ソウジは少し寂しそうに笑った。

「それより、あたし思い出した。あのお姉ちゃんの使ってた『混沌の光』の力を見て。『混沌の光』のことは知ってる？ さっきのカオティックが持つのは『混沌の闇』で、物質を生み出すのが元来的な力だけど、『混沌の光』は物質を消す働きを持ってる。それを持つのは本当に極々少ないカオティック。そして、あとは特殊な人間——」

ジルコニアは一端言葉を打ち切って、戦いのあった路地を見渡した。カオティックが歩きまわったおかげで舗装の石が砕けているが、建物など街並みは変わっていない。——否、建物の色が変わっていた。塗装された表面がこそぎ取られたように、白っぽくなっていた。ジルコニアの言う『混沌の光』にさらされ、表面が消滅させられたのだ。

「混沌の光を使う人間——厳密には元人間だった存在を数少ない物語が記している。彼らのことを『黒き月の独り子』と呼んで」

○

あくる日の早朝、街の外壁の門の前に騎士の少年と金髪の美しい少女の姿があった。少年は鎧を着こんだ勇ましい出で立ちだったが、少女は上下に白い服を着ただけの軽装だった。

日差しがまだ赤みの強い時間、人の気配はまだ全然ない。目覚めたばかりの世界は、みずみずしく輝いていた。

「ねむうい！」

カミエの高く澄んだ声が朝の静けさに響いた。

「うるさい。さっさと行くぞ」

「うん。今日も楽しいことがあるといいね」

——楽しいことってなんだよ。

ジュンはそう思ったが、口には出さずに歩きだす。カミエは彼の腕に取りすがって一緒に歩く。

開いたばかりの大きな門をくぐった先、道と森と空と、見覚えのある二人の姿があった。

「よう、ジュン。俺たちも連れてってもらうぜ」

ソウジが爽やかに声をかけた。

「お前ら……誰が連れていくと思ってるんだ？」

「えー？　だめかな、ナナお姉ちゃん」

声をかけられたカミエは、ジュンの腕から身体を放して考えた。

「うーん。……だめ？　ジュン？」

「やかましい。うるさい奴は一人で十分だ」

「そうか。ま、駄目だと言われてもついていくだけだな」

「……」ジュンは舌打ちするしかなかった。——「好きにしろ」

「やったあ！　ジュン、ナナお姉ちゃん、よろしくね！」

カミエとジルコニアが手を取り合って小躍りしはじめた。

ソウジはジュンと向かい合った。はしゃぐ女二人を視界の端にとらえながら、ソウジは言う。

「ま、よろしくな。なるべく迷惑は掛けないようにするから」

「お前は……」ジュンは聞くことをためらいつつ、やはり問いかけてしまった。――「あいつが死ぬ事を許容することにしたのか？」

ふ……とソウジは微笑した。

「いいや、全然。でもあの子は俺が何言っても心を変えないだろ？
なら、俺は何も言わない。あの子に死んでほしくないのは確かだ。
――ジルコニアから少し聞いたけど、『黒き月の独り子』には確な
未来が待ってない。記録に残った連中はみんな死んでる。運命は避
けられないのかもしれない。――どうしたら良いかはまだ分からな
い。でも、だから、俺はとりあえずお前たちについていくことにす
る。そして――そうだな、俺はあの子に、死ぬことしか望んでいな
いあの子に「生きたい」と言わせたい。まずはそれを目的にするこ
とにした」

――甘っちょろい男だ、ジュンは思う。

だが、不思議と否定する気にはならなかった。否定する必要もな
いのだが。――できるならやってみれば良いと、どこか共感を持っ
て彼を肯定していた。

「……話はそれだけか？ 行くぞ。いつまでもここで突っ立ってい
る気はない。俺は早く北に行って、元のロンバルディア教会に戻り
たいんだ。――良いか？ 俺についてくる以上、俺の言うことには
逆らうなよ」

騎士の一言で三人が反応する。

朝焼けの中、四人となった一行が歩き出す。北を目指して、ここ
にいる一人の少女を殺して世界を護るために。

―― 旅の同行を交渉する件」 (後書き)

第一話はこれで終わりです。

第二話からはまとめて更新するので時間がかかると思います。(二

か月とか?) ―― 思い出したらのぞいてみて下さい。

次回はジュンとカミエの旅立ちです。

チャット#1

「いっけー！ ブリリアントアロー！（神恵）」
ちゅどおおおおん！

「すげー。カオティックが一発だ（奏治）」

「なんか、お姉ちゃんの戦い方ってすごい豪快だよ。悪く言って、雑ってことだけど。お姉ちゃんって、戦い方とか知ってる？（ジル）」

「ううん、全然」

「おい！（盾）」

「お、お前何処行ってたんだ？ ちょっと前から姿が見えなくなっていたけど」

「枝にマントをひっかけて、ちまちま取ってたね。マント大事なんだね（ジル）」

「当たり前だろ。——じゃなくて、カミエ！ お前は戦うなって何度言えばわかるんだ（盾）」

「ごめん……。でも、モンスターなんてさっさとやっつけちゃえば良いじゃない」

「俺がいれば問題ない（盾）」

「時間かかるのは嫌だよ。いつまでも騒がれてちゃ落ち着かないし（ジル）」

「お前は黙ってろ！」

「それと、お姉ちゃんは今々力を使った方が良いよ？ こういうアストラル力は外に出すのが一番だから。不安定になっても、あたしがチューニングしてあげるし」

「ジルちゃんありがとう！」

「……っ」

「少し休憩しないか？ あっちに水のうまそうな川があったんだ」

「あー、おいしい。ソウジ偉い（神恵）」

「ほら、食いものも捕まえてバラしてきたぞ。焼いてくわないか？（奏治）」

「お昼から肉？（ジル）」

「な、何だよその眼……俺に果物探して来いって言うのか……？（奏治）」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん。お兄ちゃんが行ってる間にこのお肉焼いといてあげるから」

「へんな肉の色の動物……（神恵）」

「魔獣化した栗鼠か？（盾）」

「モンスターってあんまりおいしくないよね（ジル）」

「魔獣化？ 魔獣化って何、ジュン？」

「……」

「もう……そうしてれば私が諦めると思ってた。——ジルちゃん、知ってる？」

「知ってるよー」

「いわゆる魔獣^{モンスター}ってね、まあ何種類かあるんだけど、あちこちにある魔法に関わる場所に触って凶暴化した動物が一番多いかな。世界は物質と精神^{マテリアル アストラル}の二面で出来てるじゃない。重なり合ってるけど、互いに干渉できないマテリアルとアストラル。だけど時々マテリアルとアストラルが繋がってる場所があって、そういう場所に行くと、動物のアストラルは人に比べて弱いから影響を受けておかしくなっちゃうんだよね。——そういう場所は人間でも危ない時があるけど、普通は動物だけだね、モンスターになるのは。

「他にはね、ほとんどアストラルで出来た存在の中で、人間を狙うやつのことをモンスターって言うね。そういうのは普通マテリアルの世界には干渉できなくて、アストラルの生き物はアストラル的な

世界の一面で暮らしてる。あたしたちマテリアルの存在が物質の世界だけで生きてることと同じだね。でも時々マテリアルに顔を出せるアストラルの生き物がいて、別に顔出してもいいんだけど、暴れるとモンスターとしてやつつけちゃう。けどね、普通の人間はマテリアルの攻撃しかできないから、アストラル体に攻撃しても全然だめなんだよね。向こうは何だか知らないけどこっちに攻撃できるのが困ったところ。

「あと最後にもう一つ、お姉ちゃんも良く知ってる混沌獣カオティックがあるね。——え？ 名前しか知らない？ ——カオティックはマテリアルとアストラルの成分を同じくらい持ってて、マテリアルで凄い攻撃をいくらしても半死くらいでなかなか倒せない。おまけに『混沌の闇』マテリアル アストラルっていう物質も精神も好きなだけ作り出せる力を持ってて、傷つけてもどんどん回復する。ただマテリアルの世界に出てる限りは、アストラルが損傷しても回復が遅めで、だからアストラルの攻撃のほ
うが良く効く。

「ジュンお兄ちゃんの『魔法剣』はマテリアルとアストラルの両方のダメージを与えられるからカオティックに良く効くね。あたしの『音楽』はマテリアル・アストラルの限りなく平等に効くし。——この話はまた今度ね。——あとカオティックを倒せるのは、お姉ちゃんの持つてる『混沌の光』って力。——え？ 自分の力に名前なんてついてるのかって？ ——『混沌の光』は存在を分解する力があるから、『混沌の闇』と打ち消し合うんだよね。この混沌っていうのは、有でも無でもない万物が作り出される始原の状態。そこから何かを汲みだすのが混沌の闇で、還すのが混沌の光なんだよ」

「「良く知ってる」「な」「ね」

「あ、お兄ちゃんお姉ちゃん息ぴったり」

「（怒）——それは吟遊詩人としての知識か？（盾）」

「そうそう。吟遊詩人は何でも知ってるんだよ。旅してたら自然と

覚えたところもあるけど（ジル）」

「すごい。もっとお話してほしいな」

「うん、いいよ。――あ、ソウジお兄ちゃんが帰ってきたよ」

「ソウジ、おかえり」

「ただいま。――俺思っただけだよ、ジュンを連れてけばよかったよな」

「ご苦労だったソウジ（盾）」

「その上から目線なんだよ。……ったく、ほら、これ喰ってみたらうまかったぞ」

「なんだろ……蜜柑みたい（神恵）」

「うーん、まあまあ……いや、なかなか……ありがとう、ソウジお兄ちゃん」

「はっはっはっは……ジュン、お前は食べないのか？」

「いらん」

「ジュンは生ものは食べないよ。戒律なんだって。ケーキも食べないの（神恵）」

「他にもタブーがあるのか？」

「教える必要があるのか？」

「お前、友達できないぞ」

「それがね、ジュンにも友達がいるんだよ（神恵）」

「へー。会ったことあるの？　どんな人？（ジル）」

「変な人だった（神恵）」

チャット#1(後書き)

会話録です。各話の間に入れて、いろんなことを解説させていこうかと思っています。

やっぱり年度が始まると忙しくなってきますね。

act 2 「我儘で恋する独り子が

それは、蒼穹に雲が穏やかに流れている麗らかな春の日だった。少女は母親と、昼餉に何をつくろうか話しながら、笑いながら町中を歩いていた。

幸せな日常の、ほんの一日のこと。

ふと、世界は翳った。

そして悲鳴が聞こえた。

離れた場所で何かあったようだった。少女は不安で心がすくみあがり、母親に抱きついた。母親も震えていたが、大丈夫、といった。家に帰ろうと、無理して笑顔になっていた。

だが親子が家に帰ることはなかった。早足で歩いていた親子の前に、黒い大きな魔獣^{モンスター}が立ち塞がった。螭螂のような闇をまとうモンスターは、二人に鎌を振り下ろした。

母親が、娘を護るように抱き締め、モンスターに背を向けた。だが娘の行動は早かった。母親の腕が完全に彼女を包む前に、その腕の中からすり抜けた。そして、母親を襲うモンスターの鎌の前に敢然と立ちはだかった。

神恵^{かみえ}——母親が娘の名を叫んだ。

娘は嬉しかった。母親の盾となれたことに。そして悲しかった、もう二度と母親と言葉をかわせなくなると思うと。

だが闇の鎌が身体に触れた刹那、少女は自分の中で何かが目覚めるのを感じた。——光のような、眩しく、清らかな強い力。——これで母を、自分の身も護れる。少女は確信し、迷わずにその「何か」を解き放った。

一瞬、意識が光の中に飛んだ。

我に帰ったとき、目の前に正体不明の敵はいなかった。

やったよお母さん、と少女は後ろに庇ったはずの母親を振りむく。だがそこに母の姿はない。

少女の周囲には生きて動く物は一切なかった。

どこまでも続く瓦礫、根こそぎ破壊された町のあと。――少女の友達も、親戚も、親しい人たちも、誰もいなくなっていた。

町は一瞬にして殺戮され、破壊されつくしていた。瓦礫の他には、チロチロと燃える一面の火の海だけが少女の世界となっていた。

それが……それが……恐ろしいことに少女自身で引き起こした事態だと、まもなくして少女は気づいてしまう。

力が、溢れる。その力は誰かを護るものではなく、ただ純粹に目の前の物を破壊するための力だと少女は気づく。溢れる力は少女の全身を輝かせ、小さな背中に神々しく大きな翅を顕わしていたが――少女が目覚めてしまった力は、どこまでも禍々しく凶悪だった。誰も聞かない少女の絶叫が響いた。

目が覚めた。

石牢の中で目覚める少女。――夢だった。うなされていたようではなさそうだが、全身に汗が噴き出して粗末な服がべったりと肌に張り付いていた。固い石の床の上にシーツにだけ包まり直に寝てい

た少女は、痛む身体を重々しく動かし、身を起こした。

今見たのは少女の過去だった。護りたくて、咄嗟に目覚めた力を使って、自分の生まれ育った町を根こそぎ破壊した。故郷から離れたことのない少女にとって全世界だった町を、少女は一瞬で破壊した。

少女は孤独だった。

もう誰もいない。親しかった人達、あるいはちょっと不和だった人達も、少女自身が根絶やしにした。――そして母親。父のいない家庭で、ずっと支え合いながら生きてきた母親は、さよならも言えずに死別してしまった。

――護りたかったな。

少女は膝を抱え、身を丸めながら思った。

――早く、死にたい。

だが、少女は勝手に死ねない身体だった。強力な魔力^{アストラル}を蓄えた身体は、死ねばどのようにその力を放出してしまうかわからないからだった。

世界を滅ぼすと、彼女は言われる。

少女が死ぬただ一つの方法――平板世界の極北にある、白夜と吹雪に閉ざされた混沌渦巻く破滅の遺跡へと行き、その身をささげること。

そのための旅路の道連れに、少女は一人の若き騎士を選んでいた。

「早く来ないかな……。私のナイト様」

彼女を死の地へと連れ去る騎士――それを呼ぶ少女の口元には、乙女のような微笑があった。

○

一面の黄色い草はら。枯れ草に覆われた平坦な台地の上に、冷たい冬風が吹き抜ける。

辛気臭い場所だ——帯剣した、教会騎士クルセイダーである紅い髪の少年、音無・盾はたった一人、馬上からそう思った。

そんな殺風景の中、一つどしんと立っている建物。灰色で、有刺鉄線のついた鉄の壁に覆われた砦のような建物は、実は神を讃えるための教会。とはいっても、周囲五キロメートルに人家のない場所に建てられたこのギマランイス大教会は、別名「牢獄教会」と呼ばれる教会に仇なす異端者——それも異端の儀式によって人間離れた危険な者達を閉じ込め、あるいは処分するための特別な施設だった。この見た目からして堅牢なこの教会は、周囲にも目に見えない魔術の結界を敷き詰めてあり、そのために周囲では植物の成長が悪く、今みたいな冬で無くとも、地面は黄色っぽい雑草がまばらに生えているだけだ。

鉄の大門の前まで馬を進め、門を剣のさやで叩いた。

ボーン！——耳を聳するような音が鳴り響く。

少し待つと、門が重々しく内側に開いた。

そこに小柄な神父の恰好をした少年が一人、堅固な教会を前にぼつんと立ってジュンを迎えていた。

「やあ、ジュン。久しぶりだね。馬に乗っている君はとても格好いいよ」

甘いアルトヴォイス、童顔で白い髪の神父姿の少年は、にっこりとジュンにほほえみかけて親しげに挨拶した。

ジュンはちらりと彼を馬上から見下し、それから馬から降りて一礼した。

「わざわざの助祭殿のお出迎え、感謝いたみいる」

「いえいえ、我がギマランイス教会としてもあなたのような優れた特級十字騎士をお招きできるなど光栄の至りですよ。——で、ジュン、なんでそんな他人行儀にするかな？ 久しぶりに会った友達同士じゃないか、楽しみに笑顔の一つも見せてくれよ」

「……その人を食ったようすは相変わらず、蒼崎・光樹」

ミツキと呼ばれた白い髪の少年は笑顔を濃くする。

「君の無愛想も相変わらずだよ、音無・盾。――立ち話もなんだから、ひとまず中に入らないか？」

コッソン――コッソン――

冷たい石の床に二人分の足音が響く。といっても、一人は革靴で床を叩く音も柔らかだが、もう一人は鉄製のブーツなのでとても痛々しい音が響かせられていた。床は単なる石ではなく、よく磨かれた大理石だ。横幅十メートルほどの広い廊下は、壁や天井に質素だが美しい装飾が施されていた。

「でも君も忙しいよね。あの任務が終わってから、特級十字騎士にランクアップして、すぐに他の任務に行かされたんだって？　しかも、それが終わったら元の教会に帰るまでもなくここに寄こされたんだろ？」ミツキが言った。

「そうだな。まあ、十字騎士には所属する教会なんてものは基本的に無いんだが」

ジュンは今の階級になる前は、とある大都市に所在する聖ロンバルディア教会に所属する一級騎士^{ビショップ}だった。十字騎士は教会全体の派遣社員のようなもので、人手の足りない現場に回され続ける大変な職務だが、騎士として志の高いジュンは喜んでこのポジションにいた。ちなみに、十字騎士にも一応の所属教会が決められている。

「君も偉いよね。十字騎士なんて、僕はまっぴらだよ」

そういうミツキも、元々は魔術師を使う騎士として戦っていた。今は助祭という基本的には戦いとは離れたポジションについているが、まっとうな人間はほとんどおとずれないここギマランイス大教会においては、助祭というのは教会に閉じ込められた囚人や魔獣の監視における最高責任者だった。

「……お前、どうしてここに来たんだっけ？　ここにはお前の好きな女が全然いないだろ」

町も遠い。「教会」の組織においては、特に騎士階級において男女の差別はないが、この教会には神官としての女性は皆無だし、騎士の女性もいないような気がジュンにはしていた。おまけに、この教会は重要拠点ではあるが辺境ということも確かで、ここに来た以上一生そのままのポジションで居続けなければならぬ流れがあった。

「うーん、どうしてだっけ？」

ミツキは首をひねった。――「ああ、紅烏^{アカ}がここに来るって言ったからだよ。ていうか、僕がここに来たくないってごねてたら、彼女が先に転属されることに決まってしまったんだ。いやだよ、上層部のやることはさ」

ミツキはやれやれと首を振った。少し長い白髪が襟元でさらさらと揺れた。

「アカ……？」

ジュンはその名の者が誰だかすぐに思い出せなかった。――「ああ、お前の恋人か。あのうるさくてギラギラしてる赫い髪の女。そういうあいついねえな。いつもお前に張り付いてるはずだろ？」

「赤い髪でギラギラしてるとこまではジュンも一緒だよ」ミツキは笑って言った。

「彼女は今、どっかの応援に送られてる。――て、あー、そうそう！」

ミツキが突然大声になり、ジュンはビクッと驚いてしまった。

「君さ、間の悪い時に来てくれるよね！ 紅烏がいらないからさ、たまには街に行ってサキとか他の女の子に会ってこようと思ったら、君が来るって言うから出かけられなくなったんだよ？ まったくさ、せつかくの機会なのに……！」

「浮気ができなくて俺に起こるな。それに、この時期に来ることになったのも俺のせいではない」

ジュンが眉間にしわを寄せて言った。

ジュンはそつと溜息をつく。

蒼崎・光樹——ジュンが駆け出した頃、ともに技を磨いた数少ない友人。女好きで若干不真面目で信仰も薄いが魔術において若くして突出し、剣術に秀でていたジュンとは不思議と気があった。ミツキは武術もそこそこできた。彼からジュンは魔術の指導を受けたこともあった。——また、その他のことも彼から教わったり影響をうけたりしている。

「ま、せめてもの慰めは、あの『独り子』ちゃんが可愛いことかな？」

ミツキの呟いた『独り子』——その単語の登場に、ジュンの眉がひそめられ、二人の間に今まであった気楽な雰囲気が少し張りつめたものになった。

「任務の説明はどのくらい聞いてきた？ 僕の部屋で詳しく話そうか」

ベルベットの絨毯や複雑な模様に織り込まれたカーテンなどが調度としてある、豪華な助祭室にジュンは通された。つまりはミツキの執務室である部屋には、彼が職権を行使して取り寄せた、沈香というある地方にしかない香が焚かれ、独特の雰囲気醸し出していた。椅子をすすめられたジュンの前に出されたお茶も、ボトルグリーンに濁ったほろ苦い味のあまり知られていないお茶だった。

「口にあうかな。抹茶っていうお茶なんだけど」

キラメル色の茶碗に口をつけてお茶を静かに飲むミツキが聞い

た。

ジュンは少し首を傾げてから答える。

「さあ……」「なんでもいいって？」

ジュンの言葉を先読みして、ミツキが言った。不愉快な顔になったジュンを前に、ミツキは喉の奥でククと笑った。――「変わらな
いね、そういうところも。君が来るのに合わせてお茶菓子も作った
し、あんまり使わない楽焼の茶碗も出したんだからくつろいでよね」
ジュンの手の中でほんのりと温かい、肉厚の焼き物。ミツキの口
ぶりからして相当の芸術品らしいが、ジュンにはよくわからない。
ただその重厚な手触り、ずっしりとした重さ、紫檀の木のような色
合いからして、確かに良い物なのかと彼は思った。

「それで、仕事の話なんだけど」

水あめを固めた半透明の生菓子を楊枝で口にほおりこみながら、
ミツキが切り出した。

「君はあの、『黒き月の独り子』七那瀬・神恵ななせ かみえを倒して捕獲した張
本人だからある程度は知っているだろうけど、何か聞きたいことは
ない？」

問われて、ジュンはその少女との戦いの場面を思い出した。――
炎のゆらめく赤く染められた町の跡。重傷を負い倒れゆく仲間達に、
逃げていく隊長たち。一人で立ち向かった光輝く翼をもつ少女との、
壮絶な力のぶつけ合い。――凄まじい戦いだった。あれから二月近
く経ったが、ときどき自分がなぜ五体満足で生きているのか不思議
になることがあった。

「俺は大して情報を持っていない。あの娘が『黒き月の独り子』だ
ということは知っているが、それが具体的にどういうものかもよく
は知らない」

「俺が知っていることは、今回の任務が例の娘を北の聖地『混沌渦
巻く聖墓』――またの名を『トウェルヴ・ケイオス』という場所へ
連れていくということだけだ。その例の娘は、『教会』の持ついか

なる方法においても安全かつ完全に抹殺することができなく、その北の聖地でなら聖地に宿る俺達の崇める神の力をもって娘を滅する必要があると。そのために誰かが娘を護送しなければならぬと俺はきいた。――これさえわかっていれば十分じゃないのか？」

ジュンは言うだけ言うと、すました様子で濁ったお茶に口をつけた。

一方ミツキは、だめだめ、と首を振りながら答えた。

「君は本当に冷たいよね。君が正式にこの任務につけば、それはすなわち彼女を殺すことになるんだから、殺す相手のことはもう少し知っておいてあげないと」

ミツキは一息おいて話しはじめた。

「『黒き月の独り子』は年の初めに三日間から五日間にわたって訪れる白夜の日に、その白い空を三日月形にくりぬいて黒い空が見える夜に生まれる子供のうちのたった一人を指して言うね。この『黒き月』が現れるのは十一年から十四年周期、世界のどこに生まれるとか性別による偏りはない。たった一つある法則は、その子供の父親が、子供の生まれた前後一年で死ぬこと。黒き月の独り子は生まれた時にはそれとわからないで、十四歳くらいになってから命の危険に曝されたりすると目覚める。目覚める状況は、カオティックに遭遇する時が多いことが過去のデータからわかってるね。そもそもカオティック自体、普通に生きていれば会うことさえない存在だから、『独り子』とカオティックを惹き寄せあっているとも考えられるね。」

「一般の人たち、教会でも位の低い人達は独り子のことを知らない。知らされていない。黒き月が昇った夜に生まれた父親のない子供といっても、そのうちのどれがなるかは全く分からないし、わからないものを不用意に教えると差別を生むだろうから公開されていない

んだね。もつとも、民衆って言うのは勘のいいものだから、隠していても噂みたいのは存在しているんだけど。

「独り子は『混沌の光』という力をもっている。この名称は教会の極秘文書に記されていて、神の力の一部であるとされているが、何故カオティックの持つ力『混沌の闇』と似たような名称になっているのか、少し僕は興味があるんだ。

「独り子は自分の力を制御することができなくて、周期的に暴走させてしまう。独り子にはダメージは及ばないけど、周囲はたまったものではないね。よっぽど強固な結界を張らない限り防ぐことはできない。独り子が力を使うことを封印することはできないし、かといって独り子を殺してしまうことはできない。ここでポイントなのはね、ジュン、独り子は自ら北へ移動する衝動を持っていることだよ。

「多くの独り子は、目覚めた時に精神に障害を生じる。だいたいは抜け殻みたいになって自律行動をしないようになる。この状態なら誰もいない山奥にでも放置しておけば彼らは自分から何もしないから良いような物だけど、そのうち何故か勝手に動き出すらしいんだよね。彼らは北の聖地に向かって一直線に動く。で、途中で人里に立ちよって暴走すると困るんだよね。

「精神に異常をきたさなかった場合は、その独り子の力は結構弱いものになるらしい。この場合は頑張れば封印処分することができるとはいいけど、今から千年ぐらい前、とある教会でそれをやって北の聖地に行かなかつたら、十年くらい経ったある日、いきなり封印が弾けて教会の周囲七キロメートルを死の荒野にしたことがあったんだって。その荒野はいろいろケアして何とか雑草くらいなら生えるようになっていてるけど、今でもやせ細った土地であることには変わらないね。

「独り子を北に送らないと世界が滅ぶ——そんなこと、誰が確かめたわけじゃないけど、力の弱い方だった独り子が暴走した影響は今もまだ残ってる。力の強い独り子が死に至るほどの暴走をしたケー

スはないけど、その時にどれくらいの被害が出るかなんて全然予想のしようもない。世界が滅ぶかもしれないっていうのも、あながち言いすぎじゃないと僕も思うよ。

「まあそういうわけで、黒き月の独り子は問答無用で北まで送られて廃棄される決まりになって、ここ五百年は順調にその『巡礼』が行われてたんだけどね。」

「さてここで問題その一、千年前に独り子を封じてぶっ飛ばされた教会は何処でしょう？」

ミツキの問いかけにジュンは、知るかよ、と素っ気なく答えた。ジュンは長々と話を聞かされてうんざりしていた。お茶は飲みきったし、出された菓子は甘ったるくて不愉快だった。

「もう、ちよっとは考えてくれても良いのに。——正解は、ここ、だよ音無・盾クン。ここの周りって夏になっても細々と草が生えるだけで動物も寄らないんだよね」

ミツキの言うことは確か。だが、ジュンの知っていたところと違う。

「ここが不毛なのは、周囲に張った結界のせいじゃないのか？」

「それが違うらしいんだよね。僕もここに助祭として来て、色々調べたからわかったんだけど。そもそも、結界でまわりの環境悪くしてるなんて、本当だったらあちこちの環境団体から訴えられるじゃないか。今はエコの世の中だよ。そんなことやってたら、お布施が減っちゃうじゃないか。——ていうのは冗談だけど」

一息ついて、彼は続ける。

「結界を張って処置してるから、ここはまだこんな感じらしいよ？ 放っておけば、酸素さえ流れ込んでこない呪われた土地らしい。」

——さて問題その二、独り子が心を壊しているか、それとも力が弱いか、どちらかって話をしたよね。じゃあさ、いま地下牢に入れて

ある独り子、カミエちゃんは前者か後者、どっちだと思う？」

ジュンは思い出す。その独り子は捕まえるまでに教会騎士の一小隊を全滅させてくれたから、力は並みのものではない。ジュンも参加していたあの小隊なら、ドラゴン並みのカオティックが五体現れても勝利できるはずだった。

「前者だろ？」

しかしミツキは意地悪く笑った。正解ではないようだ。

「さて、答えはこれから見てもらおうかな。お茶も無くなったし、御対面と行こうか」

不穏な空気が、ザワザワと肌を撫でていった。

ギマランイス大教会の最奥、強固な鉄の扉の先にある石の階段の先にある地下牢には、標本として捕獲された魔獣、邪悪な秘術に手を出して人としての性を失ってしまった処刑を待っただけの異端者、殺すこともできないで固く封じられている人とも獣とも形容できない禍々しいものなど、様々なものがそこに繋がれている。「教会」の組織の中ではどちらも類稀な能力を持つジュンとミツキの二人だったが、さすがにこの地下牢を歩く時は談笑することもできないようだった。

光の差さない地下を、明るい灯火を持って二人は歩く。

「相変わらず大した場所だな。あの娘も、こんな場所に閉じ込められてさぞ喜んでることだろうな」

重々しい空気を笑い飛ばすように、ジュンが皮肉混じりにそう言った。

ミツキは喉の奥でクツクツと低く嗤って答えた。

「そうだね、寒い寒いつて文句ばかり言ってるよ。――みんな怖がっちゃってね、助祭の僕が直々に彼女の世話をしないといけないのさ。ま、可愛い女の子に会えるのは嬉しいことだけだね」

「そう言えば、ここに来てから全然他の奴が出てこないな。司祭には顔を見せといた方がいいんじゃないか？」

「ああ……他のみんなはね、みんな恐慌状態になって役立たずさ。

まあこの僕が出てきてるから、わざわざ彼らを出す必要もないから呼んでないんだけど。特に魔術の使える人達はみんな魔力を使い果たして、半死半生だしね。それとこの司祭は儀式を行うだけの本当の神官だから、出てきてもらっても邪魔なだけだよ。あの人も怖がって部屋から出てこない一人だし」

教会においては、戦闘能力を持たない儀式を行う者を神官、戦闘要員を騎士と呼び分ける。

――そんなにあの娘が怖いか。

ジュンと思う。だがわからない話ではない。ジュンは彼女に勝利したからまだ恐怖も薄いが、あの神々しいまでの威圧感は忘れようもなかった。並みの人間なら喜んで会おうとは思わないだろうし、彼女に傷つけられた者なら例えその傷が僅かなものでも、心の底まで恐怖が刻みつけられるかもしれない。

そう……彼女は神の力を持つ、神に近き者。人とかけ離れたもの故に、対面する者を無条件で畏怖させるのだ。

ザワザワとした冷えた空気のなかを歩いて奥に進むにつれて、空気の物々しさは次第に増していく。一面の壁に刻みつけられた魔術もほとんどん高度なものとなり、地下牢に繋がれている存在の危険度が上がっていることを示している。地下牢の中は静かだったが、魔

物達の殺気や邪念はうるさいほどに感じられた。

やがて、鉄ではない不思議な金属に閉じられた部屋の前に来た。

一目で見てそれとわかる、嚴重な封印。

「覚悟は良いかな？　——って言ってもこの封印はもう役立たずになんだけど」

「どうのことだ？」

ジュンは思わず問い返す。

「中の彼女がね、気分が悪いって言って器用に封印の魔術を焼き切ってしまったんだよ。張りなおそうとした魔術師九十名、全員彼女と馬鹿正直に魔力で張り合って、敗れて、今はほとんどが寝込んでる」

その骨抜ききの封印の扉が、唸りを上げながら重々しく開いた。

中は変わらない石の床に、鉄格子があった。明かりは絶やされていないようで、魔術で作られたランプが硬質な光を投げていた。

太さ百ミリメートルほどのぶっとい鉄格子の中に、件の『黒き月の独り子』はいる。端がぼろぼろになって粗末だが清潔な白い絹布に包まり、石の床の上に転がっているいたいけな少女。肌は包まっている絹布と同じくらいに白く、布をつかむ手はたおやかで白百合を思わせる。壁の方を向いていて顔は分からないが、寝乱れて広がった金色の髪が、極上の金糸のように細やかで美しいことこの上なかった。

ボンボン、とミツキが鉄格子を素手で叩いた。

「お姫様、お姫様、あなたのお呼びになったナイト様がお出でになりましたよ」

楽しげな口調で神父服の少年が呼びかける。

う……ん、とカミエが声を漏らし、寝がえりをうった。

「ミツキ……お腹すいた喉乾いた寒いトイレ行きたいこのシーツ飽きたシャワー浴びたい眠いもう少し寝かせてご飯は米よりパンにしてシチューの具に人参は欠かさないでたまには音楽が聴きたいカレーは辛くしないで和菓子はおいしかったよ……」

欲望全開の寝言。しばらくぶつぶつ言うのと、また静かな寝息が立てられはじめた。

ミツキは苦笑しながらジュンを振り返る。ジュンといえば、眉間に深いしわを寄せて佇んでいた。

「ね、可愛いでしょ？」

ミツキは本当にうれしそうに言った。

どうでも良い、ジュンは言葉にせずに答える。

ミツキはさらに苦笑を濃くして、話を戻した。

「どうする？ 出直す？」

「こんな奴のために、何度も出直したくない。さっさと叩き起こせ」
ジュンはカミエの顔をさげすむように見下していた。だが、わずかに綻んだ安らかな寝顔――自然とジュンの心さえ和ませる魔力があった。

「カミエちゃん、起きてよ、起きて！ ジュンが来てくれたよ！」

「う……何……？」

ミツキが少し声を大きくして、ようやくカミエは起き上った。

「……さむ。ミツキ、トイレ行きたい」

カミエの蒼い瞳がミツキをとらえた。ミツキの胸が躍った。

「あー、はいはい。でもカミエちゃん、ジュンの前なんだからもう少しお淑やかにしないと」

「ジュン……？」

そしてカミエの視線が、ミツキの後ろに腕組みして立つジュンに向けられた。

鎧を着て威圧的にたたずむ紅い短髪の若い男。眉毛が太く鼻柱も立派だが、輪郭などに何処となくまだ二十も生きていないと感じさせる、まだ少年と呼べる風貌。

二人の視線が交わった。

邪気のない彼女の視線、これが千百八十四名の命と三名の手足を造作もなく奪った恐ろしい力の持ち主なのかと、ジュンは思った。

一方、カミエの脳裏には、自分が打ち倒された時の映像がよみが

えった。誰も近寄ることさえできなかった彼女自身に、剣と盾を持って敢然と立ち向かった勇氣ある騎士。揺るぎのない太刀筋に、光輝く剣――

「ジュン！――――ぐわ！」

ジュン目がけてカミエが抱きつこうと飛び出す。だが、前に伸ばした手は鉄格子をくぐりぬけても、身体は通らずに彼女は派手な音を立てて鉄格子とランデブーした。

「いったあい！」

「大丈夫、カミエちゃん？ この鉄格子は触ったら火傷する魔術がかけてあるからあんまり触っちゃ駄目だよ」

額をさする大量虐殺者に、床に座り視線を合わせて声をかける助祭神父。とてもそれぞれがどういう素姓の者なのかなど感じさせない、のんきな雰囲気があった。

ジュンはその光景をただ、腕組みの姿勢を崩さずに観察していた。しかし、ミツキが次にとった行動に、流石にジュンも動揺した。

「ミツキ……これ邪魔。開けてくれないと自分で開ける」

「ああちよつと待ってね。ほら、このレバーを下げると……」

「――おい！」

鉄格子の脇に付けられたレバーを握ろうとしたミツキの手を、ジュンがハッシと止めた。

「ジュン――そんなに強く握っちゃ駄目だよ」

照れた仕草でおどけるミツキ。だが、ジュンは恐いほどの真面目な面持ちで彼を見据えた。

「あいつが誰だかわかってるのか？ あいつは生まれた町を一瞬で焼き尽くし、選りすぐりの教会騎士で編成した一小隊を撃破した化け物だぞ」

「あ、そうだね」

ミツキは笑顔で言った。――「でもね、別に彼女はもう暴れるこ

とはないし、本気になったらこんな鉄格子なんの役にも立たないし」
握りしめられたジュンの手を解きながら彼は言った。

「それにね、彼女を牢から出すのはこれが初めてじゃないから。だって可哀そうじゃない。こんな女の子がさ、風呂もトイレも無い牢屋に閉じ込められてるなんて」

「初めてじゃない、だと……！」

ジュンの紫の双眸に強い光が宿った。

「ふざけるな！ こいつは大罪人だ！ 世界を滅ぼす力さえ持つ化け物だぞ！ こういう奴には相応の扱いをしてやればいいんだ。それとも貴様、この魔女の色香に惑わされたのか？！」

ミツキの苦笑が凍った。別にたじろいだ訳ではないが、怒髪天となった友人をどうやって宥めようか、それを考えるのに身体の動きが止まってしまったのだった。

沈黙が訪れた。他の牢に閉じ込められた魔物達の、かすかな囁きが聞こえてきた。

「ジュンって怒りっぽいのね。ミツキの言ってたとおり。本当、純情の『ジュン』だよ」

——最悪のタイミングでその台詞が出たな……。

思わぬ事態に、さしものミツキの表情が凍りついた。純情の『ジュン』——ミツキ自身が考えたそのあだ名は、重軽傷者四十名を出す事件まで引き起こした禁じられたワードだった。

ジュンが剣を抜くのは一瞬だった。

キン——！ 鉄に刃が食い込む甲高い音が、静かな地下牢に響き渡った。

a c t 2 「我儘で恋する独り子が（後書き）」

途中の光樹の長い台詞は原稿用紙三枚半くらいあります。読み飛ばしちゃってください（今更）。

一人の若き騎士を選び

「座下、私は蒼崎・光樹および氷室・紅鳥の両者の転属を進言致します。あの二人はこの職務には不適當です。もっと責任の少ない辺境にでも飛ばすべきです」

「あ……そうか？」

「そのとおりでございます。座下、長旅でお疲れでしょうがこれはもはや一刻の猶予もならない問題であります。あの者を今の職務につけたままなら、とおからず取り返しをつかないことがおきます」

「ん……」

伽羅色の壺などが多く並べられた豪華な部屋。一人の若い騎士が、ごてごてとマントなどで着飾った年配の神官に対して、言葉に力を入れて話しかけている。騎士は席にソファアに座っているが、その神官は立ち歩き騎士の話を、部屋に並べられた彼の物ではない壺の品定めをしながら、興味なさそうに聞き流しながらしていた。

「大司教座下、どうか私めの言葉にお耳をお傾けください。これはゆゆしき問題です」

「――まあそんな怒るな、音無特級十字騎士よ。これには色々難しい問題があつてな……」

ガタ――ソファアを鉄のブーツで叩いて、ジュンが立ち上がった。「座下――」

ここはギマランイス大教会の司祭室。大司教はよそからついたばかり、地下牢から息巻いて出てきたジュンと鉢合わせて、寢室に立てこもった司祭の職務室で談話することになったのだった。

「わかったわかった、そういきり立つな。いま納得するように説明してやろう」

大司教の大きな腹がジュンの方を向く。

ジュンが腰を降ろすと、大司教も彼と向かい合って座った。

「いいか？ 確かにお前から見たら蒼崎がここの助祭に不向きなの

は確かかもしれない。だがな、實際あの男をおいてこの助祭にすべき者などいない。お前はもう今代の『黒き月の独り子』を見たのだろ？ 俺はあれが恐ろしい。俺はこれまで三人の『独り子』を見たがな、あれほど強い心と、強い力を持ち合わせた独り子は初めてだ。それどころか、彼女のような存在は記録に残されていない。お前はあれを打ち倒し克服したから平気だろうがな、できれば俺は姿を見ずに済ませたい。それはあれを見た、もしくはあれを知っている誰もが思うことだ。――あれは無条件に人の心を竦ませるのだ。――それなのに、蒼崎は平然とあれと接触する。それはとても貴重なことだ。蒼崎はこの地下牢に繋がれたすべての魔物にすくむことがない。その男を外すことができるか？ 蒼崎は魔術師としても稀有な能力を持っているし、ここにいてもらわなければならないのだ」

「しかし――」

「ま、他にあやつを飛ばす場所も無いんだがな。あやつは何故か上層部に嫌われていてな、ここで一生過ごすことにされてるんだ。面倒な政治的問題が絡んでいる、諦めてくれ」

穏やか、というより呑気そうな大司教の言葉。だがジュンは何も言うことはできない。

「そういうわけで、お前も職務に戻ってくれ。あの独り子と折り合いを付けて、護送の任務までついてくれ。そうしたらお前は一個師団の指揮だって取れる立場につけるかもしれないぞ」

「俺は権力には興味がありません。しかし――世界を護るためなら尽力は惜しみません」

そうかそうか、と緊張感無く返す大司教に一礼して、ジュンは部屋を後にした。

からんからん、と足音を立て、前方から袖を振りながら歩いてくる人影があった。

「ジュンー！ やっほー」

駆け寄ってきたカミエの姿は先程のみすばらしいものではなく、ジュンの良く知らない服装に変わっていた。――端的に言って、それはドレスではない。――絹だと思われる衣装の色は青い藤の色で、彼女の瞳の色に合わせたものだろうが、教会の廊下の灰色には合っていない。とにかく袖が長いのが目につく。胸の下に巻かれた、太い、重そうな帯も目立つ。下半身は筒のように包まれていて、ジュンにはその服が竹を連想させた。

「あ、見てる見てる。どう、この服？ ミツキが出してくれたんだよ。私はよく知らないけど、フリソデって言うんだって。可愛いよね」

――ミツキは独自の文化を持っている。

ときどき、あるいはしばしば、ミツキはジュンの知らない物品を持ち出して彼を驚かせたり呆れさせたりする。

囚人服ではなく、良くは知らないが小奇麗な衣装をカミエに着せたミツキに対し、いったん収まっていたジュンの感情がまた昂りでしたが……三秒の後には彼の精神は燃え尽きていた。もはや怒るのは馬鹿馬鹿しい。ミツキに、この目の前の化け物、これらを相手にいくら何言っても無為だ。

ジュンは諦めた。

「あ、溜め息ついてる」

「……………ミツキはどうしてる？」

「ミツキ？ ミツキは部屋で待ってるよ。あ、私は呼びに来たわけじゃなくて、ただ散歩していたわけだけど」

「そうか…………」

ジュンはミツキの部屋の方へと歩きだす。

その後ろを、下駄を履いたカミエの足音が、カラン、カラン、と追いかけてきた。

「……お前が歩いていたら、さぞかし教会の奴は驚いただろうな」

ジュンは何となしに言っていた。——会話などする必要などないはずなのに、化け物と呼んで憚らない少女を相手に、ジュンは無意識的にコミュニケーションを始めていた。

カミエはそんなジュンの様子を深く考えることなく、自然に受け答えた。

「ううん、滅多に歩いてないから、ここの教会の人。少し歩いてる人見たけど、遠目で、向こうからだと私がこの服着てたら誰だかすぐには分からなかったみたいで、視界から外れてから驚いてたかな」
「お前から驚かしたりはしないのか」

「しないよ、そんなこと。だって、私が半径一メートルに近寄ったら、みんな心臓が止まっちゃいそうに見えるんだもん」

カミエはざっくりと言った。

「ミツキとは仲が良いみたいだな」

「まあね、嫌いじゃないかな。ここに来てから、他に相手にしてくれる人もいないし。変にビクビクしてなくて、でも別に怖いもの知らずってわけでもなさそうところが面白いかな。でも——」

でも？　と言葉の続きをまつジュンの目の前で、カミエはその愛らしい顔を奇妙にしかめて見せた。

「たらしっぱいのが嫌かな。——ていうかたらしだけど。軟派っていうのはああいうのを言うんだよね？　なんか、女の敵って感じ」

「女の敵……」思わず口元が緩みそうになったジュンだったが、強情に表情を殺した。

「そ。——それにくらべて、ジュンは硬派。そうだよな？　ジュンに愛されたら、きつと一途に死ぬまで思い続けてもらえるんだなっ

て、私ときめいちゃうの」

うるうる、とカミエの蒼い瞳が輝いていた。

ジュンはぴたりと足を止めた。

「それで――」

どうやって思うことを尋ねようか、ジュンは言葉を選べなかった。

「ん？ どうしたの、ジュン？」

「……あ、と……」

「僕とカミエちゃんがどこまで行ったのかって――寝たのかって、聞きたいんでしょ？ ジュン」

ミツキが現れた。あどけない甘い顔に、にこにこ笑いを貼り付けて。

「ウブだね、ジュン。童貞でもないっていうのにさ」

「……」

「僕はカミエちゃんにキスもしてないよ。――できればしたかったけど、なかなか心を許してくれなくてね」

「当たり前じゃん。私、そんな尻軽じゃないし。乙女の純情をなめないでよね」

カミエはジュンの腕に抱きついた。

「な、なんだっ……」

ジュンが慌てる。

それを見てミツキはクツクツと笑った。

「なかなか仲が良くなってきたみたいだね。――ほら、話は僕の部屋でしてくれるかな？ ここで話しこんでると、他の神官や騎士が出てこなくなる」

「どう？　この子は。なかなか面白いでしょ？」

神父姿のミツキがジュンの知らないお菓子を出してきた。小さなホットケーキ二枚貼り合わせて、その間に小豆を煮て潰したものが挟まれている。――いわゆる『どら焼き』というものだ。ジュンと並んでソファに座った着物姿のカミエは、テーブルに並べられたどら焼きにさっそく手を出し、嬉しそうに頬張った。

「この女、とんだ食わせ者だな」

どら焼きを不機嫌に睨めつけながら、ジュンがぼそつと言った。応接間の奥の台所から、さっき飲まされた苦いお茶――抹茶淹れた茶碗を盆において、ミツキが姿を現す。

「その言い方だと、この子がどれだけ凄いかは判ったみたいだね」
「わからなくてどうする。――俺はよく知らんがお前の説明のおりだと、黒き月の独り子は心を壊して強い力を持っているか、力が弱くて心が生かされているか、二つに一つ。――そう、だから今まで問題なく処理してきたんだろ？　こういう奴等が十二年に一度だか暴れてたら、とてもじゃないが隠しきれるものではない。だが、今までの独り子は扱いやすかったから秘密裏に物事が進んでいたんだ」

うんうん、と相槌を打ちながらミツキは抹茶を二人の前に並べ、ソファに腰掛ける。

「そのとおりだよ。今までは棺に閉じ込めて運搬するとかやりやすかった。でも、この子は違う。心もあるし、強い力も持ってる。そして――我が儘だ。ごつつい騎士達に囲まれて旅なんかしたくないってごねてくれるから、僕達は大困りさ」

「別に我が儘言っていないじゃない」

四つつ目のどら焼きを頬張りながらカミエが抗議する。――「私はただ一人のナイト様と旅をしたいって言ったんじゃない」

「そのナイトって言うのは……」

「君をおいて他に無いじゃないか」

ジュンの言葉に割り込んで、ミツキが言った。

「そうでなければ、いくら君が有能だからといって一人で黒き月の独り子の護衛なんかさせられる訳無いじゃないか」

「何で俺なんだ？」

嘆くようにジュンと言う。

ずず……抹茶を音を立ててすすりカミエが答えた。

「好きになったから」

「はあ？　なんでだよ」

「だから、好きになったからだって」

ジュンはその答えが理解できずに沈黙する。

ことん——茶碗を置いたミツキが言った。

「人が人を好きになるのに理由はない——そういうことでしょ？」

「そうそう」カミエがはしゃぐように応じる。

「お前が？　——ふざけるなよ」

ジュンがにわかに立ち上がった。

一度怒って、しばらくは怒ることはないと思っていた。しかし、

ジュンの感情のメーターはまたしても振りきれていた。

「誰が誰に向かって物言ってるんだよ？　お前は虐殺者だろ。大罪

人だろ、この化け物め。お前が誰かを好きになる？　ふざけるなよ。

お前には、そんな人間みたいな感情を持つ権利はないんだよ。お前は黙って鎖に繋がれて北まで連れてかれれば良いんだ」

ジュンは一息に言った。

さすがのミツキも、ジュンの二度目の剣幕に少しだが色を失っていた。だがカミエは、平然と微笑しつづけたままだった。

「ジュンって……」

カミエがジュンを見上げながら言った。——「拘束プレイ好き？」

空気が凍りついた。

「……僕はそんな趣味があったとは知らなかったなあ」

あくまでも緊張感無く言うミツキの前で、ジュンがカミエの襟首をつかみあげた。

バシン！——鋭くカミエの頬を打ってから、彼女を打ち捨ててジュンは部屋を出ていった。

「……本当に、僕じゃ駄目なの？」

出した飲食物を片付け、番茶を改めて淹れてから、ミツキはカミエと向き合って座り、問いかけた。

カミエは白い頬を赤く腫らし、しかし陶然とした様子で痛む頬を撫でていた。

「……君の求めることは、ジュンには難しい。——酷で——憐れだ」
「ミツキは、ジュンの友達だからそんなことを言うの？」

ティーカップに淹れられた番茶に口をつけながら、カミエが問い返した。

ミツキの表情に笑いはなく、苦いもので染められていた。——ジュンの前では見せない顔だった。

「そうだね……彼のことをよく知ってるから、彼のことが好きだから、彼にはあまり辛い目には合ってほしくない……当然だよね？」

——それだけじゃないけど」

「うん。ミツキがいて——ジュンはミツキが友達にいて幸せだと思うよ」

カミエが立ち上がり、部屋を一周し始める。

「ミツキの言いたいことは分かるよ。——ジュンが、見た目は無愛

想でつつけんどんだけど、ただの強がり、優しいだって私は思う。――初めて、あの私が壊した町の瓦礫の中で会った時から、ジュンがそういう人だって言うことはわかってた。わかってたから、好きになった。――私のこと、ジュンはなかなか認めてくれないだろうけど、いつかきつと好きになってくれる。好きだって言うようになる。でも、そうになったらジュンはすごく傷つく。……うん、わかってる。だけど、だからジュンが好きなの。ジュンに好きだって言うて欲しいの。私はジュンを傷つけたいのかもね」

カミエが言葉を打ち切る。

どうして？ ミツキが問いかけた。――彼女がその言葉を待っていることを理解して。

「だって、私、ツミビトだから。もういっぱいいいっぱい人を殺しちゃった、大悪人だから。もうちょっと……悪いことがしたいんだと思う」

ツミビト――その言葉はミツキの胸を強く突く。

それにね、とカミエがミツキの背後から声をかけた。

「ミツキには素敵な彼女がいるじゃない。――私はちょっと怖いけど」

「ああ、紅^{アカ}鳥ね。――怖いかい？ そうかもしれないけど」

「そうだよ。あの人も、私を見て怖がらなかった。ううん、それだけじゃない、あの人はもし私に怒るようなことがあったら――殺したくなったら、ためらいなく私を殺そうとする。たとえば、私がミツキを殺すとか――例えだよ？――そしてたら、何が起ころうとお構いなしに、私を殺そうとする。そういう人っぽかったら私は怖いな。――ま、そうじゃなくても、ミツキと一緒に旅したら、絶対あの人がついて来るでしょ？ そしたら、いつつもつんけんしてそうで気が滅入るし」

ははは、とミツキは笑う。

カミエも声を合せてくすくすと笑った。

「そうだね、何から何まで言う通りだ。――僕からも、アカから離れる気はないしね。――でも、残念だな。君も可愛いから、一緒に旅したかったよ」

「本当？」

「もちろん。可愛い女の子はみんな好きさ。――ジュンのこととか関係なく、君と君自身を死に送る旅をしたいのも本心だよ」

と、部屋中を歩き回っていたカミエが、いつしかミツキの前に立っていた。

カミエはミツキに覆いかぶさるように腰をかがめ――唇を重ねた。キスの時間は短かった。だが、恋人同士のように二人は貪るようにキスを交わした。

「――これで諦めてね」

唇を離し、たたずまいを正してカミエが言った。

その薄紅色のふっくらとした花唇は、彼女自身のものではない唾つばきで濡れていた。

「わざわざサービスしてくれたのかい？」

「ううん。これは予行練習。ジュンとキスするときのね」

「ああ、それはいい発想だ。彼は素人娘は嫌うからね」

「嘘……私、処女なんだけど」

「はは、そのへんは愛で乗り切ってくれ」

そうだね、とカミエは答えると、ミツキに背中を向けた。

帯に手をかけ、ぞんざいに振りほどいた。青藤の描かれた見事な振袖をばさりと脱ぎ棄てソファアの背もたれに投げかけ、襦袢姿になつてミツキを再び見た。

「じゃ、着物返すね。この白い服だけ貰っていく……いいよね？」

「もちろんいいよ。それは襦袢っていうんだよ。ランジェリーだね」
「じゃあね、と別れの言葉は背中越しに投げて、カミエは部屋を去ろうとする。」

カチャ……ドアが開いたとき、ミツキは言う。

「神恵。——ジュンを、あまり傷つけないで」

言葉を受け取り、彼女は薄く嗤う。それは凄惨に。天使のごとく美しさと、悪魔のような残酷さを合わせた微笑で。

「約束、できないね」

夜——といっても日の差さない地下牢では、昼も夜もあったものではない。しかし、夜は魔の気配が強くなる時間。昼よりも禍々しい雰囲気漂い、それとなく夜とわかる。

コツ……コツ……

誰かの足音が虚ろに響き渡っていた。夜になれば滅多に人が来ることのない地下牢。それも、世界を滅ぼすとも言われる少女が閉じ込められている今となっては、たった一人を除いて、地下牢を訪ねる者などいないはずだった。

「誰か」は小さな灯りを手に、闇の中で目を光らせる檻の中の魔物達の前を通り過ぎまっすぐ地下牢の最奥へと進んだ。

その最奥に繋がれた、神の傑作のごとく美しい少女は、眠りの前のまどろみから覚めて近寄ってくる気配を感じ取った。

ゴゴ……重い扉が石の床とこすれて鈍い音を響かせる。そこから覗いた蛍のような灯り、それを手にしている人物にカミエは声をかける。

「ミツキー―？」

「……お前、あいつのことが好きなのか？ 残念だったな、俺はジュンではない」

入ってきたのは鎧姿の騎士。灯火の光を反射してアメジストのように輝く瞳の、その目付きは鋭いが、顔立ちはまだどこことなくあどけなく少年と呼ぶのがふさわしいなりだった。

「うーん……この時間に来るなんて言ったら――ていうか昼間でもここに来るのはミツキくらいだから、ね。いらっしやいジュン、来てくれて嬉しいな。なんの御持て成しもできないけど」

鉄格子のなかで、カミエは顔を輝かせている。

立ち膝で自分を仰ぎ見ているカミエを見おろしながら、ジュンは鉄格子に背を向けて座りこんだ。

火ではない、八面体の宝石が光を放つ魔法の松明が床に置かれると、ジュンとカミエのいる空間だけ光が包んだ。

「何しに来たの？ ていうか、何でそっち向いてるの？」

「別に何しに来たわけではない。俺はここで寝る。お前の顔を見る必要はなからう」

カミエは鉄格子の間から手を伸ばす。――その鉄格子のうち一本には、誰かが剣を叩きつけたような切れ込みが入っていた。――首に抱きつきたかったが、鉄格子の中からは手が届かなかった。

「ねえ、これ開けてよ。一緒に寝ない？」

「魔女と寝るほど俺はいかれていない。お前も黙って寝ろ」

「格子こわしてもいい？」

「また殴りたいのか？」

ジュンに取りつく島はない。ぷう、と頬をふくらませ、騎士のマ

ントの端だけを掴んで、カミエは諦めたように牢の床にじかに寝そべった。

「ジュン、私のこと、嫌い？」

笑っているけど、とても切ない裏腹な声。その声はジュンの胸を、きゅ……と弱く締め付けたが、いつそ何気ない感じで彼は答えた。

「好かれると思うのが、そもそもおかしいよな」

「そうかな……そうかも？ ジュンは、私が人をいっぱい殺す女だから嫌いなのか？」

「あいにく、人殺しを好きになる趣向はない。——俺は、人を傷つけるものを排除するために騎士になった」

「誰かを護るため、でしょ？ ジュンは照れ屋だね……優しいし」「優しさなど不要だ」

ジュンは切り捨てるように言った。——「俺はこの剣で斬るのに理由のある相手を探しているだけだ。護るためなんて……」

少し、沈黙。

「ジュン、私を北へ連れて行ってくれる？」

答えは無い。

「ジュン？ もう寝ちゃった？」

「……役目だからな。俺しかやる者がいないなら、引き受けるしかない」

「本当？ やったあ！」

そのはしゃぐ声は、静寂の凍りついた地下牢に華やかに響き渡った。——絶対的に。地下牢によどむ暗い気配など吹き飛ばすように。

「何をそんなに喜ぶ？ 俺と旅をすることか？ ……死ぬことがか？」

「どっちも！」

カミエは心底楽しそうに言う。――「ジュンに連れてってもらって、旅の果てで死んじゃう。最高じゃない!？」

「どうかしてるな……」

少し間を作ってから、ジュンは言った。とても、苦々しく。

「そうだね」

カミエは短く、感情の希薄な声で答えた。

「どうかしてる――ジュンから見たら、普通の人から見たらそう思うかもね。でも、私、人間じゃないから。神様の力を手に入れて、いっぱい人を殺して、心は壊れなかったけど、もう人間じゃなくなっちゃったから」

カミエは見る、闇の渦巻く牢の天井を。そこにある闇は深く、とても人が見透かせるものではない。だが、カミエの眼はそれを見ていた。光――電磁波ではなく、闇そのものを信号としてとらえるカミエの視覚神経だった。

「私が見ている世界と、ジュンの見ている世界は違う。――喩えの話じゃなくて、物理的にね。この固い床に転がっても平気だし。――でも、これもよかったかもしれない。これでよかったと思う。じゃなかったら、私の心はもう碎けていただろうから。色んな痛みに耐えられず、私はお人形みたいになっていた。――そのほうが周りの人には良かったみたいだけど。――私ね、まだ生きていきたいの。まだ、若い人生を歩んでいるんだぞーって言いたい。死にたいって言うのも本当。死にたくない気持ちは一切なくて……なんていうのかな、この先とおからず死ぬこともまた当然って感じ? でも、それまでは自分勝手に生きていきたい。だから……」

ジュンのマントが強く引っ張られた。

何かと思い、振り返ったジュンの眼に映ったのは、悲哀の表情ではないのに、透明の雫を一筋、ほほに流しているカミエの美しい顔だった。

「悲しいとか、苦しいとか、よく分からなくなっちゃった私だけど……死ぬまでに恋をしたくなった。だから、ジュン、あなたの恋人

になりたい。——ジュンは嫌だろうけど、私の心はそこに縋りつく。私が確かに生きているんだって、この恋しい気持ちが証明してくれる……とか思うの」

てへへ、とカミエは笑う。

ジュンは切り捨てるように顔を背けた。——その苦い顔が、いつもの仏頂面以上の意味を隠していることを知られないために。

「お前は、罰を受けるべきじゃないのか？」

「あはは、そうだね。——でも、私はそんなもの受けてあげない。嫌だから。——ねえ、私は罪人なんでしょ、ジュン？ 罪人だから、ジュンを誘惑して、最後に傷つけたい……、そんなことも考えた」

——なんのために恋をするんだ？

——自分のためだけに、一方的に恋をするのか？

心に浮かぶ疑問、しかしジュンは口には出さない。口に出せば、彼女と向かい合ってしまうような気がしたから。

「あー、でもうまく言えないな、この気持ち。一応、初恋だからね、ジュン」

「……俺は寝る。もうこれいじょう話しかけるな」

カミエの言葉を見殺しにして、ジュンは言った。——もう今は、これ以上、彼女の言葉と冷静に、冷淡に向き合うのは無理だったから。

「そう。——おやすみ、ジュン」

カミエは優しい、優しい声で言った。

光を放つ宝石の魔術を切ると、深い闇がすみやかに二人を包んだ。それは深淵と呼ぶにふさわしいほど、深く、黒く、絶望的なまでに昏い闇。だが、ジュンの心は自然と緊張しなかった。すうすう……と静かに聞こえる、カミエの呼吸が闇の恐怖も意識させなかった。

——俺は、お前を愛したりはしない。

—— 一人の若き騎士を選び（後書き）

やっぱり和服がいいなあ、と

書きながら思っていました。でも今回はステレオタイプなファンタジーなのです。名前は日本人ですが、今時はそういうのも珍しくないようにですね。

旅をはじめた件

翌朝——と思われる時間——まだ床で眠りこけているカミエを尻目に、ジュンは静かに地下牢を後にした。

ギマランイス大教会の地上部の大理石の廊下は、ジュンがここに来てから初めて見る賑わい、あるいはあわたたしさがあった。

華やかな衣装で身を固めた神官たち、重装備に身を包んだ騎士たち、ぱらぱらと往来している。別に祭りというわけではない。それどころか、行き来する者達の顔にはとても、とても固い表情があった。

「やあ、ジュン。カミエとの夜はどうだった？」

純白の神父服を着たミツキが飄々と現れた。

「別に、なにもねえよ。——それより、これは何の騒ぎだ？」

「何って……言ってなかったっけ？ 君がカミエを連れて『巡礼』に出てくれるから、みんなでお見送りの儀式をすることになったんだよ。僕はこんな儀式いらなくないと思うんだけどね」

「ちよっと待て、俺はまだ正式に受けるとは言っていないはずだが」
普通こういう状況は、当事者が認めなければ進まないはず——
——ジュンは険しく顔をしかめた。

ミツキはにっこりと相好を崩した。

「そうだね。けど、どうせ君が受けるしかないから、それっぽい雰囲気になったら一秒でも早く儀式して送り出したくなったんだろうね」

「指示するのは、ここの司祭か？」

ジュンはその司祭とはまだ顔を合わせていない。

「うーん、司祭もそうだけど、君も大司教にあったよね？ あの人が来たら、ま……すぐに儀式が始めることになったのかな？ ——そうそう、昨夜、君の姿が見えなくなってから大司教座下が僕のと

ここに来て、君が仕事を受けてくれそうか聴きに來たんだっけ。――僕は『はい』って答えた」

――お前のせいだ。

ジュンは自らの友を恨めしく思った。が、もはや後には退けない。「それで？　儀式はいつからだ？」

「まだ準備ができてないから、二時間後ぐらいにはなるんじゃないかな？　君はおめかしして待っていなよ。――そうだ、カミエちゃんも起こして、綺麗な服を着せてあげなきゃ」

そういうと、ミツキは地下牢に続く道へと消えていった。

やれやれ……ジュンは覚悟を決めるように溜息をついた。

静かで、厳かな空気の中、『黒き月の独り子』を巡礼の旅へと送りだす儀式が始められた。

見た目は砦のようで無骨なこの教会だったが、儀式を行う聖堂は豪華絢爛な内装だった。ただ、窓はなく洞窟のような陰鬱さの中、無数の燭台がまばゆく輝いていた。その灯火の熱気、整然と並んだ神官・騎士たちのいきれで聖堂の空気は早くもムワアと暑苦しい。聖堂の祭壇に続く大きく開けられた通路に面して、剣を顔の前にかまえ微動だにしないジュンは、いつもは着けない羽根つきの兜を脱ぎ棄てたい気持ちを抑えるので精一杯だった。

と、聖堂の大きな扉が開いた。――黒き月の独り子の入場である。熱気で若干緩んでいた一同に緊迫が走る。

入ってきたカミエは、まるでウェディングドレスのような修道女服に身を包んで現れた。槍を持った十三名の騎士たちが、彼女に十三の穂先を突き付けている。彼女の手首には銀の手錠がある。だが

カミエの表情に臆した色はなく、どちらかといえば早くも退屈しているような表情で、恐怖しているのは彼女に槍を突き付けている騎士のほうだった。

微笑しているカミエは、聖女のような雰囲気纏っていた。とても裁かれるべき、いむべき大罪人とは思えない、神々しいまでの美しさ。見る者の心は無条件で恐怖させつつ、同時にその美しさで魅了もしていた。白い肌は燭台の蝋よりも白く、ターコイズの瞳は星のように輝いている。背のなかほどまで伸ばされた金の髪はよく梳かされ、彼女の動きにあわせて微妙に、喻えるなら春の木漏れ日のような美妙さで揺らめき、輝いていた。

ゆつくりと、上品な動作でカミエは祭壇まで歩んだ。通路を固めるジュンの前を通る時は、ちらりと横目でほえんだ。――覚えず、ジュンの胸がざわついた。――決して恐怖ではない、別の感情、感動に。

「すつごく綺麗になったと思わない？」

カミエの背後にいたミツキが、ジュンの前を通る時に話しかけた。

「……ああ」

今のカミエは、さすがに非の打ちどころがなかった。化粧もしっかり決められていて、シャープな輪郭がジュンの好みどおりだった。「素直だね。――さ、君もおいで。君もまたこの茶番の主役なのだから」

言われたとおり、ジュンはミツキと並んで祭壇へと登った。

登場が終わり役者がそれぞれの位置に着くと、壇の裾からこの儀式を司る大司教が現れた。恰幅のよい年配の男性は、豪華な衣装を重ねて着てさらに膨らんでいた。暑いだろう、汗をかいている。

――カミエは涼しそうだな、とジュンは彼女を盗み見た。おそらく感覚が違ふのだろう。

意味のなさそうな長さだけはだらだらとしている口上で儀式がはじまった。

誰が考えたのか分からない、意味不明な儀式。――本来、これまでの『黒き月の独り子』に対しては、この儀式で独り子の力を封印するなどの魔術的な処置が行われていたのだろう。だが、今回の相手は少し違う。七那瀬・神恵は妙な術をかけられようものなら即座に抵抗する。そして、彼女の抵抗をおさえることは、この場の全員が束となってかかっても難しい。この場の者達はすでに彼女の恐怖を植え付けられている。刃を鈍らせる恐怖があつては、ますます彼らは、カミエの前では赤ん坊のようなものだ。

だから、この儀式は形式だけだった。魔力のある聖句を込められた聖歌も、音楽も、いっさいの魔力を抜かれて奏でられる。奇妙なマスゲームも、剣舞も、ただ形どおり演じられるだけだった。

ジュンは退屈しきってぼんやりとこの進行をみていた。決して顔に退屈の表情を見せることはないが。

カミエといえば、半分眠ったような危うげな感じで立ち続けた。ミツキは特に感慨も無く、微笑を顔に張り付かせていた。

――ふと気がつくとも大鋏を持った神官がカミエの傍に立っていた。

カミエは夢うつつで気がついていない。しかし、神官が彼女の髪に触れた瞬間、カミエが眼を見開いた。

「――何？」

鋏を持った神官と距離を取りつつ、カミエは問いかける。

カミエの蒼い双眸に睨まれた神官は、とたんに鋏を取り落としそうなくらいに動揺しはじめた。

「何と問われましても、髪を切るのですよ。我々の信仰では、女性

の信徒は髪を短くし、布で隠すことを、奨励されているのです」

緊張した神官はつまりつまり、敬語で答えていた。

カミエの表情が険しくなる。

「私、信徒になるって言った覚えがないんだけど」

「言いましたよっ。先ほど、我々の問いかけに貴方は是と答えましたよ」

カミエは一瞬考えた。

「――覚えてない」

「言いましたよ」

「じゃあ、なかったことにして。私、髪を切るなんて嫌だから」

そんな……、と神官が凍りつく。

窮した神官は、なりゆきをぼんやり眺めていたジュンに視線を向けた。しかしジュンは何と言ったものやら、と逡巡する。となりではミツキが面白そうににやにやしていた。

「もう儀式を切り上げられないのか？」

ジュンは小声でミツキに問いかけた。

「無理……かな？　ここまでもかなり儀式の流れを変えてきてるし、

これ以上土壇場での変更は難しいかなって思うけど」

――さて、どうするか。

放っておくのも一つの手だが、カミエが本気で怒りはじめれば手が付けられなくなる。髪を切ることを勧める気は毛頭なかったし、しかし神官たちがやろうとしていることに異議を挟むのも面倒。

やはり放置して、傍観することにした。

ざわ――

不意に、奇妙な空気を感じた。敵の気配。しかし人間の軍団とか、魔獣モンスターの群れでもない。否、モンスターであるようだが、ただの魔獣ではない――

「混沌獣カオティックか……？」

ジュンが気が付いた刹那、教会に仕掛けられた結界が発動し、教会がガラスをひっかくような音を立てて震えはじめた。

聖堂に集まった神官、騎士たちがどよめく。大司教が壇の前に出て一同に声をかけようとしたが、次の瞬間だった。

ドン！――強固な聖堂を揺るがすような衝撃が走る。

頑強な教会の壁を突き破り、巨大な黒い角が生えた。――カオティックだった。侵入はしてこないが、壁を破ってくるのも時間の問題。

突然の襲撃に、聖堂の者たちは恐慌状態に陥った。カオティックの角がのぞいている壁から遠ざかりつつ、おし合いへし合い出入り口へと殺到する。

ジュンはとりあえず騒がず、鎧の装着具合や腰のベルトに挟んだ聖符を確認しながら、周囲の様子を観察した。

大司教は真っ青になって立ちつくしている。他の神官はみな壇から飛び降りて逃げてしまった。――とりあえず、ジュンから見て左手の壁以外、敵が破ろうとしている壁はない。

「お、行くかい、ジュン？　なら、僕もやろうかな。――久しぶりに二人で暴れてみようか」

落ち着き払って、ジュンは羽根の付いた兜を脱ぎ棄て、剣を抜き放ってカオティックへ向かって歩きはじめた。布地の多い神父服を着たミツキも、ダフダフと服を揺らしながら、楽しそうに笑いつつその後を追う。

壁の向こうから角を突き入れているカオティックは、おそらく象より大きいだろう。突きこまれた黒い振くれた角が振られ、聖堂が低く大きく悲鳴を上げた。

左手に楯、右手に剣のジュンが身構えた。

しかしジュンが飛びかかる前に、眩い閃光の柱が黒い角をへし折った。

くおおおん——カオティックの悲鳴が高く、かつ低く、壁の向こうから魂を震わせるようおぞましく響く。

「——あいつか！」

思わず背後を振り返ったジュンの視線の先、光の翅を背中に出現させたカミエが、カオティックに向けて右手の平をかざしていた。

凜とした、その立ち姿。力強く、神々しい雰囲気は思わず息をのんで見とれるほどに。

ジュンが見ている中、カミエは立て続けに光の砲撃を三発放った。どれも雷が間近に落ちたような迫力。人間が魔術で同じくらいアストラルの出力を出そうとするなら、相当長い儀式詠唱と少なからざる精神力を必要とするだろう攻撃を、カミエは力を入れた様子でもなく一息に放つのだった。

光の砲撃は教会の壁を貫き、その向こうのカオティックを強烈に打撃する

カオティックが倒れる気配がした。だが同時に闇が濃くなり、その巨大な角付きのカオティックが再生し始めようとしている気配も伝わってくる。

ジュンはすかさず壁の穴を目指した。しかし、

ふわ——光が舞い降りる、

チカラ

全身に光を纏ったカミエが、彼の行く手を遮るように降り立った。「ねえ、私にまかせてよ。あいつら嫌いだから、私がやつつけちゃ

いたいんだ」

カミエは弾むような声で言う。化粧の乗った美しく整った顔には、満面の笑みがあった。

「ふざけるな。さっきは不意を突かれたが、これ以上の勝手は許さん。——お前は黙ってひっこんでいろ」

ジュン是不愉快だった。自分の戦いに横やりを入れられたような感じで、——何故か、彼女に『戦ってほしくない』と思って。

カミエは残念そうな顔をして洩った。

そこに、まあまあ、とミツキが割り込んだ。——その彼が何を言おうとしているのか、ジュンは予測してしまった。

「先に言うておくが、こいつの言う通りにしようなんて、俺は認めないぞ」

「察しが良くて助かるよ。——でもね、本当に、カミエちゃんに任せるのが楽だよ。って、君は楽したがらないだろうけど。——そうだね、この機会に彼女の力を見極めるといふのはどうかな？ これから彼女を連れて歩く上で、一度は知っておくべきじゃないかな、彼女の力の強さ————恐ろしさを」

ジュンはもちろん納得できない。けれど、ミツキの言い分は一理あった。一度戦ったことがあるとは言え、今の彼女がどのくらいの力を持つのか、その力をどのように使うのか、知っておくのに損はなかった。

わかった、とジュンは鈍く答えた。

「じゃ、行ってきました。あんまりここを壊さないようにしてあげるから」

背中 of 二枚の白い翅が、一層強く輝いた。

とん——軽く床を蹴ると、彼女は重力を無視して浮遊し始めた。

白いドレスが、空気の中でやわらかく揺れる。流れるような金髪は、光を纏って幻想的に風に舞う。

天使———そう喻えずにはいられない、絶対的な美しさと奇跡的な愛らしさで身を飾り、彼女は戦いへと飛びこんでいった。

教会を飛び出すと、彼女はまっすぐに天上に昇った。

彼女は翳った太陽を背に、空の高みから地上を見下ろす。

地上を闇で覆う、忌わしきカオティック。

淡く虹色に輝く、二枚の白光の翅。大きく開くと、無数の光の矢が放たれた。

まるで、天が裂けたような衝撃。

轟音が空気を震わし、大地が爆ぜた。閃光が人々の眼を眩ませ、闇に淀んでいた地上に光が溢れる。

それは神の怒りの象徴たる雷の如く。

神を崇める教会を、神の雷が包んだ。闇をことごとく打ちのめし、空が慄き、風が狂ったように吹き荒れた。

——瞬く間の出来事だったと、事後に語る者がいた。

混沌より生まれた獣は、二十体以上いた。どれもこれも大きなものばかり。ギマランイス教会の者たちが総がかりで、万全の態勢で迎え撃ったとしても勝てたかどうかかわからない、その敵勢。

だが、光と舞う少女はいともたやすく、白い稲妻をもってわずかな間にその大部分を滅した。

教会の石垣に、一文字に切り裂かれた痕跡があった。

強い光によって数日間眼を痛めた者によれば、『彼女』が右手からのぼした大きな光の刀により、カオティックごと切り裂いたという。

建物の外壁が、匙で掬われたように削がれた部分があった。

三日経ってもなお歯の根が合わなかった者によれば、彼女がカオティックに向かって投げつけた光の球が、狙いを外れて炸裂し損傷させた後だという。

離れて設置されていた倉庫が総崩れにされていた。

命からがらその場からのがれた者が語るには、自身の二十分の一ほどの少女に蹴り飛ばされたカオティックが激突し、倉庫を押しつぶしたとのことだった。

カミエは戦士ではなかった。力の使い方を知らず、力任せに攻撃する。それはジュンが彼女と対峙した時と同じだった。

だがカミエの力は無尽蔵で、どうしようもないほど強力で、結果的に彼女の戦い方を肯定することとなっていた。

雄々しく、荒々しく、恐ろしくも美しい——喩えるなら、銀の月下に舞う激しい吹雪のような、身も凍らせるほどに華麗に、

嵐のような、雷雨のような暴力をもって、

彼女は微笑とともに勝利した。

一騎当千の活躍でカオティックを蹴散らしたカミエは、戦いが終わった直後、特に疲れた様子も無く風の中でほほえみながら立っていた。その様子は、軽い運動をして息を弾ませているといった感じだった。

「派手にやったねえ。これ直すの大変なんだよ」

ミツキが親しげに笑いかけながら言った。

カミエは少し困ったように笑いながらジュンとミツキに向き直った。

「あはは……これでも手加減しましたよ。じゃなかったら、この教会なんて今頃瓦礫の山だって」

——瓦礫すらも残らないだろうな。

ジュンが声に出さずに呟いた。

「さて、これからどうしようか？」

「座下……富岡・リヌス大司教……！」

遠くから、声が聞こえてきた。

歴史あるギマランイス教会の半壊を目にして、それを引き起こした『黒き月の独り子』の活躍を目にして、呆然自失となっていた大司教の意識に呼びかける声があった。

「あ、ああ……壺はそこに置いといてくれ……」

大司教のうわ言。

三者三様の反応が生まれる。

「……？」

「壺はここにないよ、ねえ？ ジュン」

「あー、この騒ぎで司祭のコレクションも全部割れたかな」

大司教はまだ帰ってこない。

仕方がないので、ジュンは彼の肩に手をかけ揺さぶった。

「なんだ、俺は壺を運ぶのに忙しいんだ……って、なんだ？

ここは何処だ？」

我に帰った大司教。

「音無・盾——そうだ！ まだ儀式の最中ではなかったか？ ……

おい、これは何だ！ 一体どうしたら……」

「大司教、そのことなのですが——もはや儀式の続行は不可能ですし、ここの者達のことと考えれば、私どもは早々に出立するのが良いかと私は思います」

「あ？ ——だめだ。儀式はやらなければならん。そのために俺は——私はわざわざ来たんだぞ。明日……は無理でも、明後日には何とかなるだろう？」

大司教は頑なだった。動揺が残って口調が揺れていたが。

ジュンとミツキ、それにカミエは顔を見合わせた。

「僕が何とかしようか？」

「……いや、もう少し俺が話してみる」

ジュンが再び向き直ると、またしても大司教は遠い虚ろ目で聖堂に開けられた穴を見ていた。

「座下——（大司教はびっくりとした）——私は特級十字騎士として

カルキスト

言います。教会内のすべての位階から、すべての派閥から独立した者として、私は今この場で、にこの『黒き月の独り子』を連れて巡礼の旅に出ることを宣言します。座下にはそのことをお耳に入れておかれ、上部に報告して下さるようお願いします」

ジュンの口調が少し強いものになった。

その凛々しい態度にちよつとびっくりしたカミエの眼前で、大司教はしぶしぶ首を縦に振った。

「そうか……わかった。そなたの旅路に我らが奉る神の祝福があらんことを」

「ありがとうございます。座下におかれましても、神の祝福が共にあられますように」

「本当は後からつけて行きたいくらいだけどね……今は折悪く紅^{アカ}鳥もないから、ここを離れられないよ」

「そうか。いや、別についてこなくていいけどな。――後始末を頼む」

「はは、任せておいてよ。カミエちゃん、ジュン、二人とも仲良くしてね」

「もちろん。きつとラブラブになってみせるよ」

「……」

少し日が傾きだした時間帯、ネズミにかじられたチーズのようになった教会の大門の前。

ジュンは馬に乗って手綱を取り、カミエもその後ろで横乗りしてジュンの身体に腕を回している。ミツキは儀式用の豪華版の神父服のままで、二人の見送る姿勢となっていた。

カミエは衣装を替え、フリルのついたチュニツクと灰色のハーフパンツの上に、聖職者用の外套を少し崩した白いブレザージャケットを羽織ったいでたちになっていた。馬に乗るために、金の髪は軽く一束ねにされていて、風の中にふわふわと揺らめいていた。

「またね、ジュン。今は君の力になれないけど、近いうちにまた会えるよ。――君から会いに来てくれる」

「――？　まあ、こいつ届けて暇になったら来ることもあるだろうが」

「いやいや……そうじゃないけど、ふふ……」

ミツキは思わせぶりに笑った。

ジュンはそんな彼を訝しむが、深く考えるのは止めた。

「じゃ、そろそろ行くぞ。カミエ、振り落とされても拾ってやらんぞ」

「嘘。置いて行ったら仕事にならないじゃない。――それより、こっち見て、ジュン」

ジュンは馬上で上半身をひねって、背後のカミエを見た。

カミエの視線は、ジュンの眼の位置より十センチメートルほど下にあった。少し、いつもより熱っぽい瞳でカミエは彼を見上げていた。

「ねえ……昨日話したこと、忘れてないよね」

一瞬、忘れた、と答えたくなった。――しかし、本当は一言一句まで覚えていたので、嘘をつけない聖職者故に、彼は是と答えるしかなかった。

「――恋人になったら――」

沈黙があって、口を開いたのはジュン。

だが言いかけて、ジュンは心拍数の急上昇に耐えきれず、一度言葉詰まらせてしまった。

カミエは黙って言葉を待っていた。ミツキは気配を殺したように静かにしていて、荒野の中で聞こえるのは、半壊した教会で騒いでいる聖職者たちの声だけだった。

「――俺の恋人になったら、俺の言うことに従うか？ 俺の手を煩わせないか？」

平坦な声でジュンは言った――つもりだった。

応えて、カミエはにっこりと唇を引いた。夜を誘う三日月のような、妖しい微笑だった。

「うん、わかった。ジュンの言うこと、何でも聞くよ。ジュンのためなら、なんでもする」

「……お前は、何もしなくていい。……ただ、俺についてくればいい」

「うんうん。じゃあ……キスしてよ」

ジュンの顔がひきつった。

だが彼の眼前で、ゆっくりと、朝霧に震える花のように瞼をとじるカミエを見たとき——ジュンは知らず識らず、唇同士を重ねていた。

「……ん………」

彼女の唇は甘かった。——まるで、心を狂わせる毒のように。だがそのような毒を人は、貪らずにはいられない。

唇を触れ合せた瞬間、ジュンの頭から一切の思考が消えた。

ジュンはカミエの頭を手で包み、またカミエもジュンの頬をたおやかな白い手で包み、二人は狂おしく唇を押し付け合い、さらには互いの舌と舌を絡ませた。

欲望の花が咲くような、淫らで、なまめかしいキスシーンだった。割と長い時間、二人の口付けは続いた。

唇を離すときも、名残惜しむようにゆっくりと離れた。

「大好き……」

蕩けるような甘い声で、カミエが囁いた。

その艶めいた、宝石のような蒼い瞳。——ジュンは引き剥がすように視線を逸らし、濡れた唇を手で拭ってから手綱を握り前を見た。意識は炎に炙られたように焼けついて熱っぽくなっていたが、無理やりに押さえつけ、冷静さを顔に張り付けた。

「——行くぞ。——ミツキ、達者で。お前に神の導きがあるように」
「君にも、神の加護があるといいね。——」

ぱしん、と馬の腹を蹴り、ジュンは並み足で馬を歩かせはじめた。

——これは、狂おしくも楽しい物語になりそうだね。
思ったとおり、と旅立つ二人の背を見送るミツキは思った。

——大好き。

その声が、耳から離れない。

ジュンは、遠い北の空を見上げ、この心が冷たい鉄の刃のように
なることを祈った。

お前のことなど好きにはならない——何度も、何度も心で繰
り返していた。

―― 旅をはじめた件」 (後書き)

第一話からそんなにあいだ開いてないですか？

次回からはどうなるか分からないですが。今回は時間は第一話の続きに持ってきて、三角関係をやろうと思っています。

チャット#2

「見て見てナナお姉ちゃん！ この野苺おいしそうだよ！（ジル）」

「本当だね、ジルちゃん。はい、どうぞ（神恵）」

「うー、すっぱい。でもおいしい」

「なかなか味が濃くていいね。ジャムとかにしたいな」

「お姉ちゃん料理得意なの？」

「うん。お母さんと二人暮らしだったから、お母さんがお仕事してる間、私が家事してたからね。レシピはお母さんから教わったの。」

「料理だけじゃなく、お洗濯も、お裁縫も、何でもできるよ」

「へー、ちょっと意外」

「え？ そうかな？」

「お姉ちゃんって、家事全般駄目で生活能力なくて困るキャラの方が似合う感じがするから」

「む……ソウジー！ ジルがこんなこと言う！」

「おいおいジルコニア、思ってることを何でも口にするなって言っただろ？ まったく、そういうところは子供なんだからよ（奏治）」

「ソウジお兄ちゃん？ 言っていることと悪いことが……」

「おい、逆ギレか？」

「うふふふふ……今日はサンバでも踊ってもらおうかな？」

「ジルちゃんやめなよ。ソウジが真っ青になってるよ」

「——おい、お前ら。足が遅れてるぞ。騒ぐな、きりきり歩け（盾）」

「「「はーい」」」

「ジュンってスパルタだよな。「教会」で鍛えられたからああなったのか？ 教会の奴ってみんなあんなのか？（奏治）」

「そうかな……？ 光樹とかはへらへらした性格だったけど。——」

ねえ、ジュン。教会ってどんなところなの？（神恵）

「教える必要があるのか？」

「教えて！ 教えておしえておしえて、ねえねえねえ、いいじゃない別に——」

「チツ……いいだろう。そろそろ休憩を取るところだったし、ついでに話してやる」

「まず、何が聞きたいんだ？」

「そもそも「教会」って何？ 何をするとところなの？」

「教会は宗教団体だ。崇める神はデミウルゴスと呼ばれる——（その名に讃えあれ）——しかし信徒はその名を口にするのではなく、普通は『主』や『神』という。神は唯一神で、全知全能だ。他の宗教と区別し、教会の宗教は『モナ・ラトレイ』と呼ばれることもある。単に一神教と呼ぶこともある。世界にあるほとんどの国はモナ・ラトレイを国教として、大きな街にはたいいてい教会がある。教会に属することで貧しい者は困窮した時に支援を受けることができ、街は教会騎士によって守護される。教会騎士は信仰を強くすることで神から力を得ることができる。

「教会に所属する者は、信徒と、儀式を行う神官と、戦闘を生業にする騎士とに分けられる。神官は厳格な戒律の中に生き、信者たちに神の教えを説くのが仕事だ。騎士は神官よりはゆるい戒律の中で、信者たちの生活を守り、一神教を脅かす勢力を排除するのが仕事だ。修道院は基本的に『ナグ・ハマディ』の内容には含まれていないが、一神教の中の少数派は修道院を作った。

「信徒は『モナ・ラトレイカ』と呼ばれる。戒律は細かく定められているが、それほど厳守することは求められていない。もちろん、守る戒律が多く、質が高いほど信徒としての格は上がる。神官ならほとんどすべての戒律を守っていることになる。騎士は実力を優先するから戒律を破っても罰せられることはないが、しかし信仰の篤

さ、忠義の深さから言って、戒律を守るとはすなわち騎士の力そのものだ。

「重要な聖典は一つ、『ナグ・ハマデイ』を理解し暗記することから信徒の道は始まる。司祭などの神官に認められれば正式に信徒となり、どこかの教会の名簿に記され所属することになる。世界には幾つかの言語が存在するが、『ナグ・ハマデイ』はフスハー語で記されている。フスハー語は知っているか？ フスハー語は『教会』にとっての聖地に近い北方では使われることも多い言葉だが、古い言葉で普通は使わない。多くの言語と異なり、文字は表音文字ではない、というよりは本来の読み方は失われて今の読み方は全く異なるものだとされている。『ナグ・ハマデイ』を破いたり、燃やしたり、そのほか損ねる行為は禁じられている。文章にアンダーラインを引いたりすることも禁止だ。またナグ・ハマデイを訳することも禁止され、訳されたものは神に仇なすものとして処分される。

「戒律のことを教えてやろうか？ まず、神を崇め、毎日祈りを捧げること。祈りには動作まで定められ、日に五回おこなうことが最も良いとされている。――俺はそこまでやっていないがな。――欲を慎み、他人を尊敬し、弱い者には力を貸してやること。人を殺めることは騎士以外には基本的に禁じられ、殺人罪は重く扱われる。詐称すれば声帯を切り取られ、盗みを働けば腕を落とされる。――ま、一般に罪惡とされていることはやらなければいいことだ。厳しいことを言及すれば、たとえば女とはよくよく距離をとることが求められたり、定期的に絶食をすることが求められる。食事は、騎士でなければ肉類は慎み、生の物は食べないこと。騎士も火で清められた食事をとることが求められる。女との関係は、人目のあるところでは男と女は口を利かず、触れあうこともせず、できれば道を並んで歩くことも禁じられる。女は髪を短くし、できれば布で覆うのが一番いい。それは妻であっても同じことだ。妻は一人である必要はなく、養えるのなら二人以上とすることは認められる。特に寡婦などを妾にすることは聖典にも記されている。子供を作るとは奨励

される。その子供を戦士として強く育てるのが神の思し召しとされている。

「『ナグ・ハマディ』の他にも、神官なら『トラー』、魔術師なら『ヘルメス』、騎士は『ピステイス』を読むことが進められる。それぞれの職業に必要な精神を作り上げるための内容になっている」

「まずはこんなところか。何か質問は———と言いたいところだが、そろそろ時間だ。休憩は終わりだ」

「あー、もっと聞きたかったなー（ジル）」

「そうかな……、私はたくさん聞きすぎて頭が痛くなってきたよ（神恵）」

「てか、話の切り方が一方的だよな。教会の奴はみんなああなのか？（奏治）」

「ソウジ、それ話が元に戻ってるよ（神恵）」

「だってよ、結局「教会」がどういうところか話してないじゃねえか」

「おい、いつまでぐだぐだ話しているんだ（盾）」

「おーお、かりかりしてるぜ。——もしかして、糖分が足りないじゃねえのか？ 教会騎士っていうのは菓子とか食わないみたいだしな」

「余計なお世話だ」

「——そうだ！ こんどジュンでも食べられるお菓子を作ってあげるよ。火を通したのなら、クリームなしのシフォンケーキとか、パイとか、スコーンとかが良いよね」

「うわー、おいしそー（奏治）」

「……誰がお前なんかを作ったものを食べるんだ」

「楽しみにしててねっ」

「するかよ」

チャット#2 (後書き)

よく考えたら、マニ教を元にすれば良かったです。

act3 「山間の村に無理やり宿泊

森を抜けたところで、山間の村を臨む場所に着いた。

季節は夏の盛りといったところだろうか。気温はそれほど高くなかったが、湿度は高めだった。木々は水気を孕んだ風の中で青々と茂り、草木の濃密な匂いの中で踊っていた。太陽は薄雲をかぶせて、ちよつと柔らかくなった日差しを投げかけていた。

「これは雨になるな……」

もっと強い日差しが似合いそうな、褐色の肌の青年が空を見て口を開いた。そこに並ぶ木々のように瘦躯で、背は高く、それよりさらに長い二メートルほどの短槍を手に使っていた。

青年——織深・奏治の言葉に、嘆くような答えがあった。

「雨いや……っ。屋根のあるところで休みたい」

それは雲雀が鳴くような美しい声。水気にむっとした空気の中で、透きとおった水晶硝子の風鈴の音のようにカラリと響く声。

だが、それに答える少年の声は、低く、重々しく、不機嫌だった。

「甘えるな。愚痴をこぼしている暇があったら少しでも先に進め」

「ジュン……、わかったよ」

七那瀬・神恵は落胆を隠さない声で答えた。しかし、音無・盾が意に介した様子はない。

これまではジュンとカミエ、二人だけの旅だった。そのあいだは、カミエが何を言っても、ジュンが切り捨てて、カミエが大人しく引き下がって何事もなくなるだけだった。——だが、今は旅の一行も二倍に増えた。

ソウジがまず抗議した。

「おいおい、本気かよ。雨になると面倒なんだぜ。荷物は濡れる、武器は拭かないといけない。お前の鎧だって錆びるぞ、っていうか、お前むれないのか？ それ。臭い男は嫌われるんだぞ」

「知ったことか。神の加護を頂いている（神よ、その恩寵に感謝い

たします)俺には、この身を守る鎧が蒸れることなんかない」

「本当か? カミエ?」

「え……、ちょっと、答えづらいかな」

「おいお前――! 女の子にこんな受け答えさせるなんてありかよ! ほら、あの村に行こうぜ」

「黙れ。却下だ。いちいち村が見えるたびに、雨が降るたびに足を止めていたら、いつまで経っても北に着かないだろう」

「ぶー」

しかしソウジは、交わした約束のために必要以上にジュンに逆らうわけにはいかない。

だが、旅の一行にはもう一人いる。吟遊詩人のジルコニア――大きな帽子をかぶった、見た目十二歳くらいの若い少女は、三人の会話を黙って聞いていたところで木の根に足を盗られ「うぎゃ」転んだ。

「おい、ジル、大丈夫か? む……服が汚れたな。早いところ拭かなければ汚れが落ちん」

ジルコニアを助け起こしたソウジは、所帯臭くそんなことを言っていた。

その若い少女は、青年の腕の中でふるふると震えていた。――憤りに。

「あー! もういや!」

突然さけんだジルコニア。

少女らしい甲高い声はソウジの鼓膜を強打し、彼は力なく地面に倒れ伏した。そんな彼を尻目に、ジルコニアは若い騎士に向かって拳を振り上げ訴えた。

「ジュンお兄ちゃん! あたしは宿屋に泊まりたい。雨の中の野宿なんて嫌!」

ジュンは、当然とりあわない。

「うるさい」

「もう何日、前の街から歩き続けてると思ってるの? お兄ちゃん

と会ってから、一回も屋根のある場所で寝てない。もうあたし我慢できない！」

「うるさい。だったら消えろ」

「お姉ちゃん、何か言ってるよ」「え、えっと……」

「この村では、ここが一番まともそうだな」

結局、三対一で押し切られたジュンは、村に入って宿を取る破目となった。

理不尽、まったく理不尽。こんなことになるなら始めからやはり同行を許すべきではなかった……ソウジもおとなしく引き下がると思えば、言葉巧みに説得してきたし……おまけにカミエの奴、すっかり調子に乗りやがって、自分の立場ってもんをわかってるのか……どいつもこいつも、俺が指揮を執ると認めたくせに我が儘言いやがって……誰も自分の立場が分かってないな……

胸の中は愚痴でいっぱい、しかし後悔先に立たずで、ジュンはいつもの三倍の仏頂面で宿に入った。

村は森と山に囲まれた場所らしく、どの建物も総じて木造だった。ただその木材の色は、普通の木目色より少し濃いカフェオレのような甘い色で、灰かに艶出しされた表面が美しかった。他では高級材として取り扱われる木材だった。

ジュンの選んだ宿屋は、村で一番の美しい外観を誇っていて、巧みな木像や家具などがインテリアに飾ってあった。内部は、灰かに白檀の匂いがした。

と、何故かソウジがもじもじし始めた。彼はジュンに小声で話し

かけてきた。

「なあ、もう少し安いところにならないのか」

ジュンはソウジが抱えた問題を一瞬で見破った。

「嫌だ。——これ以上、何一つお前達の要求を聞く気はないからな。貧乏人は馬小屋にでも泊まれ」

ソウジは声もない。

「ソウジお兄ちゃん……あたしここに泊まりたい……」

「俺達にその金はねえよ……」

貧乏宿なしさ……哀愁漂う声でソウジが言った。

カミエが気遣わしげにソウジと、ジュンを交互に見ていた。もちろん、ジュンは取り合わないが。

ジュンは褐色の肌をした二人を放置して、窓口に収まっている宿屋の主と向かい合った。

「あるじ、二人用の部屋一つだ」

「はいはい、毎度どうも。——二人って、もしかしてそこのお嬢さんど？」

「ああ……別に変なこととはしない。ベッドは二つで……」

一つ、ジュンは思いつきした。

ちようどその時に、後ろでこんな会話がされていた。

「あーあ、こればかりは仕方無いか……。あたしも貧乏は身に沁みてるしね」

「ジルちゃん……また明日だね」

「うん、まあ、ナナお姉ちゃんはジュンお兄ちゃんと仲良くしててよ。何か進展があったら教えてね。——でも、お姉ちゃんと一緒に部屋になれると思ってたのにな」

「えっ……あ、それも良いね」

「おい——」

「あ、何？」

ジュンが二人の会話に割り込んだ。

「カミエ、お前本当にジルコニアと同じ部屋になりたいか？」

「う、うん。それもいいかなって。……あ、でもでもジュンが嫌いになったわけじゃないよ」

台詞の後半を力を込めてカミエは言った。

ジュンはそれを聞き流しながら、エントランスの片隅で肩を落としているソウジを見やった。

「ソウジ、お前たちの分の宿代を払ってやる。そのかわり、お前は俺と同じ部屋だ」

「――！」

一同に驚愕が走った。

「や――やっぱり、私はジュンと同じ部屋にしたい」
すかさず、カミエが言った。

慌てた表情のカミエ。だが、ジュンは無表情に彼女の顔を見るだけだった。

「俺はそうしたくない。――いいか、これは命令だ。俺の言うことには逆らわないよな、カミエ？ それとも――ジルコニア、ソウジ、今からでも俺はこの村を出て先を目指してもいいんだが」

「ここに泊ってお姉ちゃんをお兄ちゃんから離すか、それとも雨になる空の下歩くか、どっちか選べってこと？」

太めの黒い眉を吊り上げ、ジルコニアが吐き捨てるように言った。

ジュンは何も言わない。――気まずい、とソウジは何も言えないままに思った。

カミエはどうしたらよいか分からず、旅の連れ合いをおろろと見渡した。そんな彼女を、さしものジルコニアも複雑な心持ちで見ている。

「――決めるのは、ジルコニアか、カミエか。それともソウジか？」
尊大な様子で若き教会騎士は言う。

しばしの沈黙の後、口を開いたのはジルコニア――いや、カミエだった。幼い吟遊詩人が何か言いだそうとした瞬間に、カミエがそ

の機先を制したのだった。——決定の責任を、自分で取ろうとするように。

「わかったよ、ジュン。私はジルちゃんと同じ部屋にするね。——二人とも、それでいいね」

「俺は構わない」——何でもないような様子を装って、ソウジが言った。

ジルコニアは不満なような、ためらうような様子だったが、

「うん」

ごめんね——ジルコニアは小声で言った。

部屋に通されたとき時刻はまだ十二時を回ったばかりだった。

宿屋の者に出させた軽食を部屋で摂り、そのままジュンは部屋にこもって一日聖書を読むことにした。

別の部屋に入れた女子二人のうち、ジルコニアはすでに一人で何処かへ出かけていた。——楽器の練習をずっと言っていた。——カミエを監視しているとジュンは言ったが、吟遊詩人であるジルコニアは離れた場所からでも特定の人間を観察することが可能。離れていても音が聴こえるからと、吟遊詩人たちが言う、そのことをジュンは承知していて好きにさせた。

だが、何故カミエを連れていかなかったのか——ジュンは少し疑問に思ったが、深くは考えなかった。

そのカミエといえば、まだ部屋にいるようだった。何をしているかは知らない。——どうでも良い。面倒を起こさなければ何をしようが知った事ではない。見張っていなくとも、別に逃げ出すわけで

はない。

三人目としてのソウジはといえば、昼餉を取った後すぐふらりとなくなり、帰ってきたのが今だった。

「……お前、これからずっとそうしているのか？」

部屋に入ってくるなり、ドアの縁にぎりぎり頭がつくほどの長身の男は言った。

「今までカミエがいて、落ち着くことができなかったからな。——で？ お前は何をしているんだ？」

「あ、ああ——宿屋の主人にちよつと稼げる日雇い仕事がないかって聞いてきたんだ。千輝ってこの家を改築する人間を探しているらしいから、俺はそこに行ってくる」

「そうか。じゃあさっさと行けよ」

新書サイズの聖書から眼を離さず、ジュンは言った。

ソウジは居心地悪そうに部屋を歩き回り、壁に立て掛けた槍をいじった。

「なあ、お前、冷たいよな」

「——何のことだ？」

「いや……何でもないわ。これからずっと部屋にいるのか？」

「そうだ」

「カミエと出かけたりしないのか？」

「わざわざそんなことをする必要があるのか？ 旅ならうんざりするほどできる。暇なら、お前があいつを連れ歩けば良いだろう」

ジュンは無感動に言う。

——先程、宿屋の主人と仕事の話をしたすぐあと、ソウジはカミエ達の部屋に行った。

ジルコニアが出かけたのはもちろん知っていた。誰もいない部屋で、カミエは部屋に飾られた花に水をやっていて。とても退屈そうに。——その光景は、一枚の絵のように完成された美しさがあった。

灰色の空が見える部屋に一人たたずむ彼女は、水に濡れて葉をさげた花だった。

ジュンのところに行かないのか、とソウジは尋ねた。

カミエは否定した。――なんだか、行きづらいから、と。

まるで飼い主から離されて木に結び付けられた仔猫のよう。相手にしないのに、ただ逃げ出さないように首に紐を付けられて。――その紐も、ジュンが作ったものではなく、彼女自身が作った『恋慕』という名の見えない紐だった。

ソウジは何も言えなかった。ただ、あいつの様子を教えてやるよ、と絞り出すように言った。

その瞬間、花を濡らしていた冷たい雫が落ちた。――カミエのタコイズの瞳に一瞬見えた、嬉しそうな輝きはまだソウジの網膜に焼き付いている。

「おう、カミエ。ちょっとくら出かけてくるぜ」

階段のところにカミエがいた。所在ないように――水面に儚く揺れる、可憐な花卉のように。

うん、とカミエは明るい声で肯いた。影は濃かった。

「……あいつは駄目だわ。全然ひとのことなんか相手にしてね」

「あ、ごめんね。――別に気にしてないよ。ジュンはいつもあんな感じだから」

「――、……………」

何か言おうと思ったが、何も思いつかなかった。

間を持たせることもできず、ソウジはカミエの隣をすり抜け階段を降りて行った。

「ジュン、私も散歩してくるね」

――元気そうだな。

部屋に顔を見せたカミエを見たジュンは、内心おもしろくないように思った。

「毎日飽きるほど歩いているのに、よく散歩なんて言葉が出るな」
何も言う必要はないのに、ジュンは会話をつづけていた。

言ってからそのことに気がつくが、カミエは普通に受け答える。
——いつものことだ。

「私、身体は丈夫だから。さっきから猫の声が聞こえるから、その子を探しに行くつもり。——ジュンは、剣の稽古とかしないの？」

「今はしない」

「そう、ジュンが稽古するなら、付き合ってみようかなと思ったのに」

「いままで、そんなことさせたことがあったか？」

「ううん、ないない。でも、思いついたから言ってみただけ。——じゃ、行ってくるね」

見送る言葉は。もちろんない。

だがソウジが出ていく時は聖書から眼を放さなかったジュンは、金の髪が揺れるカミエの背中はしっかり見ていた。

○

「ストレッチー！ スストレッチ！ ——どこ行っただの……？」

木立の中に声が響いていた。

幹の狭間に密にはえた藪を物ともせず、草刈り鎌を振るいながら少女が歩いている。丈夫そうな麻の生地ジャケットを着た、蒼い髪の十四歳くらいの女の子だった。

汗が流れる、薄い琥珀色の顔には焦りにも似た、心配そうな表情がある。藪を切り開く歩みは落ち着いたものだが、その内心はかな

り穏やかではないようだ。

と、近づいてくる足音があった。

スレッチ？　と少女は探している者のことを思う。――違うよね、とすぐに思った。スレッチの足音はこんなに大きくないし。

「誰？」

「よう、花憐ちゃん。何か探してるみたいだな」

現れたのは少年。それも一人ではなく――三人。少女よりも一回り年上で、山で鍛えられた引き締まった大きな身体で、威圧的に少女――カレンの前に立った。

何？　カレンは鎌を低く構えながら、威圧し返すように言った。

「あんた達と遊んでる暇はないんだけど？」

「それは見ればわかるな――」

少年たちが感じ悪く嗤った。

「猫探してるんだろ？　どこにいますか？」

「知らないわよ。――まさか、あんた達……？」

「察しがいいな、カレン。さて、どうする？」

ほのめかされた、彼女の猫――スレッチの誘拐。

一瞬、鎌で切りかかろうかと思い、彼女は思いとどまる。億したわけではない、ただその真偽を疑ってみた。

「――スレッチが、あんた達なんかによやすやすとつかまるはずがないわ」

「……………じゃ、爪でも引っこ抜いて来てみるか」

少年たちと、カレンは睨み合った。油断ない腹の探り合い。空気が張りつめたまま、硬直した。

ざわざわ……

森が静かになっていた。――鳥のさえずりも、虫の声も聞こえない。木々の葉だけが、不気味に、落ち着きなく、がさがたとざわめいていた。

不安——カレンの胸に忍びいる感覚。

だが、決してカレンは目の前の少年たちに億したわけではない。その証拠に、少年たちの方がより強い不安の表情を見せていた。——瞳を泳がせ、カレンに向ける集中が途切れ途切れになっているのが見てとれた。

——森を疎ませる得体の知れない気配、それが少年たちに向けられていることを、彼らは賢しくも感じ取っていた。

やがて、声が聞こえる。少女の綺麗な声。雲雀が鳴くように美しく、だが、どこか空恐ろしい声で、

「女の子をよってたかって虐めちゃだめだよ」

姿はない。——近寄ってきた気配もなかった。

少年たちと対峙しても怯えることのなかったカレンは、みぞおちの辺りが縮こまるような薄い怖れを感じていた。

少年の一人が絞り出すように声を発した。

「誰だ！ 姿を……見せやがれ……！」

「——ここだよ」

答えはすぐ返って、声の主が藪を鳴らすこともなく姿を現した。

現れた少女を見た時、カレンは素直に美しいと思った。——白炭のように白い肌に、木漏れ日よりも美しい金髪。ターコイズの瞳は、同じ色の自分の瞳がくすんだガラス玉のように思えるほど。

そして、恐ろしい、彼女のまとう気配が。森を沈黙させ、足元の藪が道を開けるほどに絶対的な威圧感を放ちながら、少女は微笑しつつカレンの前に立った。

「……お前、見ない顔だな」

かすかに震える声で、少年の一人が言った。

「うん、私、旅してるから。今日はここに泊るの」

「よそ者には用はねえ。——失せな」

「ううん、用がないのはあなた達の方。女の子を虐めちゃうような子は、さっさいいなくなりなさい」

その瞬間、風が騒いだ。——叫んだ。

『畏怖』が膨れ上がり、陽の光さえ翳った瞬間。

三人の少年のうち、一人が足の震えを隠しきれなくなった。また一人は、顔を真っ青にしていた。

それでも残りの一人は、声を励まして金髪の少女——カミエに抗った。

「なんだよ……てめえもガキのくせして……」

「——」

カミエの答えはない。

だが、彼女から放たれる威圧感は大きくなるばかりだった。少年たちはもう、気を失わんばかりに恐怖していた。

そう……恐怖。無抵抗な魂に刻みつけられるような恐怖に、少年たちはもはや強がることも、その逞しい腕に物を言わせることもできなくなっていた。——口を聞くことすら恐ろしいと思える、カミエの得体の知れない気配。

魂すら凍りつく静寂の後、やがて少年たちは声もなく立ち去った。彼らの姿がなくなった途端、カミエの気配が小さくなった。剣を鞘に戻したようだった。

「——ごめんね、少し怖がらせちゃったかな？」

カレンに振り返って見せたカミエの表情は、花も恥じらうような頬笑みだった。その笑顔に、さきほどもまでの恐怖の残影も生々しいまま、誘われる自分をカレンは感じていた。

——森に息吹が戻った。鳥が歌いだし、蝶々が花に誘われはじめた。

カレンは自分の唇が青白くなっていることを自覚しつつ、深呼吸して、冷静に答えた。

「ううん、私は別に……あいつら、追い払ってくれてありがとう」
その言葉に、カミエはさらににっこりと、蜜のように甘く、笑みを濃くした。

どき……カレンの胸が不自然に高鳴った。

「どういたしまして。でも、ちょっとやりすぎちゃったかな。——」

ま、それはいいとして、私、あなたに用があるの、――花憐^{カレン}」

教えていない自分の名を口にされ、カレンの表情が再び強張る。

「あ、ごめんごめん。別にカレンを驚かせたいわけじゃないんだけど、……猫さんが――マグ・スレッチさんがあなたを呼んでるから」

「――スレッチは何処にいるのっ？」

自分の探していた猫の名前が出た途端、カレンは委細構わず問いかけていた。

あっち、とカミエは指さす。

「紐が絡まっちゃって、身動きできなくなってるの。連れて来てあげてもよかったんだけど……私だと怖がらせちゃうかもしれないから」

そう言ったカミエは、少し寂しそうな表情だった。

決して自分の持つ迫力を誇っているわけではない――それを見てとった時、カレンは目の前の美少女に初めて親しみを持った。

「じゃあ、行こうか？」

a c t 3 「山間の村に無理やり宿泊（後書き）」

結構かったです。

—— する事に決めさせられた

森の中、光の降り注ぐ少しひらけた場所で、少女が二人、仲むつまじく向かい合って座り談笑していた。

木々の狭間から見える青空と同じ色のモブカットの少女と、幹に踊る木漏れ日の色のセミロングの少女。青い髪の少女は膝に灰色縞模様の猫を抱いていた。

「最近うちさ、リフォームしてて落ち着かないんだよね。私はまだ我慢できるんだけど、スレッチが嫌がって逃げ出しちゃうんだよね……」

「猫だから、別にお出かけしてもいいんじゃないの？」

「そうなんだけど、ほら、さっきの奴等がうるさいんだよね。——何が気に入らないんだか知らないけど、スレッチに悪戯されたら嫌だから、なるべく外に出て欲しくなくて。——でも、本当は紐なんか付けたくなかったよ」

「猫さんもあんまり好きじゃないみたいね。あたりまえだけど。——でも、花憐かれん、そんな顔することもないよ。スレッチさんもカレンの気持ちはよくわかってるみたいだから」

「そう……？ ——ところで、なんで神恵かみえはスレッチにさん付けするの？」

「ああ、うん、スレッチさんは結構大人みたいだから。ていうか、お婆ちゃん？ ちょっと頑固で気難しい感じ——私の好きな人とよく似てる」

『お婆ちゃん』——その言葉に反応して、スレッチが、みあお、と不機嫌に鳴いた。

カレンは青い瞳を丸くした。

「カミエって、不思議。さっきから思ってたけどさ、スレッチと話しできるの？」

問われ、カミエは少しだけ笑顔を苦くした。

つ、とすぼめられた桜色の唇に、カレンは眼を奪われてしまう。
——かわいい、と。

「……………」「あ、別に变とか、そう言う意味で言ったんじゃないから。だからさ、そんな顔しないでよ」

「——そんな顔しないで、か。さっき私も同じこと言った」

ぷ、と二人の少女が吹き出す。

さわさわと木々の葉が囁くなか、少女達は声を合わせて笑った。

「私、もうわかってると思うけど、ちょっと普通の人とは違うの」

「わかるわかる。——自分のことを人と違うって言うところからして、もう変人だよね」

「——もう！　どうしてそういうこと言うかなっ？」

カミエが白い頬を膨らませた。

その綿飴のような甘いふくれっ面。カレンが自分が思っていた以上に笑ってしまったのは、カミエの表情が持つ心を和ませる不思議な魅力のせいだったのだろう。

「もう……笑いすぎっ」

「ははは……ごめん。でも、別に良いんじゃないの？　猫と話できるなんてうらやましいし——スレッチを探してくれたのも、あなたのその、変わったところ、のおかげでしょ？　——だったら、私が嫌う必要もないわけじゃん」

その時、不意に日が翳った。

顔を俯かせて、カミエが言った。

「でも、それだけじゃないよ。さっきの男の子たちを追い払ったの、私の変なところ——私の怖い部分だよ」

カミエの言葉に、カレンはどきりとした。

先程の彼女の威圧感——それは忘れたくても忘れられるものではない。こうして親しく話して、彼女の愛らしい笑顔を見ていても、あの絶対的な威圧感は魂に刻みつけられたように拭いきれなかった。怖い——確かに、怖い。だが、

——ちちち……小鳥の声が聞こえた。

カレンはひきつりはじめた顔の力を抜いて、ゆっくりと微笑んだ。
「気にしないよ。——かっこいいじゃない……！」

台詞の後半で、とくに声を励まして彼女は言った。

——サア、と陰っていた陽が戻ってきた。

見開いたカミエの瞳は、雨あがりの極上の空のように澄んだ青だった。

「私もあれだけ、気配だけで人をびびらせることが良いのにな。あいつらさ、はじめて私と会った時も絡んで来てさ、おどかしてもいなくならなくて、面倒くさいからぶちのめしてやったんだよね。そしたら、もうずっと私に付きまとして来るんだよ。本当、どうにかならないかな」

「ぶちのめした？　ふ……ふふふ……あははは……、カレンもかっこいいね」

ためらいつつも、カミエは笑い始めた。

その笑顔に、不可思議なくらいの幸福感をカレンは感じた。——無条件に人を恐怖させることのできる彼女は、無条件に人を幸福にできるのだと、カレンは思い、そして彼女と声をあわせて笑った。そうして、ひとしきり笑った後、カミエは草を払いながら立ち上がった。

「——じゃ、そろそろ帰るね。今日はありがとう」

「もう行っちゃうの？　まだ昼は長いよ。——うちに来ない？　改築中で落ち着かないかもしれないけど」

「うーん、どうしようかな？」

——カミエが思うのは、ただ一人の少年。不機嫌で、不器用で、心優しい騎士。

「でも、少し一人にしてあげた方が良いのかな……？」

「え？　何か言った？」

「ううん、独り言。——じゃあ、もう少し遊んじゃおうかな？」

○

「はぁ……あいつ、いったい何だったんだ？」

先程、カレンに絡んでいた少年たちだ。

カミエの前から逃げ出し、その恐怖が抜けるまで彼らは森の中を宛てもなく走り回っていた。

彼らが走り、そして立ち止まった森の中は、まだ恐怖で薄暗くなっているような気がした。——迷っては、いなかった。山間の村の中で、とくに腕白な彼らは、その周囲の森のことも隅々まで知っていた。

「ちっ……あの女、次あったらただじゃおかねえ」

少年の一人が、すぐ近くに落ちていた丈夫そうな木の枝を拾いながら言った。

「でも、あいつ絶対やべえよ。——関わらない方が良い」

「そうだ。旅人だって言ってたし、放っておけばすぐいなくなるぜ」

「ふざけんなよ……舐められっぱなしで済ませるかよ。あの女も、カレンも、絶対俺達の前で這いつくばらせてやる」

ぐじぐじと少年たちは話しあった。

——がさ、と不意に藪が鳴った。

思わず身を竦ませる彼ら。だが、すぐにそれが何者かの接近を知らせるものであることを知る。

「——誰だ！」

その何者かは答えず、ただ黙したまま姿を現した。

肩に飾りのついた軍服の様な、窮屈そうなローアンバーの衣装に身を包んだ痩躯の男。年は二十代後半くらいでまだ若さが感じられるが、形の良い太めの眉は気難しそうな印象のあり、白い肌も神経質そうな感じをもっていた。髪の色は重々しい藍色。背にはなめし皮のマントをつけていた。手に持った銀色の杖は先端に、液体を入れられる様な小さなカップ状の蒼い宝石がついていた。

薄めた毒のような、異様な気配がした。――先程の女もやばかったが、こいつからもやばい気配がすると、少年たちは直観的に悟った。

だが、そこで下がる彼らではない。先刻カミエに追い払われた鬱憤をこの異様な男にぶつけるべく、彼らは喰ってかかった。

「なんだてめえ……！ 余所者が偉そうに突っ立ってんじゃねえよ！」

「そのへんな格好はあんだよ！」

「しゃーべーれーよ！ 口ねえのか！」

なまじっかカミエのような絶対的な威圧感がない故に、無知な少年たちの勢いは止まらない。今にも男に掴みかかりそうな気色だった。

だが、世の中には剥き出しの剃刀よりも危険なものがある。つまり、威圧感は凄まじいまでも、実際には手を出してこなかったカミエより、恐るべき人間はもちろんいるということ、少年たちはそれを知っておくべきだった――が、山間の村から出たことのない井の中の蛙がそのようなことを知る由もなかった。

「騒がしいぞ……駄犬が」

ばさばさ……鳥の羽ばたきが騒がしく森に響いた。

ぎり、と少年の一人が奥歯を食いしばる。眼は狂犬の如く紅くギラギラと光り、

唸り声をあげ、男に向かって突進した。

「……！」

男はマントを翻しながら少年の突進をかわした。だが、残りの二人も男に向かって殴りかかった。

男の薄い紺色の瞳が、鈍く輝いた。

「赤き水よ、その束縛から逃れるがいい」

その瞬間、赤い花が咲く。

森の閑けさが切り裂かれた。

赤い花が咲いたのは、少年たちの足の上。それは、血液——血飛沫という流体の華だった。

「少年よ、身の程を思い知れ。お前たちは所詮、この世界を構成する元素によってつくられている存在にしか過ぎない。時が来れば元素の結びつきは解け、死する運命。ならばその時まで、慎ましげに生きるのが良いとは思わないか？」

三人の少年がそれぞれ片脚を血で濡らし、悶えている光景を冷然と見おろしながらその男は言った。

「何か答えろ」

「……」

「おい……！」

「う、グウウウウ——」

獣のように呻いた一人の少年。血管の破裂した片足が急速に再生され、その感覚に悶えたのだった。

「さあ——」

「……なに、いつてんのか、わかんねえよ……」

「ふん……分からないか。——要するに、更生しろと言っているんだ。お前たちはそうやって少くない者達を困らせてきたのではないか？ これを機に、身の程をわきまえた生き方をしろと言っているんだ。——答えは？」

「……畜生……」

「私は寛大だ。だが、更生もできない駄犬を野放しにするほどではない。『悪に対して向けられる関大は、犯罪である』——聞き入れ

ぬのなら、その身を万物の源である水に還してやろう」

そして男は、低く、何事かを呟く。

少年たちの足が癒され、ほどなくして彼らは立ち上がる。――もはや、そこに凶暴な光はない。

かさかさと風が吹く中、弱弱い視線を向けてくる少年たちに男は言った。

去れ、と。

少年たちは静かに家路へとついた。彼らの背中が視界から消えるまで、男はそれを見送った。

そして、言った。

「しまった。道を聞けば良かった……あるいは、彼らについて行けば良かったか」

○

カレンの家は大きかった。周りの家に比べて抜きんでていた。材質は周囲と同じ木造だが、丸太をぜいたくに使った頑強な作りで、ドーム型の屋根はつやつやと輝いていた。――半分は。

屋根の半分は壊されて造りなおされている。その作業には四人の男達が取りついていて、

「あ、ソウジー！」

ねじり鉢巻きをつけた織深・奏治もそれに混ざっていた。

神恵が家のしたに駆けつけると、ソウジは二階分の高さがある屋根の上から軽快な動きで飛び降りた。

「よう、カミエ。どうしてここに？」

「ん？ 私はこの村の子――この家の子に遊んでて、招待されたの。ね、花憐」

「うん。――あ、こんにちは」

褐色の肌の長身の青年にカレンは頭をさげた。

「どうも。リフォームはもう少しで終わるらしいぜ。家の半分は使える。——あんたの親父さんはあそこにいるけど」

「知ってます。お父さんのことも。——カミエ、行こう」

「うん。ソウジ、あとでね」

家の中は、白檀にも似たしっとりした木の香りに満ちていた。改築のせいで、家の中はおが屑が空気に舞っている状態でもあったが、素敵な家、とカミエは言った。黒い木の家具はどれもデザインに優れていて可愛らしかった。リフォームしていれば散らかっていいようなもののな、家の中は埃っぽいだけで整理整頓はよくされていた。くつろげる雰囲気のカレンの家にはあった。

「私とお母さんがちゃんと片付けしてるから」

その言い方には棘があった。

そう言えばリフォームにしてもあまりいい感じには言わなかったし、さっき家の外を見ていた時も不機嫌そうな顔つきだった。——そんなことをカミエは振り返りつつ、訊ねてみた。

すると、カレンが答えるには、

「お父さんは見栄っ張りなんだよ。別にリフォームする必要なんてないのにさ、こんなうるさくしちゃって。——しかも、家族だってお祖母ちゃんとお祖父ちゃんがいるだけでそんなに多くないのに、こんな大きな家にしちゃって、恥ずかしいじゃないよ」

「ふーん。私はこの家好きだけどな。大きいのだって、悪くないと思うけど。ま、それはいいや。——お祖父ちゃんとお祖母ちゃんがいるの？ 他に家族は？」

「この家に住んでるのは、お父さんとお母さん、お父さんの方のお祖父ちゃんとお祖母ちゃん、それと私と弟。弟は……どっかで遊んでるんじゃないかな？ お母さんも家がうるさいからあんまりいな

いし。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんも出かけるか、部屋に立てこもってるか、どっちか」

「――家族、いっぱいいるんだね」

少ない方だ、とカレンは思う。村という人口の少ない集団では、家族が多く集まって暮らすのが普通で、働き手を増やすために子供は多いのも普通。だがカレンには弟が一人いるだけだし、母方の祖父母とは家を別にしている。

父親に抗議してリフォームの手から逃れた自分の部屋に、彼女はカミエを招いた。

部屋に入ったカミエは、遠慮しない様子できよろきよろと部屋の中を見回し、これかわいいー、とカレンがあまり気にいっていない木彫りの熊を取り上げ愛で始めた。

ドアを閉め、愛猫スレッチをベットのの上に降ろして、カレンはしばらく自分が連れてきた少女を冷静な目で観察した。――こうしていれば、ただ凄く可愛いだけの女の子なのに、と。だが、彼女の運命に落とされた影をカレンは感じ始めていた。

「あんたは？ 家族いないの？ ――ていうか、どうして旅してるの？」

「――聞きたい？」

そう問い返されたとき、カレンは聞いてはならないことなのだと薄く悟った。だが、ここで止めるのも不自然で、彼女にとっては慣れないことだった。

だから、聞いてしまう。

「でも、旅の理由は教えないよ。――聞いたら、ショックだと思うし。――家族はね、もともとお母さんしかいなくて、私が旅に出る前に死んじゃったよ。お母さんは優しく、頑張り屋さんだった。お父さんは頭のいい人だったって聞してるよ」

「そう………やっぱり、聞かない方が良かったね」

「気にしないで。――本当に聞かないほうがいいと思うことは話してないし」

そう言つて、カミエはにこりと笑う。

——急に、空が掻き曇つてきた。

空模様と同じくらい、読むことのできないカミエの表情。——カレンは途方に暮れ、何も言うことができなくなった。

「……ねえ、何かしない？ お話ししてもいいし——私、チェスとか好きだよ。お父さんが得意だったらしくって、お母さんに教えられたの。カレンのお父さんは細工とか好きそうだから、チェスの駒もあるんじゃないの？」

「あ……そうね。私はあまり強くないけど。——そういえば、まだお茶とかも出してなかったね。お菓子とかあった方が良さし、外歩いたからおやつも欲しいし。——ちよつと、台所行ってくる」

「あ、私も行ってもいいかな」

少女二人、連れ立って台所へ向かう。——部屋を出るときは、しつかりドアを閉めて猫は出さないようにした。

台所もまた素敵だと、カミエの目には映った。調理台は広く、調味料や器具のおかれる棚は大きくしつかりしている。竈も見た目が美しく、使いやすそうでもあった。

「カレンはお父さんのこと、あんまり好きじゃないのね」

「……カミエはお父さんがいないから、私のことが理解しづらいんだよね」

思わず、そんな卑屈な言葉が口をついた。

はつとしてカミエを見ると、しかし彼女は特に気にした様子もなくただ不思議そうにカレンのことを見ていた。

「分からなくはないよ。——多分。でもそれは別にして、せっかく家族がいるんだから、好きでいてあげなきゃ可哀そうだと私は思うな。——この家の家具も、この家自体も、とっても使う人のことを考えられて作られてる。作ったのはお父さんでしょ？ こういう物を作る人なら、きっと良い人なんだなあって私は思うんだけど」

「……カミエの言う通りだけど、お父さんは結局、自己満足にこう

いうものを作るのよ。お父さんの作った物が便利だって喜んでくれる人は結構いるけど、それと同じくらいで、お父さんの偉そうな態度が気に入らないって、お父さんと私たち家族を嫌う人がいる。――見てるようで、見てなくて、だから私は嫌。私達に気を使ってくれるなら、スレッチやお母さんが家から出ようとはしないでしょ」「不器用なんだね、お父さん。口や態度にすることができなくて、だから一生懸命ものを作るんだよ」

とても優しく、甘くカミエはほほえんでいた。まるで愛を説く伝道師のようで、カレンは胸の中に渦巻いていた濁った思いと共に言葉を失った。

片方が沈黙すると、もう一方も喋らなくなり、トントンと屋根を叩く作業の音と、お菓子を求めて自分たちが戸棚を漁る音しか聞こえなくなった。

空がいよいよ雲に覆われ、柔らかな薄闇が灯りをつけていない台所を包みこんだ。

湿っぽい空気が……とカレンは思う。――だが、心の中にある思いと向き合うには持って来いの雰囲気でもあった。

そうして、しばらく二人は黙々と戸棚を探していた。

「うーん……無いみたいだ」

少し長い時間のあと、カレンが静かに言った。

「そうなんだ。まあ、私は別に良いけどね」

「……………」

その時、ぐるううううう、と獣の唸り声のような音が聞こえた。といっても、敵の気配に敏感なカミエは、それが危険なものだとは感じない。ただ、何だろう、と首をひねるだけ。

そしてカレンはと言うと、恥ずかしげにお腹を抱えていた。

「――作ろうか？」

すべてを理解したカミエが言った。

「材料はあるみたいだし、竈やオーブンは使えそうだし、クッキーくらいならすぐできるよね」

「よし……乗った！ やろう！」

薄闇に包まれた台所に、少女二人の活気が放たれた。

「それでね、とりあえず作ってみたんだけど、微妙に炭になっちゃっておいしくなかったの。やっぱり人のオーブンだと使い勝手がわからないんだよね。はい、これ、一つだけあげる」

「お、サンキュ。——これは良く焼けているみたいだな」

「そりゃ、人にあげるのに真っ黒の奴とかは出さないよ。でも、黒くてもとりあえず小腹を満たすには十分だったよ」

「そろそっだぜ。食いものには違いないんだから」

宿の前のルーフで、カミエとソウジの二人が束の間の談笑をしていた。

ルーフの外は雨。降り始めた空の下、二人は揃って、須藤・花憐の家から宿まで走って帰ってきたのだった。

「楽しかったか？ ちらっとしか見てないけど、ずいぶん仲良くなっただみたいだな」

「うん。久しぶりに、まともに女の子と話したってかんじ。——いや、ジルちゃんと毎日話してるけどね」

「どんな話したんだ？ ——いや、別に良いか」

ソウジが思うのは、彼女が『黒き月の独り子』ということ。——自分たちの明るくも、暗い運命の旅のこと。だが自分が聞くべきことではないと思い、取り消そうとする。

しかしカミエはそれに答えた。

「別に、大した話はしてないよ。だって、話したってしょうがないことが、私には多すぎるし。——可哀そうじゃない？ 私だって、それくらいのはまだ持つてるから」

「……そうだな」

——その台詞が、一番聞きたくなかった。

ソウジは苦々しく思った。だがカミエは、気鬱な雨模様も吹き飛ばすような楽しげな笑いで彼の顔をみるだけだった。

「でも、私が普通じゃないってことぐらいは教えたよ。けどカレンは気にしないって言うてくれたんだ」

「そうか……！ よかったな」

本当に良かった。それは純粹に思った。

「明日も行くよな？」

「もちろん。約束しちゃったもん。——何するかは、秘密ね。ソウジには教えてもいいけど、ジュンに秘密だから」

「そうかい。じゃ、そろそろそのジュン君に会うか」

—— **する事に決めさせられた（後書き）**

バトルファンタジーのはずなのに戦闘が無い……

若き騎士が独り子を追って

——ていうことがあったんだよ、と吟遊詩人は夕餉の席で語った。周囲を山に囲まれた秘境らしいこの村だが、宿屋の食堂は旅の者達でよく賑わっていた。ジュン達四人が食事を取るのは、大きな一枚板のテーブルの上で、食器は黒い重みのある木の表面を透明な樹脂で固められたものだった。耳を澄ませば、各地から訪れた者達が話すものめずらしい話が聞こえてきて、おいしい山の幸とともどもジルコニアを大いに楽しませていた。

そうしてうきうきと上機嫌でジルコニアはジュンに、この日の昼間に『黒き月の独り子』とついでに自分の詩人守護者^{コード}が何をしていたかを報告した。ジュンはそれを、柔らかく焼かれた鹿肉を引き千切りながら、不機嫌な顔で聞いていた。

「へえ……ジルちゃんには何でもお見通しって感じだよね。全然、私達と一緒にいなくて、目に見える範囲にもいなかったのに」

ジルコニアが報告を終えると、まっさきにカミエが口を開いた。

彼女は茸のパスタが気に入ったらしく、熱心に皿をつついていた。

そうだな、と相槌を打つのはソウジ。大きな鹿肉の塊を細かく切りわけ、ジルコニアの前に出しながら自分も食べている。

「なんかこいつと付き合っているとよ、いつも見張られているようで気分が悪い——って！ 痛てえよ！ フォークで俺の手を刺すな！」

「あ、ごめん。なんか固い肉だと思ったんだよね」

「あーあ、ソウジ血が出てるよ。——女の子と話すときは気をつけないとね」

「冗談だったのによ……」

「——」

そのように、三人が楽しそうに食事するのを眼前に、ジュンだけが一人仏頂面でいた。

「それで？ 明日は出発できないんだな？」

人々の談笑が満たす空間で、低い声はつきりと言う。

顔をしかめて答えたのは、穴のあいた自分の手をいたわっていたソウジだった。

「ああ……すまないな。本当に。明日には終わるって言うからよ……」

「ふん。——こうなれば一日留まるのも、二日留まるのも変わらない。だがな、明日だけだからな。その次の日に何があるうと、俺はカミエだけ引っ張っていくからな。——おい、わかってるのかカミエ？」

「う、うん」

少しの間、周りの話に耳を傾けていたカミエが生返事した。

そんな彼女の様子に、騎士の少年の眉間に深いしわがよせられる。「お前、吟遊詩人の報告じゃこの村のやつと仲良くなったみたいだが、余計なことは話してないだろうな。——余計なことはしてないだろうな？　自分が何者なのか、自分がしでかしたことに責任が取れるのか、よく考えながら言動するんだな」

「わかってますよ、私のナイト様」

カミエの言い方に嫌味はなかった。それどころか、語尾にはハートマークがついていそうな感じだった。——向けられたジュンはそんなこと感じもしないが。

「私はジュンの恋人だもん。ジュンの言うことは何でも聞くよ。——ジュンが構ってくれるなら、別にあの子と遊んで暇つぶしすることも無いんだけど」

ジュンは何も答えない。

それでも嬉しそうに彼の顔を眺める金髪の少女。その心の中は、明日の計画で弾んでいる。——それは、決して自分だけが楽しむ計画ではない。

——ジルコニアはその計画を知っていたが、教えはしない。これは女の子同士の秘密というものだ。

そんな明るいカミエの横顔を、暗い表情で見る男がいた。——ソ

ウジが思うのは、昼間、出かける前に見た彼女のこと。恋人と思いを寄せる相手に全く相手にもされず、空しい心をひた隠しにして笑っていた彼女のことを。――今の彼女は本当に楽しそうだが、昼間とのギャップはどうなったのだろうか？

「――お兄ちゃん、余計なことで悩まないで。旋律が歪むわ」

「ジルコニア……」

少し真剣な面持ちで話しかけてきた、ソウジの同行者。

「あの二人を前に、できることは限られていることくらい、わかっているんでしょ？ 旅はこれからも長いのよ」

「ああ……すまないな、ジルコニア」

ぽん、とソウジはジルコニアの頭の上に手を置いた。食事を前にいつもの大きなつば付き帽を外した、黒い短髪の頭をぐりぐりと撫でた。

少し、少しだけ、うれしくジルコニアは思う。自分を守る大きな存在。いつも罵りながらも、あてにしている彼に撫でられることは、やはり幼いジルコニアの心を和ませた。

――ソウジが固い表情をしていると、ジルコニアは後ろめたい気持ちになる。

原因の一端は自分にあると、彼女は理解している。それでも吟遊詩人という生業のために、ソウジを巻き込み、そのために彼が苦しむ結果になろうと躊躇はしない。しかし、彼が心を悩ませているのなら、可能なケアするのもやぶさかではない。

そしてジルコニアは、まだジュンに話していない昼間の出来事を回想した。

○

陰鬱な足音の男――ジルコニアはその時思った。

男たちが山に働きに出て、静かになった村のとある場所で、ジル

コニアは輪琴を一人気ままに奏でていた。調律をしたり、あるいは遠くの音に耳をすませていたりしていた。

そこに現れた一人の男。特段人払いをしていたわけではないから誰かが来ても不思議ではないが、邪魔をされたジルコニアは少し機嫌を損ねた。――特に、その陰鬱な足音と、奇妙ないでたちにジルコニアはこの人物に悪い評価を押し付けた。

この場合、足音には性格が現れていた。ズル……ズル……と擦るような足音だった。

一見その服装は貴族のようなごてごてしたものだだったが、そのじつ服の布地は魔力を染み込ませた糸が使用されて、細かいところで妙な装飾が施されていた。魔術を使う者が着るような服だ。目に見えて奇妙なのが手に持った杖で、カップ型にカットされた宝石が先端についていた。

そして男は鼻から息を吸い口から出す呼吸を、極めて静かに、規則正しく行っていた。

要するに、その男は魔術師だった。

「もし、訊ねたいことがあるのだが、今いいだろうか？」

声は、ジルコニアが予想したとおり、低く抑揚がなかった。

ジルコニアは輪琴をかき鳴らす手を止めて、麦色の瞳で男をみる。年は二十八くらい――顔で判断した。若干老けている。――顔でなくとも、吟遊詩人は人間が身のうちから発する『音』によって年などすぐわかるのだが。

「何？ おじさん？」

おじさん、と呼ぶには微かな悪意に基づいて。

だが男の方はまったく意に介した様子はなかった。――つまり面白い、とジルコニアは思う。

「七那瀬・神恵という少女を知らないだろうか？ 年は十五くらい、背はそんなに高くなく、髪の色は茶色で瞳は藍色。しかし今は少し風貌が変わり、金髪碧眼の美しい顔立ちになっているらしいが」

もちろん、七那瀬・神恵は知っている。だが、ジルコニアの答え

は、

「さあ？」

「――教えてはくれないのか」

「探してあげることもできるけどね。――ほら、吟遊詩人は普通の人よりずっと広い範囲の音を、風に乗って遠くから運ばれてくる微かな音を拾うこともできるから探すのは簡単だけど――つまらないでしょ。答えがすぐ見つかったら、物語はすぐ終わっちゃうもん」

「――」

男は不機嫌に黙り込んだ。

さわさわ……不意に村を囲む森がさざめく音が聞こえた。

ジルコニアは男の藤色の瞳をじっと覗きこんだ。

「脅そうなんて、考えない方がいいよ。魔法使いさんは、吟遊詩人には勝ちづらいと思うから」

「……邪魔したな」

ずる……ずる……と足を擦るようにして男は去っていった。

その背中を見送りながら、ジルコニアはこの後に待つ物語の展開に期待していた。

○

翌朝、ソウジが窓から差し込む日差しで目覚めると、その窓の向こうの太陽に向かってジュンがのそのそと妙な動作を行っていた。

「――ぶふ！」

ソウジが発したのは、笑いと、驚きの入り混じった声。

分かっている――分かっている、ソウジは。ジュンは祈りの動作を行っているのだ。

ぴくり――ジュンの背中が微かに揺れたが、動作は止まらず、やがて祈りの声も聞こえた。

「――我はすべての創造主たる御一神のみ崇め奉ります。我は御身に仕える騎士。我が手は御身のための手で、この手の中にある剣は他の信者を護り、御身を侮る者に御身に代わって罰を与えるもの。――御身のみが神。アルコーンは御身の分身にして崇めるべき神に非ず――」

十分か、それ以上――ジュンは一心不乱に祈っていた。

「思ったより起きるのが早いな」

「日が昇ればここが宿屋でも起きるさ。野宿してた時もそうだろう。――邪魔したか？」

「……いや……」

寝起きのことで思わず笑ってしまったが、ソウジはジュンの信仰を否定して、一見奇妙に見える祈りの動作を馬鹿にしているわけではない。――そのことをジュンは理解し、少し態度をやわらかくした。

ジュンは無言でベッドの上に座りこみ、聖典を開いて読み始めた。沈黙が訪れる。ソウジは何もすることがないので、顔でも洗ってこようかな、とか考えて立ち上がる。そこで、ふと話しかけてみる気になった。

「熱心なんだな」

「教会に勤める者だからな」

ジュンは聖典から眼を離さずに答えた。

「信じてる、んだよね？」

「信じている、ではなく信仰している、だ。神は確かにそこにいる。俺たちが信仰心を寄せることで、確かに力を与えてくれる」

――神様はいるよ。

ソウジの脳裏に、少し前のジルコニアの声が蘇る。

――教会騎士の使う魔術は、パワーソースは術者自身でも森羅万象でもなく、それより高い次元から与えられるの。つまり、『天』

だよ。教会の崇めるデミウルゴスの力の権限は、光だったり太陽だったりするけど、それらに向かって騎士が祈ることです。本当に力が与えられる。だから、神の存在は疑いようもないわけ。

「——だけどよ、力をくれるばかりで、助けちゃくれないじゃないか。悲運とか、呪いとか、そんなものはなくならないじゃないか」

ソウジは回想の会話のままに、言葉を口にしていた。

聞いたジュンは、聖典から眼を離し不機嫌そうな顔でソウジを見た。

「それは神に呪われているからだ。神は戦いを好み、御自らが敵とみなした相手には容赦なされない」

「なんだよ、その呪われているっていうのは。カミエも、そういうふうに呪われているって言うのか？ 何したって言うんだよ？」

七那瀬・神恵の名が出て、ジュンは顔を顰めた。

「その話か。——神の意志は奥深い。俺たちが『黒き月の独り子』について、その正体について何も知らないように、独り子にも隠された意味があるんだろう」

「だったら、それはなんなのか教えてくれよ！」

理不尽——その言葉の前に、ソウジの気持ちが高ぶっていた。

ジュンは極めて冷静な眼差しでソウジを観察する。

しばらく、二人が睨み合う時が続いた。

おもむろにジュンが立ち上がった。

「表に出ろ」

「……は？」

「聞こえなかったのか？ 表に出ろって言ってるんだ。戦える服装にして、先に外に出てろ。槍はいらんぞ」

朝はまだ早く、西の空はほんのりと赤かった。雲は薄い青——東

雲だった。

ちゅん、ちゅん、……鳥がおはようを言い交しているのかな、とかソウジは考える。朝露に濡れた木々の葉は、欠伸の涙を流しているようだった。

そんなまどろみの世界に、鉄のブーツの重い足音が響く。ザ、ザ、と難しい顔で歩みよって来る少年の手には、二本の木の棒が握られていた。

一本がソウジに渡される。

「型稽古はできないだろうから——乱取りだ。好きなように打ち込んできてくれ」

「——稽古？」

「そうだ。今日も歩かない以上、身体を怠けさせないように稽古する必要があるだろう」

——喧嘩するんじゃないかったのか。

そんなことを考えていたソウジ。

対するジュンは、ソウジが何を考えていようとおかまいなしという様子。ソウジと静かに距離を取り、邪念のない気持ちで棒を構えた。

宿屋の主人から借りてきた棒は、二本とも一メートル強の同じ長さ。ちょうど、ジュンが普段使う片手剣と同じくらいの長さだった。直径七十ミリメートルくらいで握り易い棒は、まっすぐで、断面はほぼ円形。鉄の剣に比べれば当然軽いが、手の中でほどほどの重さを持って収まっていた。

ジュンは棒をあくまで剣のように正眼に構えた。左手は小指を棒の縁に軽くかけ、まっすぐ伸ばした右手で角度を調整する。足は前後に軽く開いて、腰を軽く落とした剣道の見本のような構え方。片手剣を使う彼だったが、そうして両手で構えている方が様になっていた。

一方、ソウジは槍よりもずいぶん短い棒をどう構えようか色々持ち直した末に、左手で端の近くを持ち、右手で棒の中ほどを握り、

身体に対してやや斜めに構えた。足はジュンよりも広く前後に開き、どっしりと腰を落とす。

——棒術か。

ジュンは見極めた。ソウジは突きを主体とする槍術を短い棒では使わずに、突くも払うも自在な棒術の構えをとっていた。

「来い——」

ジュンは相手を誘う。

素直に答え、ソウジは強く踏み込み、飛びだした。

竜のような、猛々しい突進。

ソウジの初撃は大上段、ジュンの遥か頭上からの振り下ろし。

稲妻のような一撃を、ジュンは両手で構えた棒で受け止めた。

腕力は互角。一瞬二人は鏝ぜりあいし、ソウジが棒を離れた。

だがジュンが攻撃する機会はない。続けざまに、雷のような激しいソウジの連続攻撃が降り注いだ。

三撃まで受け止め、ジュンはソウジの下から逃げた。

右に踏み込み、すれ違いざまの一閃。ソウジが攻撃を外した瞬間を逃さなかった。

しかしソウジは隙を作ってはいなかった。左手を棒から離し、すばやく引いた右手で棒を回転させジュンの攻撃を弾き返した。

ザー——

対戦の緊迫感に、音の消えた世界にジュンが地面をする音が大きく響いた。

「いいな。お前、やっぱり強いな。これほど楽しいのは久しぶりだぜ」

「……」

棒をジュンにつきだすように構えるソウジ。

強い、ジュンは素直に思う。ソウジは魔術を使えないから実戦では自分の方が上だという自信はあるが、純粹に武術においてはソウジの方が一日の長があるのも事実だった。

——ならば、勝負は一撃。

あくまで訓練だが負ける気はない。ジュンは低く構えた。

「——せ！」

小さく息を吐いて、ジュンは電光石火でソウジに肉薄する。

鋭い横薙ぎに迎えられる。しかし、身長差を逆手に取った地面に擦りつけるような屈みこみでそれをかわし、ジュンはソウジの懷に潜り込んだ。

ソウジのあごの下から跳ね上げる、満月のような軌跡。

だが、驚愕するのはジュンの方だった。

ソウジは攻撃を見ることはできなかった。顎を引き、下を見た瞬間には攻撃に当たるからだった。

ソウジはあごを上げ、攻撃を目視することなく、柳のように身体をしなせ切り上げをかわした。

そして、カウンター。渾身の力を込めた、袈裟切りの一撃。

回避は不可能。

ジュンは全力で受け止めた。

骨が軋むようだった。肉体は強固に作られたジュンだからこれくらいは平気だったが、

——ギシ！

「——っと！」

ソウジは反射的に棒から手を離した。

ジュンも手を降ろす。その手の中の棒は、右手で握った先から折れ曲がっていた。——ソウジの攻撃に負けたのは、ジュンではなく、

ジュンの武器だった。

「手、大丈夫か？ 傷めたりしていないか？」

問いかけるソウジの声は、本当に気遣わしげだった。

しかし、ジュンにはこりともせず答える。

「問題ない。――訓練は終わりだ。付き合ってくれたことに感謝する」

地面に打ち捨てられた二本の棒を拾い上げると、ジュンは立ち去ろうとした。

何も考えていない、何の感動もないその動作。

思わず、ソウジは問いかけた。

「――何考えているんだ？」

「？」

脈絡のない問いかけに、ジュンは思わず足を止めソウジを振り返った。

自分より若い者を見つめる、明るいオリーブ色の双眸には強い光が宿っている。ジルコニアと似た色の瞳。ソウジが何か強い思いを抱いているというのは感じつつ、ジュンは微動だにせずに視線を受け止め続けた。

「お前って、何考えてるか全然わかんねえな。――別に分かってほしくないってか？ ああ、俺だって無理して分かってるなんて思っちゃいない。お前を問い詰めて聞きだそうって考えてるわけでもない。そうしたい気持ちだってあるけどな。――けどよ、一つだけ思うんだよ。もう少しカミエに優しくしたって良いじゃねえか。ていうか、どうでも良いみたいに言うなよ。本当は自分の目にはいるもの全部護りたいって顔して、なのに無感動な面しやがって。――気に入らない」

「――話はそれだけか？」

切って捨てるような口調。

熾火のような光の宿った暗い瞳。ソウジは少したじろいだが、あえて強い口調で返す。

「それだけだよ」

「なら、一つだけ俺から言っておく。――二度と同じ話はするな。くだらない繰り言を何度も聞かすなよ」

あくまでも石のような声で言い捨て、踵を返しジュンは立ち去った。

朝食を終えると、ジュンはまた部屋に引きこもって聖典を読み始め、それ以外の三人はそれぞれ好き勝手に出て行った。

「ねえ、ジルちゃん。ジルちゃんも一人で練習なんかしてないで、私達と一緒にお菓子作ったりしない？」

「あー、うん……でも、あたしあんまり人と遊ぶの苦手だから。それに、吟遊詩人として世界の音を観察するのも大事だから」

「世界の音を観察？」

「そう。別に楽器の練習だけしてるわけじゃなくて、静かな場所で耳を澄ませて、遠く、遠くの音、そして今じゃない昔や未来の音にも耳を澄ませているの。他にも色々」

「へー。そっか、じゃあ頑張ってるね。あとでおいしいお菓子あげるから」

「うん！　楽しみー」

「おー、カミエ。一緒に行くか？　須藤の家に行くんだろ？」

「あ……ううん、ちょっと違うところ寄っていくから。少し遅く来てって言われたの」

「そうか。じゃあな、二人とも。ジルコニア、変なことして人様を困らせるなよ」

「お兄ちゃん。あたしをどういう目で見ているわけ？」

「おっと。さっさと行くか？」

「こらー」

賑やかな連中だ。ジュンは旅の同行者たちの会話を耳に思う。別にいらいらしているわけでもなく、静かに。

——無関心なのだろうか？

さきほどソウジに言われたことを思い返した。

感情の起伏をできるだけ見せないようにしているジュン。だが、それは無関心というのだろうか？

カミエと部屋を別々にしたことは、男女の部屋を分けることからすれば当然だった。これまでは経費の問題と、彼女を監視する目的で同じ部屋にしていただけで、人数が四人に増えればその問題は解決される。だから、カミエを別の部屋にしたのはジュンにとっては当然。それ以上の感情的な理由は含まれていない。あとは、三人がそれぞれ騒いだけ。

全面的に拒絶しているわけではない。

大罪人としてのカミエを疎むのは確かで、彼女を恋人として受け入れることはできないのも確か。だが、道連れとして、個人としての七那瀬・神恵をジュンはそれらの彼女と区別して、嫌ってはいない。——撥ね退けることのできない不思議な魅力を彼女が持っていることは真実だと、認めざるえないからだ。

——何を考えているのだろうか。

そんな思考に耽っていたら、聖典をめくる手が止まっていることに気づいた。——あいつらのために、思考を割いてしまうなんて。

無関心？ それも結構。俺は教会騎士として多くのものを護ることができるならそれでいい。少数より、多数。だからこそカミエを犠牲にすることにためらいはない。

だが、一言くらいは言ってやるか。

思考がそこまで回ったところで、コンコンコンとドアがノックさ

れた。

「お客様、ベッドメイキングさせていただきます」

「――」

どうやら、部屋に籠ることはできないようだ。

少し待て、と告げるとジュンは身支度を整えた。腰に鋼のベルトを巻き、皮の胴巻きをつけ、鉄の甲冑とブーツを身につけた。マントを肩に羽織り、剣と楯を腰に帯びてから部屋を出た。

――カミエでも捜しに行くか。

今思いついたことを伝えに行くために。

今日は曇り空だった。昨日は少し雨が降ったが、今日は降るのかどうかわからない空模様。ジュンには判断がつかない。ジュンはあまり景色を見て感動する性格ではないから。――教会の宗教芸術にも疎く、某友人には朴念仁と言われた。どうでもいいことだが。

淡泊な気持ちで周囲を見渡しつつ、カミエのことを考える。

――村娘と仲良くなったのだったか。

話はちゃんと聞いていた。どうでも良いことと聞き流してはいなかった。

しかし場所がわからない。この村では有名な人間らしいが、と、そこまで思いついたところで背後から声がかかった。

「もし、騎士殿」

「――何用だ？」

背後に立っていたのは、樵姿の長身の男。ソウジと同じくらい。

――どいつも背が高いな、とかまだ伸び盛りのジュンはちらりと思ってしまう。

年は二十代の後半くらいで、背筋こそやや曲がっているが、顔立ちや髪形が妙に整った感じがあった。

微かな違和感だ。しかし、それに対する答えを得られなかったのでジュンは気にしないことにした。

「あの……私の顔に何かついていますか？」

声は嘘偽りなくおどおどした感じだった。

「何もついていないな。それで、何の用だ？」

「森の方で、昨日から妖しい影があるのです。人間のような——魔獣のような——なんだか不吉なので、騎士殿に見てもらいたいのですが」

——カミエは後回しか。

騎士として人々の暮らしを守るのは当然の行い。カミエを後回しにするのは微かに残念だったが、頼まれごとを面倒とは思わずにジュンは男について行った。

鬱蒼とした森が見えてきた。深く清い森の空気が流れてくるが——ジュンは魔獣の気配に意識を凝らすだけで、森林浴など考えもしない。

「騎士殿はお若いですね」

ここまでずっと黙っていた男が、ふいに口を開いた。

ジュンは生返事で返した。

「騎士になられてからは長いのですか？」

「ああ」

「どちらの教会からおいになったのですか？」

「南だな」

「この村に教会がないのは残念です」

「そうか」

「剣は使えないんでしょう？」

「ああ——？ 何言っているんだ？」

——日が翳った。

薄闇に包まれたような世界。だが、目の前の男の顔が見えないの

は不自然だ。

「雨が降りそうですね。——いや、降りますね。特に時を計ったわけではないのですが」

「そうだな。それより……」

「剣は使えないのでしょうか？」

「そんなわけ——」

ポツリ、雨粒が一つ落ちた。

ポツリ、ポツリ——

ピシ！

何か小さな物が、ジュンの頬を掠めて行った。

「——お前、何者だ」

「分かりませんか？ 洗い清める雨のおかげで、変装は解けるはずだが」

ジュンは目の前の男を睨みつける——が、その前に何か小さい物があられのように弾けてジュンの視界を遮った。

——雨粒か。

空から降ってくる雨粒が、地面には落ちずにジュンを狙っていた。魔力を断ち切ろうとしてジュンは剣を抜こうとした。しかし、柄に手をかけたところで動作が止まった。

抜き方が分からなかった。

否、剣を抜くことは馬鹿でもできるが、いわゆる抜き打ち——抜刀時の鞘滑りを利用した高速の剣筋をつくりだす、その技が分からなくなっていた。

身体に刻みこんだはずの剣技が、ジュンの身体を動かす気配がなかった。

「——魔術師の言葉に応えてはいけない」

「そうだ。やっと気が付いたか、未熟な教会騎士め」

雨粒の弾幕が激しさを増してきた。しかし、まだ威力は軽くされ

ていた。

ジュンは腰につけていた楯を左手に固定し、それで防御力の低い顔をかばいながら男に突進した。

「む……」

男は霞のような動きで回避する。

「待て！」

「面白い。さすがは戦いを前に放棄することを知らない一神教信徒モナ・ラトレイカらしいな」

男は森の中に後退していく。ジュンを誘うように。

ジュンはその狙いが分からない。だが、信じる宗教の教えに従い、蛮勇さをもって男を追う森に飛び込んだ。

—— 若き騎士が独り子を追って（後書き）

せっかく四つに分断したのに、結局八千字オーバーです。すみませ
ん。

○

ジュンが謎の魔術師と戦闘を始めたころ、カミエはようやく須藤・花憐の家を訪ねていた。

須藤の家はリフォームの仕上げとばかりに、七人くらいの男たちが資材を運び入れたり出したり、ドンドンと音を立てながら熱心に働いていた。どうやら、どの男たちもこの大仰な外装の家を改築することを楽しんでいるようだった。

その男たちに会釈しながら、カミエは家のドアを叩く。すぐにカレンは顔を見せる。毛織物のチェックのエプロンをつけていて、可愛いなとカミエは思った。

ドアの中に入ると、外で活動している男たちの他に、中から何人かの人の気配をカミエは感じ取った。カレンは言葉少なく、何か秘め事しているような頬笑みでカミエを引率して家の奥まで誘う。危険である感じはないので、カミエは予測できない事態にわくわくしながら、自分より少し高いカレンの背を追った。

「来た来た。——うわ、可愛い！」

「ホント、何これー！」

「かわいすぎだよ、カレン」

「まさか、ここまでだったとはね」

「村の外の女の子はみんなこうなのかな？」

「そうかな？ ……いや、そうかも。うわあ、どうしよう？」

花が咲き乱れていた。

「な、何かな、これは？」

「ああ、せっかくだから他の友達も呼ぼうって思ってた。カミエ、嫌だった？」

「う、ううん。別に……。でも、このテンションは？」

「カミエが来る前に、準備しながら神恵って女の子がどんなに可愛いか話してたの。そしたらみんな盛り上がってくれたの」

カレンは悪戯っぽく笑う。

カミエに言葉はなかった。自分を囲む高いテンション、久しく見ることのなかった年の近い女の子と共にいる光景。カミエは弱々しく笑うだけだった。

「あ、カミエちゃんが困ってるよ」

「みんな騒ぎすぎかな？ ほら、ミク、飛びかかろうとしない」

「でも困ってる顔もかわいい」

カミエの様子を見て女の子達のテンションが少し下がった。

及び腰になって場合じゃないか、とカミエは自分を奮い起した。

「あー、気にしないで。私は大丈夫。――みんなに会えてうれしいな」

「うわ、そんなこと言われたら鼻血出そう」

「えっと、まずはお話しするのかな？」

「まずはお菓子を作らなきゃ」

「本当、何も食べるものないんだもの」

「何作る？」

「あたしオレンジのタルトが好きー」

少女達の時間は過ぎていくのだった。

○

野外では雨がしとしと降っていた。

敵は魔術師――属性は水、形式は言霊、ジュンは木の陰に隠れな

がら分析する。

雨が降ること自体は向こうの有利に働くはずだが、幸か不幸か雨脚が弱いせいで森の中はあまり降ってこない。もつとも、敵は雨天を作戦には組み込んでいないようで、ときどき挑発に雨粒を飛ばしてくるようだった。特に索敵に優れているわけではないようで、静かに木々の影に隠れれば敵はこちらを見つけない。だがこの森の中も決して良い戦場ではなかった。諸所に魔術的なトラップが仕掛けられており、注意しなければひやりとさせられることもあった。

戦況は膠着状態。

だがペースを握っているのは敵の魔術師の方で、彼が本気になればいつ炙りだされてもおかしくない状態。

「剣が使えないのがこれだけ不便だとはな……」

さきほどの会話に織り込まれていた言葉——『剣は使えないんでしょう？』——それは暗示のようなもので、無意識の領域に打ち込まれた言葉の楔が、剣技を使う心と体の接続が狂わした。ジュンは剣技だけではなく、格闘術、それに魔術も使えるが、これだけでは本職の魔術師の相手にはならない。

だが、逃げることはありえない。

ジュンは聖符を一枚手に取る。羊皮紙製の札には、炎に囲まれた一冊の本が描かれている。聖人達の物語を記し、悪しき物どもを炎で排斥する術式を編み出した聖女ヴァルプルガの力を借りるための聖符だ。

『神と聖人達の名のもとに盛る炎のなかに、異教の魔術は無力なり』

ゴォ！——

雨雲に翳っていた森の中を、真紅の炎が赤く照らし出した。広く放たれた魔術の炎は木々を焦がし、やがて着火する。

「神の名のもとなら、どんな行いでも許されると思っているのか――」

炎に包まれた魔術師が言った。暗い声で、憤るように。

魔術師は霧のようなもので身を包んで、炎に焼かれることはない。「失せるがいい、神を畏れぬ者め。教会騎士の我がお前を裁く！」

魔術師の背後から飛びかかるジュンの手には、金色の炎をともした新たな聖符が握られていた。

『聖ウインケンティウスが受けし受難、その身に刻み罪を購うがい！』

聖符を魔術師の眉間に向けて突きだす。

振り返るのが精いっぱい。敵は身動きできない。だが、口は動く。燃え盛る聖符を眼と鼻の先につきつけられながら、男は杖を僅かに動かしながら唱えた。

「火は凝縮して空気に空気が凝縮して土に土は凝縮して水に。そして万物のアルケーは我が手にあり」

その瞬間、周囲を包んでいた炎が消える。

代わりに出現する水滴。無数の針となりジュンの身体を四方から貫く。

「――く！」

防具で勢いを殺されるので、内臓までは届かない。

しかし、皮膚の内側にもぐりこんだ水滴が、抉るような痛覚を刺激した。

とっさにジュンは、まだ残っていた藪の炎の中に飛び込んだ。――聖なる炎の属性で、水の魔術が無効化される。

気がついた時には、手にしていた聖符は集中的にボロボロにされて使えなくなっていた。

水の弾幕を避けながら、ジュンは再び身を隠した。

――遊ばれているな。

不愉快だった。敵は全力でかかれればジュンを確実に潰せるだけ有利で、しかし何故かそうはしない。

（困っているみたいね、ジュン）

不意に、耳に声が届けられた。

空耳ではない。遠方からジュンの耳元の周囲の空気だけを振動させている音声だ。

カミエか、と即座に思う。だが、少し考えてその声の主が吟遊詩人——ジルコニアだと気付いた。

（答えなくていいわ。——今から私が、一方的に助けるから）
仕事口調でジルコニアは言った。

「ふ」ざけるな、と思わず言いかける。しかし声を出したら見つかるかと思っておして、ジュンは黙って声を待った。

（ジュンの様子からして、使えそうな聖符はあと一枚かそこら。だから、一撃で決めるわ。ジュンの得意技ね。相手の攻撃を外させるから、そこで決めて）

その時、ピーン……と甲高い音が響いた。

ジルコニアが響かせた音。敵がとっさに周囲を警戒したのがわかった。

もう一度、響く。

魔術師が動揺し始めた。危険がないと感じ、それゆえに訝しんでいる。

（さ、今よ）

ジュンは静かに茂みから姿を現した。

取り出した聖符は一頭の獅子と一匹の狼が描かれたもの。

『エウスタキウスを試しし、げに恐ろしき我らが神の試練よ。喰らう獅子、攫う狼の頭現を前に、異教徒よ煉獄へと落ちよ』

「――大地よ、すべて水に帰れ！」

バカ！ と魔術師の足元から地面が割れ、水が噴き出し始めた。割れた地面は深そうだった。落ちれば帰ってこれなさそうだ。

――これが切り札か？

即席で発動するレベルの魔術ではない。魔術師はやはり一撃必殺の魔術陣を用意していたのだ。

しかし、ジュン恐れずに右手に炎が象った狼の牙を纏い突進した。

「――！？ 私の魔術に干渉が！」

地割れが唐突に終わった。魔術師の意志に関係なく。

割れた地面の縁を蹴り、ジュンは狼のごとく跳躍した。

――取った。ジュンは勝利を確信する。

だが、魔術師の顔は驚くほどに冷静。杖で身体をかばおうともしない。

静かに、彼は唱えた。

『言葉で術式を刻む聖符よ、言葉^{ロゴス}を使う我に刃向うなかれ』

パン！

聖符が破裂した。

右手に小さくない衝撃とダメージを負うジュン。空中でバランスが崩れたが、何とか魔術師が立つ足元と同じ場所に片足をつけ、すぐさま横に跳躍して安全な位置に下がった。

魔術師も顔に少々ダメージを負ったようだった。しかし期待されたものより全く小さかった。

「剣が使えなくともなかなか戦えるようだな」

額から血を流しながら、魔術師が言った。

「さすがは『黒き月の独り子』として覚醒した彼女を抑えつけただけある」

「――何者だ、貴様。何が目的だ」

ジュンはいつでも飛びかかれる姿勢で男と対峙する。

そんな彼を見下ろしながら、彼は余裕の態度で答えた。

「若さに関わらない、類い稀な強さを持つお前を讃えて教えてやろう。――私は藤磐・希夾。表舞台に立たずひっそりと研究を続ける魔術師の家系の者だ。私は七那瀬・神恵を貴様の手から奪いに来たのだ」

一瞬、ジュンの思考が停止した。

――カミエを？ つれていく？

「私は幼い時の彼女を知っているのだ。無垢なる彼女を、大切に见守ってきた。思いを寄せてきたのだ。悲運の下に生まれてしまった彼女だが、私なら、藤磐の家系に伝わってきた魔術なら彼女を護ることができる。故に、私はお前を倒し彼女を手に入れるのだ」

なんの喜劇だよ。

二十代も後半、もしくはそれ以上の渋面の魔術師は真面目な顔でそんなことを言う。ジュンは眩暈を覚えた。

「お前、口調と面構えと言ってることがあってないから」

「ふん……何とでも言うが良い。だが、彼女はもらっていくぞ」

「それはさせられない。――っ、何だ、この！」

霧が吹き出し、厚い煙幕に覆われた。

完全に視界が利かなくなるまで、わずか二秒。濃厚な水の気配に、意識さえ朦朧としてきた。

「ゴホ……逃げられたか……」

（ジュン、あとは任せて。ジュンは姿勢を低くしてゆっくり山を降りて）

「任せられるかよ。カミエは、俺が連れていくんだ」

（素敵ね。でも、無理は駄目だわ。どうせ剣が使えない以上、ジュンは戦えないでしょ）

声が途絶えた。

濃厚な霧を吸い込まないようにマントを口に当てながら、ジュン

はそろそろと山を下るしかなかった。

その心は、怒りや不安、あらゆる熱情で燃え盛っていた。

○

「七那瀬さんの髪、私好きだな」

漆の髪の少女が、まるで女神を見るようにして言った。

「綺麗に整ってるし。旅しててこんなに整えるなんて、大変じゃないの？」

——整えることはあまりないんだけどな。

黒髪の少女に髪を一ふさ持たせたまま、カミエは密かに思った。

だが、不用意な発言は女子同士の関係に亀裂を入れる。カミエは照れたような、曖昧な笑顔で応えた。

「あたし、子供のころは金髪だったんだよ？　ねえ、スマレ」

「そ、そうね。ス、スマレ、いつの間にか紅い髪になってたよね」
子供のころか、とカミエは遠く思う。

「私、子供のころは茶色い髪だったよ」

「えー？　じゃあ、何かしたの？　どうやったらそんな、お日様みたいな金髪になるわけ？」

問いかけてくる少女の様子は、若干尋問めいている。

余計なこと言ったかも、と思いつつもカミエは話してしまう。

「ううん、特に何も。気がついたら。——あ、でも、お母さんが効き目のあるシャンプーを選んでいたみたいなの」

「シャンプー……そうね、そう言う話は聞くけど、本当なの？　どんなの？」

「し、知らない。……ごめんね」

謝る時は、少しだけ品をつくってみた。

効果は絶大だった。ほんの少しとげが生え始めていた空気が、あつという間にやわらかくなった。

——ずるい、よね。

いつもは、『黒き月の独り子』として持つ超人的な能力に悩むことはない。だが無垢な少女達に相對していると、自分という存在の特異さに初めて絶望感を持つこともある。

「でも、私胸ないでしょ？　それが悩みなんだけど……」

そう言った途端、場の空気が弾けた。

「あはははは、そんな顔で言わないでよ神恵さん。それだけ可愛ければ、ちよつと胸が小さいくらい良いじゃない。大きいと大変なんじゃないの、ねえキミコ？」

呼びかけられたのは、あまり話していなかった弱気そうな子。びくりと肩を震わせると、ついでに揺れるくらいの豊かな胸を持っている。

「う、うん。そうだね」

「そうかもしれないけど……私の好きな人、胸が大きい方が良いみたいで」

それは、切実。

カミエが切なく言うと、今度は同情ムードに場は覆われた。

「そうね。そう言うの、困るよ。『あんたの好みなんか知ったこっちゃない』とか思うけど、私達だって顔で向こうを選んでる時だってあるし」

「わかってくれるの、セナ？」

「もちろんよ、カミエ。——何もできないけど、心から応援させてもらうわ」

「うわあ、こんなに嬉しい言葉をかけてもらったのは初めてかも！」
カミエは小柄だが雰囲気のある少女に抱きついた。

「こらこら、重いじゃない」

「あはは、セナ小さいからね」

少女達の歓談は華やか。

カミエは心から楽しんでいた。しかし、この時不意にカミエの鋭い感覚が異常をとらえた。

静かに、カミエは小柄な少女から離れた。

「どうしたの？」

「えっと……トイレ？　ちよっと外行ってくる」

「カミエ、何かあったの？」

鋭く問いかけてきたのはカレンだった。

「大丈夫、あとで戻ってくるから。あれを持っていけないとね」

「そう。早く戻ってきてね」

うん、と朗らかに答え、カミエは屋外に飛び出した。

外は少し雨が降った後だった。灰色の空は、薄くなった雲がステンドグラスのように光を透かせていた。

たたた、と小走りに行くと、村の一部で力と力をぶつけている二人が見えた。

一人は織深・奏治。

もう一人は藤磐・希夾と名乗った魔術師。

「烈風旋！」
レップウセン

甲高い風切り音を響かせる、音速の槍の払い。

ソウジを囲んでいた水と泥で作られた人形が、バターのように切り裂かれた。

「やはり、吟遊詩人にも、詩人守護者にも、言葉ロゴスによる魔術の効果は薄いか。なら——」

キキヨウの杖がゆら……と揺らめいた。

淡い光が宿る。キキヨウが静かに杖を動かし続けると、水のような光が杖の先端に付いたカップ状の宝石に溜りはじめた。

一メートル強の杖の下端で、魔術師は足元に線を何本も引く。完

全な平行線だった。

「――虚空を行け」

杖に溜められた光が溢された。

トロ……と流れた蒼い光は、平行線の間に落ちたところで稲妻となりソウジを襲った。

「何だ!？」

本能的な反射でソウジは攻撃を避けた。

キキョウが地面に引いた平行線は、線ではなく線と線の間が淡く光っていた。濡れたように。そこから立て続けに稲妻が放たれた。

だがソウジは魔法の稲妻を槍で叩き落とし始めた。

「吟遊詩人の支援とは大したものだな」

「そうだぜ。あいつはここにはいないけど、支援は離れていてもそんなに効果は変わらないんだぜ」

三メートルの間合いの外から、二メートル近い槍が神速で突きだされる。

しかし、槍が貫いたのは霧の塊だった。魔術師は――

「もらった。なかなかだったな、詩人守護者よ」
コールド

いつの間にかソウジの右手に回っていたキキョウは、光を宿した杖を地面に打ち捨てた。

カラン、と地面で跳ねると、杖は蒼い頭に漆黒の身体を持った大蛇へと姿を変えた。

「い!?!」

蒼頭の大蛇は間を作らずにソウジに突進した。

ソウジは避けることも、迎え撃つこともできない。身体の間隙を固めて、ダメージを最小限に抑える構えしかとれない。

「――そこまで!」

横手から虹色の光が蒼頭の大蛇を貫いた。

大蛇は弾け飛び、カラカラと杖に戻って地面を転がった。

「カミエ……」

「七那瀬・神恵！ 探したぞ」

キキヨウが戦いを忘れたかのようにカミエに向かって駆け出した。ソウジは不意をつかれた。

カミエに抱きつく勢いで駆け寄るキキヨウ。だが、それはかなわない。

「近寄らないで」

その言葉、共に放たれた威圧感に周囲の温度が一気に下がった。

キキヨウは十歩手前くらいで立ち止まる。

——怒ってる。

ソウジは恐々しながらカミエを見ていた。

「あなたのことはこの村に來た時から全部知ってたの。でも、面倒くさいから放っておいた。私の幼馴染だかんだ知らないけど、今の私はジュン一筋なの。それに、北へ行かないなんてもってのほかだし。これ以上ふらふらされると迷惑だから、さっさと帰って」

カミエの口調は断固としていた。

普通の人間ならば、カミエにこんな口調で話しかけられたら心臓が止まってもおかしく無い、それくらい恐るべき威圧感が放たれていた。

しかし、キキヨウは平然として反駁していた。

「私のことを覚えていないのか、カミエ？ 君の靴を直してやりとにかしただろう？」

「そういう人がいた様な気がしなくても無いけど、私の記憶とあなたは一致しないの。それに、昔の人に出てこられても仕方ないし。あきらめて」

「カミエ……」

ドカ！

キキヨウはカミエに歩み寄ろうとしたときだった。

彼の目の前で光が炸裂し、カミエを中心として円状に深く溝が刻み付けられた。

「それ以上近寄ったら、容赦なく消し炭にしてあげるから」

これにはさすがの魔術師も色を失う。

どんな魔術師でも、神の力の一部たる『混沌の光』を持つカミエには敵わない。そしてカミエは、やると思ったら躊躇いなくやるだろうという恐ろしい雰囲気放っていた。

——殺すといわないのが、逆に怖いよな。

傍観体勢のソウジが思った。

それでもキキヨウはしばしカミエと視線をぶつけ合った。そうすれば想いが伝わるかのように。

「……わかった。今日は引こう。だがカミエよ、私はあきらめないぞ。君は自分の状況に混乱してまともな思考ができなくなっているだけだ。進んで命を捨てることなどない。私が解決策を見出してみせる」

「あー、はいはい」

「しばらく私は来ないが、幾人もの追手を送ろう。必ず君をさらってみせる」

「……」

す……と風が吹き、わずかな霧が訪れたと思ったらキキヨウの姿が消えた。

「ちょっと、格好いいと思っちゃった」

カミエがぼつりと言っていた。

「すまねえな。結局お前の手を出させちゃった」

ソウジが詫びた。

「ううん。私が勝手に出てきただけだから。ソウジだって、ジルちゃんの応援を受けてたんだし、私が何もしなくても勝てたんじゃないの?。」

そうかな、とか言いながらソウジは頭をかいた。

そして少し黙った。

カミエはソウジが何かを言いだそうとしていることに気が付いた。

「別に良いのよ」

「え？」

「私は、私の意志で死ぬことに決めたんだから。ジュンが好きなことも、あのキキョウって人について行きたくない気持ちも、全部私のものだから。だから……あんまり否定しないで」

「う……」

言葉が胸に刺さった。

『否定しないで』——小さな声で言ったカミエの横顔は、胸を振り切るような切なさがこもっていた。

だが、次の瞬間には太陽のような笑顔でカミエは笑っていた。

「ごめんごめん、ちよつと言い過ぎたよね。ソウジは良いんだよ。

ソウジは私の前に立ちはだかったり、邪魔はしない。それにソウジは格好いいし、優しいし、まっすぐだし、だからソウジは良いの」

「お、おう」

「そろそろ戻るね。みんなが心配するかもしれないから」

ぱたぱたとカミエは駆けていく。

届かないとソウジは思う。若干の絶望感と共に。

カミエの意志は固すぎる。ソウジは良いと言ったが、それも『邪魔はしない』うちの話だ。迂闊に彼女の心を傷つけることをすれば、カミエは容赦なくソウジでも攻撃するだろう。

——そこまでする気はないんだけどな。

本当に。

意志を尊重することは理解している。悲運の中で少女が決めた思いを、無下に否定することなんてソウジにはあり得ない。

それでも、難しいとは思う。これは理性とか倫理とかを超えた、運命という理不尽の関わる問題だ。どこまでもソウジの『大人の理論』で片付けられるものか………ソウジには分からない。

「でも、行くさ。見届けるって俺も言った。——そうだろう、ジルコニア？」

虚空に声かける。

答えは、きちんと帰ってくる。

（そうね。そうして欲しいものだわ）

遠いジルコニアの声はそっけない。だが、信頼のようなものがそこにあることをソウジは感じ、少し励まされた。

○

山間の村に来て三日目になった。

魔術師に襲われたあと山の中をさまよいつくし、帰ってきたのが夕餉も過ぎた後だったジュンは、この朝も早々に起きて碌に食事を取らずに出発の準備を整えた。

「そんなに急ぎたいかねえ」

ソウジが呆れたように言った。

「時間をロスしすぎた。これ以上もたもたするな」

「一分一秒争うってわけでもないだろうに。先は長いのに、よくそんなテンションでここまで来たよな」

「うるさい」

「てか、すっげえ苛々してね？ 気にするなよ、誰も不意打ちには勝てねえって」

ギロ、と睨まれてソウジは両手を上げた。

そのわきではジルコニアが衣装を直していた。

「——カミエは？」

「ん、ちよっと待ってって出て行ったよ」

「あいっ——！」

勢いよく荷物を背負うと、ジュンは大股で宿を出て行った。空は高く真っ青に澄んでいた。太陽は明るく、風は涼しく、絶好

の旅日和と言った様子。――だが若い教会騎士がそんなことで感動することも無く、彼はただ目測をつけた家へまっすぐに歩いた。

村の中心部を横切ると、活動を始めたばかりの村人たちが挨拶をかわして賑いでいた。その賑やかさには、ジュンの意識は少し引かれた。

村の中でも際立ってデザインの凝った須藤の家が見えてきたところで、パタリと扉が開閉した。

早朝の陽光の中、カミエの金髪が光そのもののように舞った。ハッとする美しさ。どんな風景にも心惹かれることのなかったジュンの眼が止まる。

「あ、ジュン。迎えに来ちゃったの？」

彼を認めたカミエがパタパタと駆け寄ってくる。

その手の中に大きめの木製の皿、その上に乗った茶色い物体。

「気になる？ 美味しそうですね？」

円形のそれは中央にグリーンリーフを乗せ、オパールのような果物が埋め込まれていた。

「火を通したお菓子――甘すぎなくて、でもお菓子らしい甘さを持ったお菓子――そういうわけで、今日のカミエちゃんのメニューは真珠風ピーチパイです。さあ召し上がれ」

「真珠風……？」

「この桃がね、森の真珠とかっていう品種なんだって。カレンちゃんが取っておきだって譲ってくれたの。さ、食べて」

八分の一ピースでずいと押し渡される。

押しの強さに負けて、ジュンはピーチパイを口に入れた。

――口の中で香りが弾けた。

目をむくほどの香りの豊潤さだった。確かに甘みは抑えられ、しかし菓子らしさを保った絶妙さ。桃はとにかく香り高く、味の薄さは蜂蜜とバターが補いつつ引き立てていた。

「隠し味は桃の花と私の愛ってところかな？ ねえ、どう？」

「……うまい」

やったあ、とカミエは手を叩いて跳ねた。
その様子にジュンは呆れつつも、ピーチパイの出来には感嘆せざるえなかった。

「カミエ」

「え？ なに？」

「これから宿を取る時は部屋は別々にする。だが、特段お前がどこか行く必要はない。俺といたければそれでも良い。もちろん構ってはやらないけどな」

「……………」

カミエがぴたりと沈黙した。

じろじろとジュンの顔を見ってくる。うざったく思ったが、ジュンはじっとカミエから眼をそらさなかった。

「ジュンって、変だよ」

やっとな彼女が言ったのはそんな言葉。

「うるさい」

「すっごく変」カミエは重ねた。――「真面目な顔して、そんなこと言っちゃって。もしかしてずっと悩んでた？ 言いすぎたとか考えてた？ 私は別に気にしてなかったよ。そりゃ言われた瞬間はちよつと気になったけど、すぐに、ジュンが天邪鬼で無神経だってことを思い出したから。――でも、嬉しい！ そういうことをわざわざ言ってくれるなんて。私達の愛も深まってきたって感じね！」

カミエが飛びかかってきた。

しかし、今回は存分に腕を震えなかったが凄腕の剣士であるジュンは、その動きを先読みして回避した。

ドサ、と割と可愛げのない効果音でカミエは地面に倒れ伏した。

「うう……………」

——あの男はどうなんだよ。

カミエの小さな背中を見おろしながら、ジュンはある男のことを思い出した。

藤磐・希爽、とか名乗っていただろうか。彼はカミエに想いを寄せていると言った。自分とは違い、彼ならカミエが求めるままに愛の言葉を囁き、大事にするだろう。

奴について行けば良いだろうに。

しかし、すぐにその思考はくだらないとジュンは結論した。彼はカミエの一番大切なことを否定している。そしてあの冷たい口調の割に綺麗事しか言わなさそうな男では、カミエの心を満たすことはできないだろう。

なら俺が連れていくだけか。

「ひどい……やっぱりジュンはジュンね」

「当たり前だろ。——長居し過ぎた。あいつらも来たようだし、いい加減出発するぞ」

—— **きた魔術師と戦う件** (後書き)

また一月くらい待って下さい。
次はそっくりさんが出てきます。

チャット#3

「あー、ずっと山続き……（ジル）」

「ジルちゃん山嫌いな？（神恵）」

「山の音は嫌いじゃないけど……、山を歩くのは面倒くさい。ねえ、ジュンお兄ちゃん、そろそろ休憩しない？」

「……（盾）」

「ジルコニア、おぶってやろうか？——って、蹴るな蹴るなっ。子供あつかいしてすみませんでした！（奏治）」

「あーあ、お兄ちゃんがつまらないこと言うからもっと疲れちゃった。なんかお話しない？ ナナお姉ちゃん」

「そうだね。……じゃあさ、魔法について教えてよ」

「あたしが話す系？ まあいいや」

「魔法——魔術っていうのは一口に言ってもたくさん種類があるよね。そもそもの働きとしては『思ったことをその思考する力で、つまり精神力で実現させる』技術のことだね。もう少し言うと、肉^マ体の力だけでは達成できない目標を、精神から汲みあげる力で足りない分を補って目標を果たすための技術。

「魔法のための力は人の精神から来るみたいに言ったけど、必要な力を全部精神から汲みあげたらあつという間に人間はだめになっちゃうよ。だから他のところからもらったり、節約したりする。その方法で魔術の種類は分かれるね。

「魔術の分類は力の使い方だけじゃなくて、発動までの細かい原理でも分類されるよ。具体的にいうと、力を直接相手にぶつけるか、それとも他の何か、精霊とか魔獣とかを操るのか。そのための命令文は言葉か、音楽か魔法陣みたいな図かそれともテレパシーか。

「この間の魔法使いさん、キキョウを例にとると、力は節約して自前のを使って、操るのは五大元素、命令法は言葉と簡単な図。五大

元素っていうのは自然現象を構成する根本的な要素で、火・水・風（空気）・土、それに加えて光の伝搬とか目に見えづらい現象を司る元素エーテルを合わせた五つのこと。ていっても五大元素は絶対的に存在するものじゃなくて、ただ単に現象を分かりやすくとりえて操作しやすくする論理で、だから四大元素論とか陰陽五行論とかも存在する。キキヨウのは火・風・土は水から生じるから水の術式で四大元素論の魔術を全部まとめつつ、エーテルの元素も使って足りない部分を補ってるって感じ。

「次の例はジュンお兄ちゃん。ジュンお兄ちゃんの使う魔術は特別に『聖霊魔術』っていうね。パワーソースは上位存在からの信仰を条件とした供給。送られてくる力が大きいから力そのものをぶつけている感じで、そのための命令は言葉——聖句と、寓意絵。聖符を使うと術の発動までの手順を省略できるよ。キキヨウの使う魔法って言うのは自分で理論の細かいところまで理解しつつ、自分で命令文を作らないといけないんだけど、聖符っていうのは偉い信徒達が作った魔術を彼らを讃えることでそっくりそのまま発動できるようにしたもので、ある程度魔術のことを知っていて信仰さえ深ければ簡単に使えるの。」

「それと聖霊っていうのは、モナ・ラトレイ一神教でいう三位一体、父と子と聖霊のことだね。聖霊は『言葉によって与えられる愛』、これを言い換えると『神から与えられる力』であり、聖霊もまた五大元素と同様に実際に存在するものではなく概念として考えられるものでエネルギーそのものっていうふうにも考えられるね。エーテルの元素に対応するとも考えられるけど、聖霊は信仰の強い人に従うようになってるから」

「ナナお姉ちゃんのは命令文も術式もあったものじゃなくて、ただ単に力をぶつけるだけだね。しかも、その力は自分の中から来る。そういうところは全然人間ばなれしてるんだよね」

「父、子、精霊……、『子』ってなにかな、ジュン？（神恵）」

「知らん。そもそも『三位一体』は一般的な教義には含まれていない。魔術師の使う啓典『ヘルメス』にしか書かれていないしな」

「じゃあ、どうやってジュン達は魔法を使うの？」

「信仰が力になる、それだけで充分だろ」

「ふーん。――ソウジは魔法の勉強したりしないの？」

「あれ難しんだぜ？ 術式を覚えるだけじゃなくて、道具を揃えて、魔力を操作するための回路を身体と精神に刻まないといけないんだよ」

「やろうとしたんだ（神恵）」

「そりゃ、強くなりたかったからな。ま、でも槍一本でもなんとかなったし、今はジルコニアがいるからな」

「吟遊詩人の『音楽』？ あれはこういうもののなの？」

「んー、その話はまた今度、あたしがいっぱい活躍したら教えてあげる」

チャット#3 (後書き)

奏治君の影が薄いです。

act 4 「騎士が実弟と再会し

………夢は赤い……

赤い夢……

炎と煙、そして血と肉。

赤いにおい、赤い景色。それは少年に彼女との戦場を思い出させた。

——いや、違うか。

生まれて十九年、まだ人として短い時間だが少年はそれまでに同じような光景を二回目にしていた。つまり、炎と血の赤に染め上げられた忌わしき戦場の光景を。

渦巻く熱の暴虐によって破壊され、歪められているのは少年がよく知った光景。瓦礫になり黒い煙に染められていても、その瓦礫の一つ一つに懐古の記憶が甦る。

夢の中で目の前に立っているのは七八歳くらいの男の子。

刃渡り一メートルくらいの反り刃の剣——刀を手にし炎と瓦礫に囲まれて立っている。

男の子の刀には何かの肉がこびりつき血が滴っていた。

男の子の足元には異形の怪物が動きを止め、あるいは分断されて転がっていた。

炎の上昇気流に掻き乱される彼の髪は真紅。果実のような美しい紫の瞳には狂気の光が宿っていた。

夢の中でその男の子を見る自分の心は震えていた。恐怖と嘆きに。自分の良く知っていた世界が崩れ身近な者が狂気に沈む事実^{きおく}に、夢の中の意識は震えていた。

「兄さん……」

「……お前、何故ここにいる？」

「やだなあ、ジュン。ジュンが寝坊しているだけじゃない」

「——！」

いつも日が昇る前には眼をさましているのに、今はもう太陽が地平線から少しばかり離れてしまっている。

そしていつもはジュンよりも遅く起きる——というか誰よりも遅く起きる——カミエが今日は髪 of 寝癖もなくジュンに覆いかぶさるようにして顔を見ていた。

鳥達が鳴き交わす朝の森の中木の幹に寄り掛かるようにして眠っていたジュンは、弾かれたように立ち上がった。

「珍しいよな、ジュンが寝坊するなんてよ」

「うん。——なんか、すっごく深く眠っているみたいだったよ。あ、御飯はもうできてるから。ソウジが作ったの、なかなか良くできてる」

「ジルと二人の時は俺が作るんだぜ？ うまくなってどうするんだよ」

旅の連れが何か言っているが、ジュンはほとんど聞いていなかった。それよりどこで朝の祈りをしようかとか、そんなことを若干取り乱した頭で考えていた。

「良い夢を見ていたみたいね、お兄ちゃん」

「————」

「あ、そうなんだ。どんな夢、ジュン？」

カミエの問いかけには答えない。それよりも自分が夢を見ていたことを知っている吟遊詩人に目を向けた。

ジルコニアはにっこりとあどけない顔で笑う。

「あたしは吟遊詩人だよ、ジュンお兄ちゃん。呼吸の仕方とか、普通の人には聞こえない心の動く音とかで夢を見ているってくらいは簡単に分かるよ。どんな夢を見ているかはプライバシーだから探らないであげたけど」

「っ……」

「あ、すっごいおっかない顔してる。朝からそんな顔していると若さが逃げちゃうよ、お兄ちゃん」

「顔を洗ってくる。少し待っていてくれ」

ジュンはジルコニアを睨みつけるのを止めて、寝る時に外していた楯や聖符の束などを腰につけて身支度を始めた。

「飯はどうするんだ？」

そういつて鍋を叩いたのはソウジ。いつも食事はジュンが作るが、今日は代理でソウジが作ることと相成っていた。

「いらない。――保存できないものなら後で食べるが」

「いや、大丈夫だ。気をつけろよ」

ジュンは最後の言葉を聞き流そうとした。だが、

「気をつけてね、お兄ちゃん」

そういつたジルコニアの態度は、腹立たしいくらいに物言いげだった。

カミエの方を見ると、彼女は何事もないような顔をしていた。――だが、本当にジルコニアがほのめかしたことを分かっているのかは、ジュンには判断できない。

――お前はどうかだったんだ？

夢のことを思い出し問いかけたくなった。自分の生まれ育った街が破壊される光景を見たジュンと、同様の経験をカミエはしている。

カミエの場合は自分で破壊したという付加要素があるが、それも踏まえてジュンはその心情を問いかけたくなった。

しかし少しの逡巡のち馬鹿馬鹿しくなり、何も言わずにジュンは小川の方へと歩いて行った。

野宿するときは夜気の冷たい開けた場所で眠るより洞窟や山小屋、そうでなければ少し森や木立に入ったところで眠るのが良い。だから野宿する場所から離れて森の中に行けば、森の深部へと進むこととなるのは当然である。

その森は幹が苔むした、古く、太い木が多かった。木々の気配が強く鳥や獣の気配はあまりしない。生き物としての人間にとってはあまり居心地のいい森ではなかった。そういったことには比較的鈍感なジュンだったが、自然とその手は腰に帯びた剣の柄に乗せられている。

——わざわざ油断する必要もないしな。

やがてサラサラと音を立てる細い流れに行きあたると、十分に周囲を見渡してから水面に屈みこんだ。

水はとても澄んでいて、緑に光る川底のおかげで水面がよく見える水鏡となっていた。自分の顔を見たジュンは、さっきの夢のこと——夢の中の男の子、自分とほとんど同じ顔をしていた一人の少年のことを思い出した。

——久しぶりだったな。

あの夢を見るのはずいぶんなかった気がする。特に教会騎士の見習いから一人前となり、任務に忙殺されるようになってからはほとんど見ていなかった気がする。

「本当に、久しぶりだよ——刀夜^{とうや}」

水面に映る顔が増えていた。——若き騎士と酷似した顔だった。若干輪郭の鋭さが違い、向こうの方がシャープに整っている。どちらかと言えばもう一つの顔の方が女性には人気が出るだろうといった顔立ち。赤い髪と紫の瞳はそれぞれジュンの物より鮮やかで明るい色合いだった。

ジュンは水面から顔を離し、背筋を伸ばして立つ。

小川を挟んだ位置に立つ、自分と同じ顔の少年。向こうの方が僅かに背丈がある。陣羽織のようなローズブラックのコートを羽織っていて体格は良く分らない。

そして——ジュンは相手の得物を見る——が、相手は武器を見える形で持つてはいなかった。だが武器を持たない者の気配ではなかった。

「兄さん、久しぶりだよ。元気にしていた？」

相手は——トウヤがにこやかにハスキーな声で言った。

「何をしに来た？」

「何をしに来たって、兄さんに会いに来たんだよ。僕はずっと兄さんを探していたんだけど、なかなか見つけれなくてね。でも最近、僕の知り合いの魔術師が兄さんに会ったって教えてくれてね、こうしてやっと会えたってわけ。——ねえ兄さん、そんな怖い顔していないでくれよ。せっかく双子の兄弟が長い年月を越えて再開したって言うのに、どうしてそんなに無感動なのかな？」

ジュンが黙っていると、トウヤは笑顔を貼り付けたまま滔々と話し続ける。

その笑顔に隠してある物をただ探るように、ジュンは鋭い視線を自分の弟から逸らさなかった。

「——夢を見た」

「夢？」

トウヤはきよとした表情になる。

「俺達の街が焼ける夢だ」

「ああ、あの時の。それは夢って言うか記憶だよ。——なつかしいなあ。兄さん最近街に帰った？ 近頃は少しづつ新しい街になっているんだよ」

——なつかしくは、ない。

彼の夢にまつわるのは、燃えるような喪失感と、漠然とした悲嘆、そして……恐怖だ。

「お前には会いたくなかった。顔も見たくなかった」

「そう？ 酷いな、兄さん。顔は僕も兄さんも同じだから、鏡さえ見ればいつでも見てるのに。僕は鏡を見るといつも兄さんのことを考えていたよ。でも、二人とも同じように健康そうに育つことができて良かったよね」

トウヤは饒舌だった。本当に、兄との再会を喜び、浮かれているかのように勢いよく話す。

だがジュンの心はトゲトゲしたままだった。

「何故、今ここに来た？」

「だからさっき言ったじゃないか。ずっと——」

「同じ事を繰り返さなくていい」 ジュンはトウヤの言葉を遮った。
——「俺は教会騎士として、多少は名を知られているはずだ。お前も俺が教会に入ったことは知っていたはずだから、探せない道理がない。——言え、何の用がある？」

少し、トウヤは黙った。

「それは、兄として命令している？」

「それでお前が口を割るなら、それでも良い。どうせお前の兄であることには変わりはないからな」

「そっか。じゃ、言うよ」

トウヤはジュンから、小川から少し離れる。

そして左手を虚空に伸ばす。手のひらは自分の影に向けられていた。

「今は——とりあえず、兄さんの腕を見にきた」

彼の影が、伸びる。

地面にではなく、垂直に。

影からまっすぐ縦に生え、トウヤが掴んだ物は長さ二メートル近い長刀だった。漆黒の鞘、柄に結ばれた女の髪のような艶やかな紐。反った刀身は柳のように美しく、まるで芸術品のようなだった。

柄の端を左手で掴み、鐔の真下を右手で掴む。長い鞘はといえば……まるで煙が落ちるかのように自然とこぼれて刃を露わとした。刃もまた影のようにぼんやりと黒かった。

「——」

ジュンは相手の切っ先から視線をそらさずに、ゆっくりと剣を抜いて右手に握り、左手に楯をつけた。

「かっこいいね、兄さん。本当にナイトになったんだ。——ていうか、僕らの継いだ『無明一刀流』はどうしたの？」

「——捨てた」

「ちょ——！」

ジュンの台詞に、やや本気で取り乱した様子でトウヤは緊張を解いた。

「それはいくらなんでもないんじゃないの兄さん？ 兄さんの上には兄弟はいない、っていうか子供は僕らしかいないし、門下生もみんな死んだし、僕らが継がないで誰が無明一刀流を継ぐのさ？ 草葉の陰で父さん達が泣いているよ」

「——俺が強くなるためには、あの剣術を捨てることは必要だった。俺はまだ目録も得ることができないほど未熟だったし、ごく一部しか継ぐことのできなかつた剣術では強くなるには限界があった。だから、俺は教会で一から剣を学びなおした」

「そう……その気持ちは分からないでもないけど。僕の剣だって本

当の無明一刀流から比べれば、だいぶ亜流になっているだろうからね」

トウヤの残念そうに言う表情はどうやら本物っぽい、ジュンはそのように推定した。

彼ら『音無』の家に代々伝えられてきた剣術を捨てたことは、口では無感動に言えるが、ジュンも無念なことは無念だった。だが、それは口にはしない。彼は愚痴を言うことを善しとしなかった。

ジュンはゆっくりと剣の切っ先を弟に向けた。

「お喋りはここまです。そろそろ俺の時間も無くなってきました。――構えろ」

そう言ったジュンの心持ちは、真性の敵と向かい合う気持ちとは若干違う。まるで兄弟で剣の稽古をするような気分。そっけないようにしているが、心の奥では弟との再会で気持ちが緩んでいるような感じだった。

ポチャン――――木の葉から落つる雫が水面を叩いた。

先に踏み込んだのはジュン。小川を飛び越え、一気にトウヤの間に合い深くに進んでの一閃。

ガキン！ と鋭い剣戟の音が響き、鳥達が飛び立つ音が大きく聞こえた。

長刀の根元でジュンの剣を受けとめたトウヤは、刀を滑らせるようにして、押し切ろうとしてくる剣を逸らしつつ後退する。

「せあ！」

刀を楯で抑えつつ、ジュンは密着状態を維持したまま剣を切り上げた。

く、と小さく声を漏らしながらトウヤは逃げる。無闇に刀を防御に使うとしないのは、肉厚の剣よりも繊細な刀をかばったことだった。

後退しつつ、背後によく注意する。木の幹が近づいてきたところ

で、身代りするかのごとくトウヤは幹の影に隠れた。

直線的に追撃することは避け、ジュンは真横に駆けだした。

二人の距離が離れ、トウヤは長刀を構えなおす。だが振り上げる前には、再びジュンが肉薄していた。

「長いと不便そうだな……！」

剣を振るフェイント、それから刀に楯をぶつけ、剣を叩きつける。「ずいぶん楯と剣の使い方がうまいね。さすが……」

ここまでは防戦一方のトウヤ。

だがジュンは油断しない。合わない間にどのくらい成長したか知らないが、幼いころは大した剣の才を持っていたトウヤだ。今、本気を出しているとは考えられない――が、彼の全力が見たいわけではないので攻撃を甘くせず、このまま決着をつける勢いで攻撃を重ねた。

トウヤは木の影と次々と身代りしながら逃げる。

ジュンは決して木の幹に打ち込んで剣を取られるようなへまはすること無く、冷静に彼を追撃する。

そして何度目かにトウヤが木の影に隠れた時、ジュンは微妙な姿勢の変化を見逃さなかった。

刀は肩に担ぐように構えていた。その背後は少し開けた空間。つまり、二メートル近い長刀でも楽に振ることのできる場所だ。

ジュンはトウヤとの間に幹を挟み、見られない位置で姿勢を低くした。

直後、頭上の空間が断ち切られた。

それは比喻だが、ズバ！ と剣風も豪快に頭上を駆け抜けた一閃は、直径四百ミリメートルほどの木をぶった切って、それも一本ではなく三本をまとめて切断してなお、低い風切り音を立てるほどに速い一閃だった。

予想はしていた。しかしそれでも心に冷たいものを感じた。

すくむ心を突き動かすように、ジュンは低くした姿勢から伸びあがる勢いでトウヤに一撃を叩きこんだ。

トウヤは大ぶりの一閃を放った後。にもかかわらず隙はすでに回収されており、しかも御丁寧に刀の峰でジュンの一撃を受けとめ、弾いた。

カン！カン！カン！と小気味良い剣戟の音が響いた。

二人は互いに一呼吸で六合ほど打ち合い、そして距離を取った。

「やるね兄さん。やっぱり兄さんは強い」

「……もう終わりか？」

闘志を漲らせてジュンは剣を構えつつける。

しかしトウヤは長刀を無造作に一振りすると、自らの影にザクと突き刺した。

長刀は影に沈んでいく。

「今はここまで。お互いに、ここだと戦いづらいしね。――それとも兄さんは、異教徒のことは息の根をとめるまで追っていく？」

「そうだな……だが、今は行かせてやる。俺もまだ朝の祈禱をすませていないからな」

「そう。じゃ、また後で」

トウヤは煙を払うかのように、ふ、と姿をくらました。

――人を食ったような態度の奴が多いな。

口調も似ているし、とかジュンは密かに思っていた。

「おそかった――」

「どうだった？ 久しぶりに会う弟は？」

「「弟――！？」」

ジルコニアの台詞に驚いたのはソウジとカミエ。当のジュンとはと云えばすまし顔で、三人のことを見渡していた。

「ねえ、どうだったお兄ちゃん？」

ジルコニアは重ねて尋ねる。

『お兄ちゃん』——すっかり聞きなれた呼びかけだが、この時は皮肉っぽく耳に響いた。

「答える必要があるのか？」

「答えない理由もないんじゃない？」

「——懐かしい、といえばそうだが……腹に一物持った奴と会って嬉しいわけないだろう？——ジルコニア、あいつは何のために出てきた？」

「さあ？ それこそ興味ないから調べてもないけど……この間の魔法使いさんと関係している気がするな。ってことは、目的は一つだろうけど」

「ふん——」

その目的——ジュンは金髪の少女を見やる。カミエといえば好奇の瞳をランランと輝かせていた。

「ジュン弟がいたんだ。なんて名前？ 似てるの？」

「——」

「名前はトウヤ。刀に夜で刀夜^{トウヤ}。外見は似てるけど……中身はちょっと違う感じ。——だよ、ナナお姉ちゃん」

ジルコニアはあくまで、『音』で得た情報を元に発言する。だがその言葉は的確だった。

カミエもそのように驚く。

「見てないのに分かるんだね、ジルちゃんは。——でもこの感じだと、ジュンとはあまり好きじゃないんだね、トウヤのこと。トウヤはジュンのことが好きだったりして。でも良いなー。みんな兄弟がいて。私なんて、普通に暮らしてても兄弟はいなかったのに」

「みんなって、誰のこと？ お姉ちゃん」

そう問いかけるジルコニアの表情は、ちょっと感情がない様子。

カミエはその質問と態度にやや驚く。

カミエはソウジに視線を向ける。荷物をまとめて背負い始めていた彼は、カミエの視線に気がつくと思わずそうに笑った。

「誰って……ジルちゃんとソウジは兄妹でしょ？」

「違うし」――その口調はいつもの甘えた口調と裏腹に、素っ気なく粗っぽい。

「違うって、どうしてそんなにむきになって否定するかな？　ねえソウジ？」

「あー……それは話すと長いんだな……」

話題を振られたソウジは下を向き弱い声で答え、しかも言葉じりはフェードアウトした。

ジルコニアは小さい唇をつんとして何も言う気配がない。カミエは話が途絶えてしまって困惑した。

結局、その沈黙を破ったのは旅のリーダーであるジュンだった。

「待たせたな。――行くぞ」

a c t 4 「騎士が実弟と再会し（後書き）」

少し前からできていたのですが、ぐだぐだ推敲していたら遅くなりました。

立ち寄った関で刃を交え

音無・盾は蒼き峻峰を臨む小さいが要塞のようにしっかりした街で育った。国境沿いに立っていたその街は国の防衛の拠点として、すぐれた戦士や道場、兵器などが集められ、人口は少ないながらも栄えていた。

音無の家も街にいくつかあった道場の一つで、無明一刀流と名乗っていた。楯や鎧を用いず、その名の通り一本の刀のみで戦いぬく術を追求する流派で、それほど人気はなかったが名声は国中に広がっていた。ジュンとトウヤが生まれた頃は門下生は五人いたようだった。道場主の子供が流派を継ぐ決まりはなかったが、代々音無の苗字を持つ者が継いできたし、ジュンも流派を継ぐ者として幼いころから期待されていた。

道場主である父親は厳しくも大らかな精神を持った人格者で、多くの人から信頼されていた。母親はおっとりした性格だったが、刀を握るとどの門下生よりも強かったようだった。――母親が戦うところはあまり見たことはないのだが。――兄弟仲は良かった。共によく剣術の稽古をした。双子として生まれたので容姿はほとんど同じだったが、性格の違いは確かに存在し、意見がすれ違うこともあったが、父の大らかなところを多く受け継いだ兄のジュンは、弟と意見をぶつけるより、適当にかわしながら弟の好きにさせることが多く、そのため喧嘩することは極端に少なかった。

欲求が少なく、騒ぐこともない。ジュンはあまり子供らしくない子供だった。

そんな兄を、純粹に子供らしいトウヤは良く慕っていた。我がままを言うとき以外はよく兄の言うことに従い、遊ぶときは必ず共にいた。しかし、しばしばジュンを困惑させたのは彼の乱暴さ――それを通り越した凶暴さと残虐さだろうかわせるトウヤの言動。それさえも子供の持つ一面のようにも思えたが、ジュンはいつも心のど

ここに不安を抱えていた。父親と掛け合って、トウヤの言動が過ぎるようなことがあれば厳しく戒めることにしていた。

平和ではあるが、決して風ぐことのない日々だった。

そんな日々を、突然起きた嵐がすべてを薙ぎ倒していった。

……………

「どうしたの？ ジュン、もっと聞かせてよ」

「――関所が見えたぞ」

前回、山間の村を通過してからも、一行はずっと山道を歩いていた。街道には沿っていたし、その道も平坦だったので特に苦労もなかったが、前の村から一週間近く歩いているとさすがのジュンでさえも疲労が強くなってきていた。他の三人は木造だが大きく堅牢そうな関門を見ると、隠すことなく満面に安堵の表情を浮かべた。

「ね、今日はあそこに泊るんだよね？」

目前の関所の中には、ジュンの情報では小さいながら集落めいたものが存在している。

「ああ、俺は関所にある教会に用があるしな」

「用さえなければさっさと通りすぎてえって感じだな」

「そのとおりだ。俺は宿泊する必要がある」

ソウジの軽口は恐ろしい言葉を引き出した。

カミエとジルコニアの鋭い非難の視線が彼に集まる。ソウジは頭をさげた。

「どうか休ませてください」

「ふん……。次の町までは馬車で行きたいから、その準備に一晩かかるだろう。どのみち泊らないとならないんだ」

ソウジは胸を撫で下ろした。

関所に近づく、静かだった山道に急に人の気配が感じられた。休めるとなると一番年少のジルコニアなどは狂喜している。

「あれ？ それでさっきの話を続きは？」

「また今度な」

関所の中はジュンが得ていた情報のとおり、宿屋（というか宿舎）、食堂、銭湯や服屋など、最低限生活に必要な施設がそろっていた。

本来ならば関というのは地域同士の交流で賑わうもので、関所とはいわず付近に市場を開く集落が展開していてもよさそうなものだが、実はこの山道を通らなくても平野を行く大きな街も通る街道があり、そちらを使う人が圧倒的に多くこの関所はそれほど賑わわないのであった。けれどもこの道からだ港が近く、先を急ぐ人のために馬や車の用意が整っているということもあって、ジュンはこの道を選んだのだった。

むろん、ジルコニアなどは平野の道の方がいいと主張したがこれは棄却されていた。

三人を自由行動に送り出してから、ジュンは単独で関所にある祈祷所に立ちよった。

先程の情報に付け加えると、この関所は「教会」の支援があつて維持されている場所で、教会にモナ・ラトレイカ関わる信者達が旅をするときはよく利用されるのだった。教会が管理している場所であるからこそ、ジュンはここで馬車を調達しようと考えたのだ。費用は教会から経費として支払われることになる。

小さな祈祷所の扉は木の摩擦で重く、押し開くとググ……と低い音をたてた。

「自らの試練を認識し救いを求める旅人よ、ようこそ。祈りの時間ではないが祈られて行くか？」

円を十字に切った太陽十字を描いた白い壁を背後に、瘦躯で上背の高い老人がジュンを迎えた。この祈祷所自体は小さいが、この男性の位階は通常教会の長となる司教よりも一段上の大司教。大司教といえば本来はこんな小さな祈祷所など担当しないが、ここは単なる祈祷所ではない周辺の教区を束ねる中枢なので、大司教ほどの人間が在沖するのである。

とはいっても、普通の人間ならばこんな小さく不便な場所は担当したがるまい。特に飾りも無く、裾も着古した年月を感じさせて少し痛んでいる質素な服装をしている彼は、そこいらの欲の多い人間とは一線を画しているようだった。

「お初にお目にかかります、アーキbishop大司教飯村殿。私は所属なきカルキスト十字騎士、音無・盾と申します。此度は旅の告解をするために参りました」

ジュンは老人――飯村の前に膝をつき、恭しく言った。

飯村は威厳のある態度でジュンの肩に手を置いた。

「おお……そうですか。それほどの若さで十字騎士とは驚きです。貴公の敬虔さが神に愛され、何よりの力となっていることは間違いないありませんね。――告解を求めますか。なら、神の名のもとに戦士音無よ、己の所業をつつみ隠さず申すがいい」

告解とは、この場合においては教会に属する者が旅の報告をすることを指す。ジュンは老人より頭を低くしたまま、はつきりゆつくりこれまでの旅の経過、ソウジとジルコニアと会った時点からの話を始めた。

話の中で、ジュンはソウジとジルコニアに会ってから、カミエも入れた三名の要求に流され続けていることに力を入れて話した。己

の不甲斐なさを責めるように、しかし声にはなるべく感情を出さないようにして淡々と語った。

それに応え、飯村は問答を始めた。

「神は厳格であるが、人の子らには憐憫と慈悲を持ち、他者に対して寛大であるように教えられている。そのことについてそなたはどう思うか？」

「はい。私は他者に対して寛大であるようにしております。しかし彼らは信徒ではない故、そのような態度を見せ続けるには不適切であると思うのです」

「神は異教徒、特に偶像崇拝者は滅殺するように教えられることがあった。そなたは異教の民にであったときどのように対応する」

「はい。異教徒とはいえ、蒙昧で我々のいと高き神の偉大さを理解しない憐れな者がいます。そのような者は時がたてばあるいは唯一の神に帰依することも考えられますし、無闇に葬ることはいたしません」

「我々の神は戦を勧め、罪には血をもって報いられる厳しき神だが、預言者や聖者たちはむしろ寛大さと慈愛をもって万民に臨んだ。剣は畑を作らず、水をまくことで種は芽吹く。どうだ？」

「はい。仰るとおりです」

「神は無限の力をもっている。人間の力は卑小だが、それでも心がある。我々の心はヌースだ。これは何だ？」

「神の息吹です」

「そうだ。神に息吹、神の精神。楽園を追われしアダムは神の息吹によって命を得、我々にもその欠片の欠片が伝わっている。すなわち肉体は脆くとも、精神にはそれ以上の可能性があるのだ。――罰は神が命じられた時のみ下し、それ以外のときは慈悲と寛容をもって他人に当たるのが人の生きる道ではないか？」

「はい。しかし彼らが異教徒である点は……」

「そなたは伝道師だ。実感がないようだが、そなたは神の剣となる

と共に、神の本となり教えを広げる役目もあるのだぞ」

その時、ジュンは「はい」と答えることを忘れた。

ジュンは特級十字騎士。所属する聖堂を持たず、時に人里離れた地に赴き神に仇なす者達を排除する遠征の戦士。しかし古い言葉フスハー語でいう『カルキスト』とは遠征の騎士を指す音ではなく、教えを広める者。長い年月で教えを広めるという意味から異端を葬り神の名を知らしめる騎士に対して使われるようになっただけであるのだ。

ジュンは自分の中に熱いものがこみ上げるのを感じた。信仰を持つ者だけが持ちうる、独りよがりではない、外的な事象に裏付けられた強い感動だった。

「私は、大司教殿、私は……」

「良い、言葉にする必要はない。言葉は神であるが、不完全ならば言葉を生みだす必要はない。そなたの中で熟した時に、神の名のもとに唱えると良い」

「はい……！」

涙が伝う頬。それは一人の物だけではなかった。

ジュンは感動に震えながら床にひれ伏した。飯村も彼に背を向け、壁に描かれた太陽十字を向いて跪いた。

天窓から差し込む光が、とてもまぶしく感じた。

祈りが始められようとする。しかしそれを遮って、かしわ手の音が響いた。

「兄さん、本当にモナ・ラトレイカになったんだね。教えに感動して涙するなんて、僕には考えられないよ」

「……何しに現れた。ここはお前のような異教徒のくる場所ではない」

「異教徒、ね。少なくとも兄さんの連れてる三人よりは異教徒じゃないよ、僕は。だって、ほら、覚えてる？」

「……ああ。そういえばお前、俺達が教会に拾われてしばらくして

からいなくなっただんだよな。――一振りの魔剣と共に！」

「兄さん、怒ってる？　でもあの時僅かに教わったことは忘れていないし、剣は今でも使っているんだよ」

「今朝見せてもらったさ」

気配を悟らせずにトウヤは、床にひれ伏していたジュンをあざ笑うように見下ろしていた。彼の立つ場所はちょうど日陰になっており、まるで神の加護の外にあるかのような雰囲気があった。

会話が途切れ、兄弟はしばし沈黙する。

立ち上がり、やおら剣を抜くのはジュン。弟の顔がわずかに強張った。しかし戦闘は止められた。

「伝道師よ、先程言った事を忘れたか？　それに男の兄弟を斬ることはあまり褒められたことではないぞ」

「も、申し訳ございません」

ジュンが急いで剣を収めるのを、愉快そうにトウヤは見ていた。剣をしまい、代わりに剣のように鋭い視線をトウヤに向ける。

「座れ、トウヤ。これからお前に説教してやる」

「や、それは遠慮しておくよ」

と言いつつ、トウヤは祈祷所の片隅に置いてあった椅子を引っ張り出してジュンの前に座った。（祈祷は床に坐して行うものであるから、祈祷所に椅子が常に並べられていることはない）

「それより兄さん、僕から話があるんだけど？」

「……何だ？　カミエのことなら取り合わないぞ」

「ところがどっこい、七那瀬さんのことなんだな。――兄さん、もう旅をやめなよ。世界を護りたい気持ちはわかるけど、兄さんには無理だと思う。今までだって、さんざん非道なことしてきましたって顔しているけど、本当は本当の悪人しか兄さんは殺していない。それ以外の、悔いている罪人なら兄さんは必ず更生の道を与えている。その兄さんが、あの穢れを知らないような『黒き月の独り子』を犠牲にできるっていうの？　兄さんは知らないだろうけど、『混沌渦巻く聖墓へトウエルヴ・ケイオス』はそれはそれは恐ろし

い場所だ。そんな場所に、兄さんはあんなに可愛らしい女の子を捨てられるって言うの？」

「くだらない」

ジュンは即答した。

「くだらない」 彼は繰り返す。――「お前が俺の何を見てきたかは知らないが、カミエのことに關して言えば見当違いもいいところだ。あいつは自分の罪を悔いてなどいない。ただ絶望して、死にたがっているだけだ。いや、悔いているかどうかは問題ではない、あいつはただ、もう死にたいんだ。だから俺はあいつを連れていく。どうせ人の規格から離れた『独り子』のこと、その言葉にどれだけ真があるかなんか普通の人間にはわからない。だから、俺は信用しない。ただあいつが死にたがっているという点だけ、俺は確信している。――それに、お前自身がカミエを死なせたくないと思っているわけでは無からう？」

「まあね。――それにしても、そんなあの子が兄さんは好きなんだね」

「――」

「否定しないんだ」

「否定も肯定もしない」

「でも兄さんは曖昧なところのない人間だから、そういうってことは肯定したも同じだ」

答える言葉はない。

カミエは『黒き月の独り子』の属性として無意識に人の心を揺さぶる。あるいは、元からそういったカリスマを持った少女だったのかもしれない。とにかくジュンはそのことは否定しがたい事実だとして受け入れ、その上で彼女と向き合おうと思っているのだ。

彼女を憎悪すれば、あるいはその影響から逃れられるかもしれない。しかしそうはしない。何故か？ それは何度も繰り返された問いであり、それにも関わらず答えは出されていなかった。――憎みきれないと、理性では語れない魂の振動がそのような結論に至って

いた。

トウヤはにやりと嗤って言う。

「ま、これもある程度予想の範疇。なら兄さんには七那瀬さんを嫌いになってもらうよ」

「嫌いに……」

その時、野太い雄たけびが外から聞こえた。

ついで警鐘。鳴り響くのは鐘の音だけではなく、人の断末魔の絶叫もだ。

ジュンは電光石火で剣を抜きトウヤに撃ってかかった。

「貴様……何を謀った！」

トウヤはつると逃げる魚のような動きで剣をかわした。

「総勢六十人。どれも屈強の戦士、至賢の魔術師ばかり。向こうはこの手の内を知っているから、ここが落ちるのは早いよ。それに火だって何だって使う。――神の力の欠片を持つ人は、否応なしに戦うだろうね」

「くっ………お前！」

逃げるトウヤを締め上げようとするが捕まえられる。そうこうするうちに彼はドアの外へするりと出て行ってしまった。

聴こえる微かな笑い声。

「あいつは後だ。――飯村殿、すぐに応戦の指揮を」

「分かりました、特級十字騎士殿。神の名のもとに不埒な者達を蹴散らしましょう」

戦力は完全に分断され、地の利も奪われた戦士達は炎渦巻くなかで、追い立てられ、殺され、次々と骸を曝していた。まさしく阿鼻叫喚。煙と共に揺れるのは血と臓物の匂い。戦士達は無残な姿で殺

され、曝され、その光景を物見やぐらの上に登ったジュンが齒が碎けるくらいに食いしばって状況を眼と耳で確認した。

戦闘可能な敵の総数は五十。近接戦闘者が三十三に、飛び道具および魔術使用可能な者が十七。衣装に統一性の見られない敵は、どこかの軍隊ではなく傭兵の集まりのようだった。

ソウジとジルコニアは三名の傭兵に足止めされている。二人が本気になれば一瞬で切り抜けられそうなものだが、急襲で混乱しているのかその態勢に入っていない。とは言っても敵もそれなりに強い者らしいことが目に見えた。——もしかしたらこの状況を楽しんでいるだけかもしれない。

そしてカミエがない。——否。

「ジュン！ やっと出てきたね」

物見やぐらの上にいるジュンと、同じ目線にいるカミエ。やぐらの上には登っていない、つまり、空を飛んでいた。

風に舞う極細の金糸のような長髪と、淡い虹色の光でできた両翼。いつ見ても、その姿に目を奪われずにはいられない。

「お前——っ、いや、俺の近くに來ただけならいいか……」

「？ 何ぶつぶつ言ってるの、って、何かウザ！」

カミエの両翼で何かが爆ぜた。氷の矢のようなものだったが、世界を滅ぼすとも言われる『光の混沌』の力で作られた両翼の前では火花のようなもので、特にダメージはなかった。しかし攻撃されたことにいら立ったカミエが即座に反撃した。

バシ！ と下の方で光が爆発する。叫び声が三人分くらい聴こえた。

「カミエ！ お前は余計なことするな！」

「はい。じゃ、応援してるからさっさと片付けてよ。——とりあえず、半径二十メートルにいる敵さんは十二人だから」

物影に隠れて見えないはずの敵を、カミエは優れた感覚神経で容易く把握していた。

「……まだ生きている味方はどこにいる？」

「ソウジとジルちゃん以外の人達はね、あっちの倉庫の方に逃げて行ったかな。ていうか、倉庫に立てこもった人たち以外は死んじやった」

数名の人の生死など、もはや何ということはないという態度でカミエは言う。

——いや、俺さえ生きていればいいのか？

漠然と思いつき、どうでもいいことだと頭の外に置きつつジュンはやぐらから下に降りた。

『勇敢なる戦士にして、王達の始祖たるダビデの力、聖なる土地を踏み荒らす悪しき軍勢を蹴散らす力をここに！』

すでに関所の兵たちを追い詰めたと思い、油断していた傭兵の背後からジュンは攻撃を放つ。とっさに振り向いた傭兵だが、為す術なく稲妻の弾丸に撃たれ塵と化した。

剣を地面に叩きつけ小石を飛ばし、それに力を付加して飛ばす技。関所の兵が立て籠もった倉庫まで届き、その前に立つ敵兵を一気に四人ほど蹴散らしていた。

あっけにとられる傭兵の一団。

ジュンは一気に走る速度を上げ、駿馬の如く勢いで敵陣に切りかかった。

まず一人の顔面を割り、還す刃で二人目の喉笛を切り裂く。

「こ、のおおおおっ！」

背後から鉈のような剣の攻撃。ひらりとかわして、手を叩き斬り、逆袈裟に一閃。

血飛沫を上げる身体が倒れる前に、迫ってきた四人目の心臓に剣を突き立てる。

「——彼の敵の墓標となれ！」

岩でできた槍が降ってきた。

楯で逸らすように防御する。だが態勢を立て直しはじめた魔術師

たちがジュンを包囲し、一斉攻撃を始めた。

「流石に……早いな」

防御できるのはあくまでの小さな楯の範囲。ジュンは魔術攻撃をかわしつつ、聖符を取り出す。

『克肖者イエロニム、四大の聖人。彼に従う獅子の牙よ、ここに！』
剣を叩きつける。その一閃から雷撃が地を走り、まず一人を倒す。
敵を食らうように飲みこんだ雷撃は、やがてライオンのような姿に成長した。

傭兵達に動揺が走る。

攻撃の対象が雷のライオンに向かうが、ライオンはまさしく電光石火でそれをかわしつつ翻弄しつつ、次々と敵を襲う。瞬く間に七人が牙にかかり黒骸となって地に伏した。

包囲が乱れた隙にジュンは一人に切り捨てる。

だが敵はまだ半数が倒れたくらいだった。

「ジュン！」

「ちっ————『神よ、我にラザロの護りを与えよ！』」

先程の五割増しの集中砲火がジュンに降り注ぐ。聖符の防御がそれを弾くが、全方位から密に打ち寄せる攻撃がバリアーの隙間を穿った。

「——ぐ！」

「ジュン！」

「カミエ……くるな！ お前は必要ない！」

ジュンを囲む傭兵の背後にカミエはいた。

敵は驚き、そして武器を振り回す。カミエは常人離れた反射能力でそれを易々と回避するが、残っていた傭兵達が瞬く間にカミエを包囲した。

青空と同じターコイズ色のカミエの瞳が変わる。心優しい少女のものから、自身に反逆する命を容赦なく奪う血塗られた天使の瞳に。
「カミエ、やめろ！」

ジュンは駆けだそうとし、しかし負傷のためにすばやく動くこと

ができなかった。さらに彼を阻むように敵が立ちはだかる。

乱暴に剣を振り下ろすが防がれてしまう。その視線の向こうで、幾人かの傭兵がカミエに武器を向けた。

「やめろ！」

その瞬間、光が爆発し世界が白く消滅した。

立ち寄った関で刃を交え（後書き）

なんか駄目だめです。つまらなすぎてコメントも無い状況ですし。書くの止めようかな、……なんて、ありえませんが。さっさと最後まで行って、また書き直したいです。シナリオには自信があるのですが。

——独り子と誓いを交わす件——

ジュンとカミエが合流し戦っている頃、ソウジとジルコニアは関所の宿屋の前で数人の傭兵達と攻防していた。

宿屋には戦闘能力を持たない、特に宗教とも関係ない一般人もいるため二人がこうして戦っていればそれらの人を護ることになる。しかし、

「なあジルコニア、さっさとこいつら片付けないのか？」

その気になれば目の前にいる傭兵くらいならすぐに倒せるソウジが、槍を振るい相手と距離を取りながら退屈そうに言った。

「いいのよ。こうしていればジュンと合流しなくてもいいでしょ」

戦闘中で仕事口調のジルコニアが答えた。彼女は宿屋の中から持ち出した椅子に座り、ゆうゆうと輪琴デイスク・ハーフを奏でていた。

「合流したほうがいいんじゃないのか？ 違うのか？」

「違うの。私の吟遊詩人の勘が正しければ、二人を放っておいた方が面白い物語を紡ぎだせるわ」

「——はあ。左様ですか」

コーダ 詩人守護者であるソウジはジルコニアの言うことに逆らえない。

自分の身体を励ます吟遊詩人の妙なる音楽を聴きながら、ソウジは姿の見えない二人に対して思う。

——どうか何事ありませんように。

○

『黒き月の独り子』——それが振るう『混沌の光』に滅されたものは肉体を灰塵とし、精神は炎ならざる炎として燃えつつ消滅して

いく。

周囲にいた計二十二名の傭兵を一瞬で塵となさしめたカミエは、彼らの精神の残滓が燃える炎に囲まれて静かに佇んでいた。

まるで、獲物を殺しつくした猛獣が血と肉の破片の中で満足そうに己の前足を舐めるように。

「カミエエエ！」

熱を持たない炎をすり抜け美しき金髪の少女に駆け寄ったジュンは、幅広の鋼の剣の腹でカミエの頭を思いきり殴りつけた。

「——やあ！」

バギ！ 鋭い音が響きカミエは地面に倒れ伏す。

重さ一キログラムは下らない剣で殴られれば普通の女性なら頭蓋骨が割れても不思議ではなかったが、ジュンはまったく手加減せずに殴っていた。

「お前——お前、どういふつもりなんだ！ 俺は何もするなっ言った。なのに何故、お前は戦った？ そんなに人間を殺したいのか、この呪われた神の子が！ お前は……お前は……！」

憤りのあまりジュンは言葉を継ぐことができない。

それに対し、倒れたままでジュンと向き合うカミエ。殴りつけられたこめかみから血を流しつつ、カミエは精一杯の謝罪を込めた視線でジュンを見上げた。

「ごめんなさい、ジュン。でも……でも、あのままじゃジュンはきつと負けてた！ ジュンは勝てるって言ってたけど、たとえその通りになったとしてもジュンは無傷じゃすまなかった！ 私はジュンにどんな怪我もしてほしくなかった……だから……！」

「余計な御世話だ！ 俺は今までああやって戦ってきたんだ！ それに、そんなことは言い訳だろう。お前は戦いたくて仕方がなかった、そうだろう！」

「……そうかも、ううん、そのとおりだよ。でも、ジュンが駄目だ

って言うなら私は我慢できたよ。私は……本当にジュンのために戦ったんだよ。だって私は、ジュンを護ることが出来る力を持っているから」

「独善だ。お前が人間を殺す理由を、俺につくるな」

殺し、殺された傭兵達の精神が消えゆく紅い炎に囲まれ二人は向き合う。そこに誰も近づく者はいない。

カミエが立ち上がった。ジュンは少し驚き、次に距離を取り、剣を握る手に力を込めた。

「私……知らないの？」

「ああ、知らないさ。だから、俺はお前を北の聖地に送っている。処分するためにな」

「なら私……いなくなった方がいいの？」

「お前なんか……お前なんか………」

ジュンは言葉を継げず黙り込む。

戦いのさなか、二人を中心とした世界が静止する。沈黙は永遠を錯覚させ、その果てに少女は静かに言った。

「私、ジュンがそうしろっていうなら、他の教会騎士の人に封印されて北に行ってもいいよ。だって、私はジュンが好きだから。ジュンの言うことなら、本当になんでも聞くんだよ？」

泣いているのかと思ったが、彼女は泣いていなかった。

水が表面張力するコップのような危うさを感じさせつつ、彼女はそれは美しい頬笑みでジュンを見つめていた。

そして、彼女のかんばせが近づいてくる。

——『なんでも』なんて、嘘のくせに。

だがたおやかな花の両手で頬を包まれ唇で唇に触れられた瞬間、ジュンは彼女を撥ねのけず、むしろ自身からも積極性をもって唇を押し付け合った。

「いやー、熱いなあ。見せつけないでよ。僕の作戦は失敗だったかな」

「……トウヤ、やっと出てきたか。覚悟はできているんだろうな」
「ここで殺される気はないさ。ま、今度は本気で戦おうよ」

ジュンはカミエから離れ、彼女を背後におくようにして剣を構える。

対するトウヤは、この日の朝に見せたように影から剣を顕わし、小さな風切り音を立ててそれを振った。

「カミエ、手を出すなよ」

「うん。――負けないでよ、ジュン」

「負けるかよ……」

トウヤは片手で握った剣の切っ先を地面につかせながら、ぼんやりと空を見上げていた。

「影がないな……。でも夕方だし、ハンデとしてもちょうど良い感じかな」

長刀をすつと構えつつ、あくまでも穏やかな表情で彼はジュンと向き合う。

自分と同じ色の瞳に見つめられることは不満の一言に尽きたが、ジュンも挑むように塔屋から目をそらさない。

「兄さん、すっかり彼女に惚れこんでいるって感じだね。あんな風に人を殺す――いや、殺すなんて生易しいものじゃない、消してしまうのに、兄さんは平気で付き合ってる。すごいなあって感心するんだけど」

「挑発か？――お前と話すのも飽きたんだよ！」

電光石火で打ち込むジュン。長刀を持つ相手に臆することはない。というよりリーチの長いものを相手に間合いを取りすぎるのは逆に危険で、密着した状態で攻撃した方が有効なのだ。

目にもとまらぬ速さで剣を振り回し、一方の手では楯を相手の動

きに合わせて構え攻撃をされないように牽制していた。

懐に潜り込まれたトウヤの方が不利に見える。

しかし、

「！」

それは見えざる風のような速さで、

大きくバックステップしたトウヤが着地と同時に長刀を振るった。
キキィ！

黒い切っ先が楯の表面を火花を散らしながら走ると、三枚の鋼鉄を重ねた楯は表面の一枚を見事に切り裂かれた。

——朝とは動きが違うな。

「こんな恐ろしい存在、兄さんはどうして手放さないのかな？」

「だから俺が北まで連れていく、そうなんだよ！」

吼えるジュンの目前、トウヤは長刀を地面に軽く突きたてる。

戦闘を諦めたわけではない——なら、なんだ？

『黒き刃の落とす影』

彼がそういうや、無数の黒い帯のような刃がジュンに襲いかかった。

「影の刃——奪った魔剣の力を引き出したか、トウヤ！」

無数の刃を切り落としてつつジュンは前に踏み出す。

迎える長刀の刃。

一つかわして、しかし次の一步を踏み出す前に刃は折り返してくる。

「——速い」

「まだまだ！ 僕の刃は一つじゃないよ！」

目にもとまらぬ速さで舞う刃が落とす影から、さらに無数の刃が生みだされジュンを襲う。

「く——！ 『ラザロの護り』！」

透明な楯が生まれ前方から迫る攻撃をすべて防いだ。

だが攻撃は畳みかけるように続く。

——足元に冷たい予感。

足を浮かせつつ一歩下がれば、稲妻よりも速く刃が駆け抜ける。
その攻撃はそこで終わらない——ジュンは知っていた、その攻撃の形は、

「無明一刀流、影麗！」
エイレイ

地を薙ぐ一閃から、百三十五度折り返して逆袈裟に切り上げる攻撃。

前進力のある攻撃で、下手に足を浮かせて体勢を崩していればこの攻撃は避けられない。低い姿勢から跳ね上がる身体のばねの力を乗せているから、一閃の切断力も抜群。

しかも長刀がつくる影の刃も一閃に追隨して襲いかかる。

ジュンはそれらの攻撃すべてに蓋を擦るかのように楯をかざした。
「ぐ……おおおおお！」

影の刃は楯に付加された護りの術とぶつかりあいながら突き抜け、長刀の一閃は楯を叩き斬る。

ジュンの左手には無数の攻撃が突き刺さり、皮がそがれていく。

——だが、それだけだ！

『剣よ！ 神にささげし剣！ 神の騎士たる我の刃となれ！』

その瞬間、ジュンの剣が光に爆ぜた。

左手を犠牲にダメージを抑えるため、身体を独楽のように回したひどく不安定な姿勢。踏み込むことはできず、まともな攻撃は放てない状態だが、

「——は」

同等に剣の技をもつトウヤが驚くほどの速さで、ジュンの右手は

高速で伸びる。剣はジェット噴射をしているようで、ジュンの身体はその勢いに引っ張られていた。

「それが兄さんの信仰か！」

「そうだ！ 神に祈ること、人は、俺は揺るがない！」

必殺の攻撃をすれば、必然の隙が生まれる。

聖霊により加速した刃はトウヤを逃がさず、斬った。

「が——ハッ！」

左わき腹から右胸まで刃が駆け抜けた身体を押さえ、トウヤは敏捷な動きでジュンと間合いを取り刀を構える。

闘志は十分。だが、手で押さえた傷からはとめどなく血が流れ落ちていく。

「今日はここまでか……彼女も諦めるか……」

「逃がすと思うか！」

一喝と共に、ジュンが剣を地面に叩きつければ稲妻の奔流がトウヤを襲う。

何かにぶつかり、地に十字を刻むように炸裂する力。まばゆい衝撃が消えた後には、トウヤの姿も、何もなかった。

「逃げちゃったね」

「……そうか」

戦闘の終わりを見極めて近寄ってきたカミエに応え、ジュンは剣を収めた。

「——生れ故郷を焼かれ、行く宛もなく野を彷徨って『教会』に俺達は保護された。一神教の教育を受けつつ衣食住の世話を見てもらってしばらく暮らしていたが、ある日いきなりあいつはいなくなった。どうも信仰をもつことに精神が馴染まないようであるのは分かっていたが、あいつはただいなくなるだけでは飽き足らず、施設の人間の不意を襲って封印安置されていた魔剣『オブシリアン』を

奪っていった。あいつは指名手配扱いになったが、そのあとまったく消息を絶ったから死んだものとされてたが……結局あいつは魔剣と共に顔をみせたわけだ」

「兄弟が死んだと思って悲しくなかったのか？」

「……さあな。多少心配はしたが、悲しむことではなかった。それよりも故郷や親を失ったことの方が俺にはショックだったし、精神的な後ろ盾をなくした俺は信仰に心を傾けはじめていたからそのうち気にもなくなかった。――それに、正直手の焼ける奴だったから、いなくなつて清々したところもあった」

襲撃後の関所は主要な施設が破壊され混乱していたが、後処理を疎んだジュンは予定通り一晩だけ留まり、職権を振りかざし用意させた馬車で関所を後にした。しかし関所の方も施設は失ったが、人材の損失は思いのほかなかったたので特に人手が必要ということとはなかった。負傷者は手当もしていないのに傷が急速に回復するという謎の現象を受けていたためだった。

ジュンの左手を中心に負傷も癒えていた。

「もう痛くない？」

「触るなっ。お前が心配しなくても、痛みはない」

「そうだよ、ちゃんとあたしが治したからね。完全には治しきつてないけど、よほどじゃないと傷は開かないし、痛みもないはずだよ」
「ありがとうジルちゃん。私、壊すことは幾らでもできるんだけど、直すことはできないんだよね」

神の奇跡ともいわれている負傷者たちの回復は実はジルコニアが行ったもの。戦いするとき事態を傍観していたようだったジルコニアが、『音楽』を使い遠隔的に騎士達を手当てしていたのだった。

しかし、

「不愉快だ」

それがジュンの感情。

「異教徒の手によって傷を癒されるとは……。これは我々にとって

は侮辱に近いぞ」

「ジュン、ジルちゃんがジュンのことも、他のみんなのことも治してくれたんだよ。みんなに教えてないから感謝されないけど、せめてジュンくらい感謝したっていいじゃない」

「いいのいいのナナお姉ちゃん。あたしにとってはこんなこと大したことじゃないから」

「教会の連中が知ったら混乱するんだろうな……」

最後に的確な発言をしたソウジ。特に今回することなかった彼はどこかやるせない気持ちで馬車の外をみていた。

「……カミエ、いつまで俺の手を握っている？」

「うーん。ジュンの手が治るまでかな？」

ゴトゴトと揺れ続ける馬車の中。気がつけば、ソウジとジルコニアは眠ってしまったている。

何故か互いに起きているジュンとカミエ。陽気も麗らかな青空の下で、カミエに握られた手はさらに暖かい。

「――暑苦しい」

その言葉にカミエは反応しない。彼女は笑顔でいるが、青空よりもさらに蒼く澄んだ瞳にはいつもの澁刺さが見られない。

「お前は、一神教に帰依する気はないのか」

ジュンが何も言わないとカミエは何も言わない。普段はありえない状況で、沈黙に耐えられなくなったジュンは自分から話題をふつてみることにした。

『伝道師』カルキストとしての問いかけ。カミエは即答。

「ないよ。髪切りたくないから」

「――髪を切らなくてもいい」

「でも、ならないかな。なんでかって？ 別に我儘でいってるんじゃないんだよ？」

「私ね、これでも神様を恨んでるんだ。だって私何もしてないじゃ

ない。なのに生きてたら世界を滅ぼすとか、せっかく力をもったから使ったらあちこち壊れちゃうとか、碌なことないじゃない。まともにも恋もできなくて死なないといけないし。――死ぬことはいいんだよ？ 前から言ってるけど、変な力を持つちゃったことはもう認めるしかないし、このまま生き続ける気にもならないし、だったら死ぬしかないよねって感じで。でも、この力さえなければ私は死ななくていい、普通に恋をして、子供作って死ねる」

言い終わるとカミエはジュンにキスをした。

「――いきなり口付するな」

えへへ、と笑うカミエ。その手はいまだジュンの手を包んでいる。彼女のぬくもり、彼女のおい、彼女の声と息づかい――密かに意識しつつ、ジュンは言った。

「お前は、何だ？」

「私は、私だよ」

「人間か？ 化け物か？」

「そんなの、わかんないよ。私は人間でいるにはもう全然違う存在だし、でも化け物にはなりたくないもん」

「人間でいろ、カミエ」

え？ とカミエは眼を見開いて驚きを表現する。

対するジュンは、どこまでも真剣なような、照れるような渋面で話し続ける。

「神を信仰する必要はない。聖女である必要などどこにもない。だが、人間でいろ。化け物でありたくないのなら、人を殺めるな、たとえ俺のためでも、誰のためでも、誰かのために戦う誰かを殺すな。さもなければ、俺がお前を愛することなどないと思え」

「脅しかあ……」

カミエは若干途方に暮れるような調子で言った。――実際、そのとおりだった。

「でも、わかったよ。私は、七那瀬・神恵は人間。七那瀬・命と聡亮の娘は死ぬまで人間だよ」

「――その言葉、神の騎士である俺が神の名の下に聞いておく」

傷ついた手を包む彼女の温もり。

これが人間のものではないはずがないと、
平和に晴れた空の下で彼は思うのだった。

—— 独り子と誓いを交わす件」 (後書き)

ま、とりあえず次の話も書いてます。

これまで山続きだったので、次は海で水着！
です。

チャット#4

「うわー、今日暑くねえジュンよお? (奏治)」

「確かに日差しは強いな。しかし騒ぐことではない (盾)」

「お前が騒いでいるところを見てみたいよ」

「……コソコソ…… (神恵)」

「(ん? カミエは何を……) (奏治)」

「ペロッ」

「うわ! (盾)」

「あははははは、ジュン驚いた! (神恵)」

「おおまええ! このくそ暑い時に人の首筋舐めるとかさらに暑苦しいまねしてんじゃねえよ!」

「「うわージュンがキレた (神恵&奏治)」」

「やっぱり暑いんじゃないか」

「んだと!?!」

「ジュンお兄ちゃん口調が俗っぽくなってる。いつつもは怒っても気取った感じが残っているのね。——よっぽど頭に血が上ってるんだ (ジルコニア)」

「本当だな。あいつは怒っても口調が乱れないんだけどな」

「それにしても暑いねー。私たち北に向かって歩いてるんだからちよつとずつでも涼しくなる気がするんだけど、どうも暑くなってるばかりだよ? そういえば、どうして北の方が涼しいのかな? (神恵)」

「え? 南が暑いからじゃないのか? いや待てよ、俺達の世界は平らで四角いちょうど正方形くらいだと言われているな。太陽は世界の真ん中の線を東から西に回っているから、そう考えると暑いのは世界の北端と南端の中間の線上で、それより南に行けば涼しいのか?」

「ソウジお兄ちゃんひょっとして馬鹿だったの? 赤道も知らない

みたいね」

「ば、馬鹿！？（奏治）」

「うわあ。こんなコードと旅していたなんて、吟遊詩人史に残る赤っ恥だあ」

「――あ、ソウジが沈んだ。でもそしたら、私達はまだ世界の半分を越えていないってことかな？（神恵）」

「お前、自分がどこ歩いているかも知らないみたいだな（盾）」

「うん、全然わかんない。教えてジュン」

「いいか？　まずこの世界には七の大きな島がある。俺達が今いるのは七の中でも一番広大なアルギリアド大陸で、その北端、ガズニ半島にいる。この大陸は周辺を山脈で囲まれていて、だから海に近づくに従って山道を歩く破目になるということだ。ここの山道を越えるとエスタード港に着き、そこから対岸のウマイヤ港、世界中心大陸であるホラーサーン大陸に到着し、その中心の神聖都市・大ファティマに向かうのがとりあえずの進路だ。アルギリアド大陸は赤道の南にあり下の方は寒い。ホラーサーン大陸は赤道が横切っているからそこに近づくほどに気候は熱帯になる。」

国でいえばこころへんはサーディク神聖帝国の領地だ。サーディクはこのアルギリアド大陸ではガズニ半島を中心とした四半分を、ホラーサーン大陸ではそのほとんどを握っている強力な国で、諸国の中で一番一神教が広められ信仰されている。神の加護を得て、国同士の戦争で教会騎士が参戦するのが認められているのもこの国だけだ。またアルギリアド大陸にある他の二国はサーディク帝国の友好国であり国境を越える際にも特に俺のような教会騎士ならほとんど自由に行き来できる。ソウジとジルコニアと会ったのはサーディクの南にあるアルボラン公国の街だな。

国教として一神教が定められているが強制されているわけではなから無信仰、または他の信仰を持つ者も少数だが存在している。

しかし国全体に伝わる慣習には一神教に由来する者が多く、一神教徒でなくともその観衆には従っている。例えば料理でいえば生のはほとんど食べられない。ホラーサーン大陸は砂漠がほとんどで砂塵や日射を防ぐためにフードを男も女もよく被るが、これも一神教の教えに則し華美なものは避けられる。語彙の中にも神に関する言葉が見受けられる、などだ。

最高権力者には壺津^{いづ}の家系から選ばれるが、選考は前王や大臣ではなく一神教の最高指導者である法王^{ラッパル}が国政から独立した立場で選出する。その基準はもちろん神への信仰心を第一とした指導者としての適正であり、選ばれた王は折にあっては法王に助言を求めることもある。基本的には一神教は政治から一つ引いた立場であるのだが、このサーディク神聖帝国においては他国に比べて積極的な介入が認められそのため神の加護を得た国とされる。とは言っても国政に関する命令に一神教徒が必ずしも従う必要はないとも認められているんだ。

さきほども言ったがこれから向かうホラーサーン大陸は砂漠に覆われ、年中暑く乾燥した気候になっている。せいぜい倒れないようにしろよ」

「はいはい、質問！ サーディクの特産品は？（神恵）」

「お前が言うのは食いものか？ 食品なら香辛料とそれらを使った料理だろうな。それよりも芸術がどの国よりも発達しているから、建物や細密画などは見ておくべきものだ。神聖都市大ファティマのガンドルフォ大聖堂はそれら芸術の粋を集めて作られているから見れば一生の記憶となるだろう。陽に輝く黄金の尖塔、穢れなき白亜の外壁……ああ、思い出しただけで素晴らしいな」

「一人で悦に入っているぜ（奏治）」

「こういうところは筋金入りだからね（ジルコニア）」

「んー、私も行くのかぁ。あんまり教会とかそういうところは行き

たくないつていうか入れないつて言うか。――そ、そういえばエスタードといえば海水浴場だよね！ 海で遊べる！（神恵）」

「お、海か。そうだな楽しみだな（奏治）」

「……遊ばせなければならぬのか……船の運航しただいな」

チャット#4 (後書き)

読者数少なくてピンチです。このままなら辞めるかもです。
応援して下さい！

act 5 「海辺に寄った一行が騎士を

Q・あなたとジルコニアとの続柄は？

「え、えと、なんだろうな……」

あ、そんなところ触らないでっ。俺は妹だと思ってるんだけど向こうはそうじゃないんだよっ」

Q・あなたはジルコニアを妹だと思う理由は？

「な、なんとなく？」

あ、はい有体に答えます！ 俺が十歳まで家にいた時は俺以外に子どもなんかいなくて、でも夢で見たんだよ、生まれたばかりの妹が連れ去られる夢——そう、記憶みたいな、忘れていたというか封印されていた記憶が垣間見えたような感じで。お袋が泣いて、赤ん坊の妹が叫んで、親父が怒鳴っていたけどそのうち変な音楽が聞こえ始めてみんなが眠ってしまう——そんな夢なんだ。

はじめてその夢を見たのは七歳くらいで、そのあとも何度か見たんだよ。何かの思い込みかと思ったけどそれじゃ納得できなくて、親に聞いたけどもちろん知らないって言われて、結局納得できなくて十二歳で旅に出たんだ。旅に出る前に槍術を習ったりして力をつけてな。世界中回って、あいつと出会ったのは二十歳の時、旅に出て八年後で今から一年と少し前くらいだよな。夢ではあまり顔とかは判らなくて、でも顔を見た時はなんとなくこいつが俺の妹だってわかったよ。顔の作りも似てるし……まあ、あとは勘だけだ。

その時十歳だったあいつは吟遊詩人としては旅に出だしたばかりなのに、すでにどんな吟遊詩人に勝るとも劣らない技術を持っていた。街中で、多くの人に囲まれて音楽を奏でるあいつを見たとき居ても立ってもいられなくなって、その人垣をかき分けてあいつに声をかけた。

なんて声をかけたものか迷ったけど、結局そのままあいつが俺の妹

じゃないかって言った。

あいつはその瞬間すごく嫌そうな顔をした。吟遊詩人には家族はいない、いらぬ。生んでくれた親はいるはずだけどその記憶は抹消されているはずだし、その兄弟も同様。だから俺の考えは単なる思い込みだってあいつは言った。

でも俺がそこで食い下がったらあいつは俺に詩人守護者ゴードになれって言った。断る理由はなかったから、俺はあいつと契約してそれ以来ずっと旅してる」

Q・吟遊詩人とはどのように生まれるの？

「さあ……なんか一年に五人くらいずつ、その年に世界中で生まれる赤ん坊の中から才能のありそうな赤ん坊を選んで攫って来るらしい。そのとき家族の記憶からは赤ん坊のことを消す。だから吟遊詩人は天涯孤独として育つらしい。

え？　なんでそんなことするのかって？　知らねえな……って、くすぐるなカミエ！　知らないものは知らないって……！」

「カミエ、それくらいにしろ」

「あ、やっとジュンが話しかけてくれた。もうこのまま無視されたい行くとこまで行っちゃうところだったよ？」

「……お前がそれでいいなら、俺が相手にするわけないだろう……」

「え？　ジュン、聞こえないよ？」

「……………」

「おわ！　いきなり剣を抜くなジュン！　俺は何も悪くない！」

ギシ、と椅子を軋ませ若き騎士は不機嫌に座りこむ。

二つベットの部屋の中、ソウジに割り振られたベッドの上ではカミエがソウジの上に覆いかぶさっている。何かなまめかしい行為に及んでいるわけではなく、ただ雨で退屈したカミエがソウジを尋問

してただけだ。

その尋問の内容は先に記したとおり。ジュンは傍で見ていたので事情は理解しているが、自分の護送する金髪の美少女の行為にやはり呆れるような苛々するような落ち着かない気持ちを抱いていた。

「でも……ジルちゃんは兄弟がいらないのかな？ ソウジみたいのがいるんなら嬉しいと思うんだけど」

「その言葉で俺は報われるよ。――けどよ、兄貴がいると言うこと聞かないとならないっていうか兄貴を立てないといけないっていうかそんなこともあるし、あとあいつは吟遊詩人として、すべての物を事を音楽として記録する者として必要以上に情けを持たないようにしている部分もあるから、兄弟がいると邪魔なんだろうな」

「ジルちゃんって仕事熱心だね。仕事に生きてるって感じ。お、ジュンに似てる！ そういえばジュンもトウヤのことを嫌がってたよね」

「別に……俺は仕事のためにあいつを拒絶したことはない。お前も見ただろう？ あいつは性格的に問題があるんだよ」

「うーん。兄弟がいると面倒なことも多いんだね。ソウジはジルちゃん以外に兄弟はいないの？」

「いない、とソウジは答える。」

「そっか、とカミエは空いているジュンのベッドに倒れこむ。」

そこで呟く、「暇だなー」の一言。ソウジも同意する天候は雨で出かけられない、出かけられないということもなくジルコニアは雨具をつけて何処となりと行ってしまったが、カミエとソウジはわざわざ旅の宿を取ってまで雨の中出歩きたくない気分で、為す術なくつきまとう退屈と共にベッドの上で転がっていた。――ちなみにジュンは啓典を読んでいて特に暇を持て余している様子ではない。

そして二人は退屈以上の落ち込んだ気分を味わっていた。

「明日は晴れるよね？ 明日晴れなきゃ海で泳げないでわたし死んじゃうよ？」

「そうだよな、せっかく海辺に来てるって言うのに泳げないってな

いよな。どうせ、明後日には絶対に出る船に乗るつもりなんだろうジューン？」

「あたりまえだ。海水浴など俺の知った事ではない」

「うう、雨降ってても明日は泳ごうかな？ 私は風邪ひいたりはないからね。――そういえば、ソウジは今まで海で泳いだことあるの？」

「前の夏にジルコニアと泳いだぞ。ちょうど俺達が乗る船の着く街の海岸だったが、あんまり水が温かくなって楽しくなかったな。ていうか、海で遊びたいって言ったのはあいつなんだがすぐに飽きて、俺は思う存分泳げなかったんだよ」

「ジルちゃんって運動するの好きなのかな？ あんまりそうじゃない感じだよな？」

「ああ、好奇心は強いけど身体を動かすのは嫌いだな、あいつは。俺は身体を動かすのは好きだが頭を使うのは嫌いで、ま、兄妹対照って感じだよな」

「明日晴れるといいなー」

そしてカミエは瞼を閉じる。

少女が微かで慎ましげな寝息をたて始めるころ部屋の中で話す者はなく、書物のページをめくる音と、単調な雨音だけが部屋に響いていた。

「初めての海ー！」

「よっしゃー、泳ぐぞー！」

「いっくぞー！」

「待ってよー、お兄ちゃんお姉ちゃんー！」

——馬鹿共が。

太陽を真っ白に照り返す砂浜を水着姿の三人が走っていくのをジュンは冷めた目で見送った。彼は炎天下の中でも武装した姿で砂浜の上に座りこんでいる。

雨が降った前日と打って変わって突き抜けるような晴天。雲ひとつなく澄み切ったターコイズブルー。真珠を振りまいたような砂浜には四人だけではもちろんなく、他の一般人もたくさんいる。

宿屋で水着の貸し出しを行っていた。肌触りのよい特製の防水布でつくられ色も鮮やかな水着だ。三人が借りた水着は、ソウジが蛍光緑のトランクス型、ジルコニアは桃白の横縞が入ったセパレーツ、そしてカミエはスカイブルーが輝くフリル付きのビキニ。カミエの白い素肌が真珠のごとく輝くのをジュンは凝視したりは……しなかった。しなかったと本人は主張する。

「ほらほら、俯いてないでお姉ちゃんの水着姿よく見なよ」

「——！」

何故かジルコニアが戻ってきていた。小麦色の肌に水滴はなく、泳いで戻ってきたというわけではなさそうだ。

いつもはぶかぶかの服を好んで着ていて雰囲気もどこか大人びているジルコニアだが、こうして水着という防御力の低い服を着ていると彼女が小さな少女にすぎないことがよくわかる。普段は帽子で隠されている黒い短髪は黒金のごとく輝く。新鮮——いや、珍しい光景だとジュンは思った。

「やっぱりお姉ちゃん、ちょっと胸が小さいよね。パッドでも入れたほうがいいのかな……」

あいつはあれぐらいで良い、とかなんとか答えそうになる自分をジュンはぐっと抑える。

「何故ここにいる？」

「えー。だって二人ともいきなり海に飛び込むんだもん」

言われて見てみると、ソウジとカミエはイルカよろしく元気いっぱい浅瀬を泳ぎ回っている。

「泳げないんだな」

「お、泳げるし！　ちゃんと浮くもん！」

「おいこらー！　お前の妹ここで拗ねているぞー！　――ぶっ！」

「な、何いつてるのよジュンお兄ちゃん。あたし拗ねてないし誰の妹でもないし！」

ジルコニアの渾身の力で蹴り飛ばされたジュン。背後からとはいえ受け流しもできず転がった彼も、やはり開放的なビーチの空気に影響されて気分が緩んでいるのかもしれない。

「おーなんだなんだ」と一度の呼びかけで反応して海から上がってくるソウジ。遅しい肉体が水に濡れてギリリと照る。

「あーそうかそうか。お前泳げないんだっけ――って、いきなり股間ねらうな！」

「あたし泳げるし！」

「はいはい！　泳ぐのが嫌いなだけです！　じゃあビーチバレーでもするか？」

若干ご機嫌な斜めのジルコニアを見事にあしらい連れて行くソウジ。その姿はやはり兄と妹にしか見えない。

――どうでもいいことだが。

砂浜を管理しているテントからポールとネット、それにボールを持って来てソウジが中心に手際よく準備する。

ポン、ポン、と小気味良い音を立ててビーチバレーが始まる。ソウジとジルコニアがペア、カミエは一人で二人を相手にするが『黒き月の独り子』としての能力か二人がかりの攻撃にも余裕で応対。ポニーテールに結んだカミエの髪が軽やかに跳ねるのに十秒ほどジュンは視線を取られてしまった。

――何故ここにいるのだったか？

三人の見張り……というわけだろうか？　いつもは三人がどこにしようときほど気にしていないのだが、……ああ、そうだ。昨日も部屋に籠っていたから今日は外出しようと思い……

ならここに座っている必要もない、とジュンは結論して立ち上が

る。どこかで素振りでもしてこよう。

海岸から少し歩いたところに木立があり、すずやかな木陰のあるそこで稽古をしようとジュンは踏み入る。

「あ、誰か来るよ」

「むむ、せっかく良いところだったのに」

二人の若い女――少女と呼べる二人が姿を現した。二人とも水着姿、ここに涼みに来たのだろうか。一人はジュンと同じくらいの長身で、引きしまった身体に黒いワンピース水着を身に着けた姿はイルカのような曲線美が際立っていた。

もう一人の方が強くジュンの目を引いた。背丈は女性として標準、カミエより少し高いくらい。髪が膝裏まで届くくらいに長く真紅で、それと同じ色のビキニに隠された胸は高々と突き出ている。肌の色は抜けるような白、バストと対照的にウエストラインはきゅっと締まりピップはまた軽く突き出ている。理想的な女のラインだとジュンは思った。

「あら、何か用かしら？」

その真紅の女が話しかけてくる。瓜実顔に二つ輝く賢明そうな双眸も紅玉色で、それがまたジュンの注目を惹きつける。

――淫蕩は禁じられているのだったか。

特に相手が異教徒の場合は。一神教徒であるなら水着姿でふらふらすることはないだろう、しかしこの女を見す見す逃すのは惜しいと若い男性の本能に揺さぶられてジュンは考える。

どうやって話しかけようかと逡巡しつつジュンは彼女達と六歩ほど離れた位置まで近づいた。

「具合でも悪いのか？」

「どうしてそう思うの？」

「ここは虫が多い。水着姿で来るには適さない場所だろうということとは分かるだろうし、それでも来ているということは何か事情があ

るのだろうか」

「ふーん、で、あなたはその事情を言ったら手を貸してくれるのかしら」

「異教徒に助力するのはあまり褒められたことではないが、困っているものがいたら手を貸すのが騎士というものだ」

「異教徒だなんて、この真夏のビーチでそんなことは考えっこなしだわ。あなたこそ、そんなマントをつけてこの太陽の下をうらうらしているのは可笑いいわ」

女が歩みよって来る。ジュンはこのとき警戒していなかったが、それにしても紅い女は相手に反応を許さない不思議な動作で彼に近づき、彼の両肩に手を伸ばした。

「ほら、すずしくならない？」

間近で聞く女の声は若干ハスキーで、甘くどろりと耳朶に流れ込んできた。

「邪念が多そうだわ。それでも神に仕える騎士なのかしら？」

「お前がマントを脱がしてしまったからな」

女の顔が近づいてくる。

キスされるのかと思ったが、違った。否、女は彼の唇には口をつけなかったが、その代りに首筋に口をつけた。

甘美な電流が脳を駆け巡る——と思った瞬間！

ざくりと首筋に、その血管に刺さる痛みを感じた。

「か……あ………」

（痛い？ 大丈夫よ、殺しはしないわ）

脳の中に、血液を伝わって聴こえてくる声。

ぞろり、と血を吸われる感覚。吸血鬼かと不快感とともに思うと同時に、えもいえぬ快感も同時に覚えた。

——なんにしても、情けないな。

女の色香に惑われたことを後悔するジュンの意識。しかしその思いもすぐに闇の中へ無抵抗に引きずり込まれていった。

act 5 「海辺に寄った一行が騎士を（後書き）」

今日は暑いです。もう何年も泳いでいません。

―― 抜きにして遊ぶ間に襲われ

「あの二人はうまくやってくるのかな？」

「それほど難しい任務は与えていない。あれらなら容易く戻ってくるだろう」

少年とそれより一世代上ほどの男性が向かい合って紫のベルベットのソファ―に座っている。黒大理石の壁に囲まれた冷たく薄暗い印象の部屋、真っ白な炎を灯す燭台とそれに照らされるクリスタルのテーブルだけが薄暗い空間の中で浮き上がっている。

「でも雇い主さんがあの二人に兄さんの暗殺の命令を与えないで良かった。あの二人、特に楓さんの方が兄さんを誘惑した上で仕掛けたら、普段宗教だのなんだの欲求不満な兄さんはころりとやられそうだからね。――本当、確率高い」

「……」

「とはいっても殺しに行くとなるとどんなに隠しても殺意みたいなものは出てしまうわけで、それを感じられないほど兄さんは甘くはないからね。ま、これで計画通りにいけば兄さんは少し血を取られて、でも嵌められたことで頭に血を上らせることになる。その時に兄さんと戦ったらこの間よりもっと面白いことになるかな？」

「……」

「七那瀬さんにも可哀そうだね。大好きな兄さんは巨乳女にしてやられてどっか見えない場所で転がってるんだから。ああ、こうして兄さんを誰か違う女性が落として七那瀬さんと離せばいいんじゃないかな？　って、冗談だけど。兄さんは若いから一時の気の揺らぎは生まれるだろうけど、根っ子では一途だからね。どちらかといえば、七那瀬さんにはからかわれるだろうけど兄さんが七那瀬さんに向ける思いはちょっと強くなるくらいだろうね。やっぱり兄さん

と七那瀬さんを引き離すには、誰かが強引に攫ってしまるのが良いんだろうね。それは僕の役目じゃないのかな？　そうだね、僕は女の子を攫うよりも誰かを倒す――殺す方が向いてるし。ああ、早く兄さんと本当の意味で戦いたいよ」

「……」

「でも七那瀬さんも魅力がないわけではないね。雇い主さんも見ましたよね、彼女が戦う時の表情ときたら最高じゃないですか。やっぱり生まれ故郷を焼きつくした神の子は他の女性とは比べることすら愚かなくらいの価値を持っている。いやいや、そもそも女として見ることで自体だめですね。まさしく天使、珍しい鳥みたいな感じで、鳥籠に入れて鑑賞したいです」

魔術師キキヨウが黙々とワインを飲んでいるのを前に、トウヤはひたすら話し続けていた。

○

「ジルちゃんもうやらないの？　……二人でビーチバレーはない気がするんだけど」

「泳いで来ればいいじゃない」

「お前目を放したらどっか行っちゃまうだろう」

「駄目なの？」

「うーん、駄目かな？　寂しいじゃない」

「ジュンお兄ちゃんはいないけど」

「うわ！　いつの間に……。駄目、駄目だよジルちゃん。子供のうちからそんな運動を嫌がってはいけません！　ソウジお兄ちゃんを見習いなさい」

「子供じゃないしっ。ソウジお兄ちゃんは血族じゃないし」

「むむう。これは意地でもビーチバレーをし続けなければならないか……」

カミエが難しい顔をして唸り、ソウジは諦めたような困ったような顔で青く光る水平線を見やっていたとき。

着ている水着の色から背丈、身体つきまで対照的ともいえる二人の女が現れソウジの目を、カミエの目をジルコニアの目も……要するに一同の目をその二人は奪った。

女性としての魅力を最大限に引き出した紅い水着の女が第一に人目を惹いていたわけだが、もう一人の方も注目に値した。競泳でもやりそうなワンピースの黒い水着の長身の女は研ぎ澄まされた刃のような美しさがあつた。

——うらやましい。

カミエが思う。二人のうちどちらかの魅力が自分にもあつたらジユンの振る舞いもまた変わるだろうか、そのような思考に頭を大きく取られた。

「ビーチバレーか。私達だけじゃなくてヨウコとかアオイとかも来てたら四人でやれたのにね」

黒い水着の女がちらりとカミエ達を見て、となりの女に話しかけた。

「あんたは泳ぐのが好きだと思っていたわ」

「泳ぐのもいいし、それ以外でもオツケイ。チエはどうなの？」

「私はもちろん……マキがやるなら付き合ってあげるわよ」

紅い水着の女——チエはマキを見上げ笑顔を見せる。

それに応えマキも嬉しそうに笑い返す。そして泳ぐことにしたのか、チエに先だって波打ち際まで歩きはじめた。

「ちょっと待ってお姉ちゃんたち。ビーチバレーをしたいならあかし達とやらない？」

ジルコニアが二人に声をかけたことにソウジとカミエは「お？」
と思った。二人ともチエとマキの会話は聞いていたが、とくに声を
かけようとは思わなかったからだ。

「あら、誘ってくれるの？」

「チエ変な言い方。——良いの？ 私達が入ると五人で三対二とか
になってしまふよ」

「大丈夫大丈夫。うちの二人は体育会系で元気持てあましてるから
持て余している——その言葉に若干傷つく二人。そして面子の中
で一番年若のお前はどうかなのよ、とか密かに思ってしまう。」

「そちらの人、本当に良いのかしら？」

チエが視線を向けるのはソウジだった。

「あ、ああ、構わないっていうかむしろ大歓迎だよ。ていうかその
ちっこい奴が抜けだがつて困ってたんだよ」

「ちっこいとか——言うなあ！」

「ぐお！」

ジルコニアのとび蹴りが突き刺さり打倒されるソウジだった。

一方のコートにソウジとカミエ。

もう一方のコートにはチエとマキ。

「おい、ジルコニアやらないのか？」

「あたしは審判。やっぱり吟遊詩人は見ているのがスタイルだよね」
その言葉に苦笑したのは四人の全員だった。

「あ、まだお互いの名前とかしらなくない？」

「言いだしたのはカミエ。コートに入った時点で闘志を漲らせてい
たが始めようとした直前で気が付き、フレンドリーなスマイルを見
せた。」

「私は七那瀬・神恵。十五歳、片思いしながら北へ旅しているの。
よろしくね♪ ——次、ソウジ」

「お、俺は織深・奏治。……詩人守護者でいま審判している奴に連

れまわされてカミエともう一人と一緒に旅している」

「私は楓・千重というわ。こう見えて吸血鬼なの……てね？」

「チエ、そんなこと言っているの？　――あ、私は万希、竜胆・万希ね。ここにはちよつと仕事で立ち寄ったの」

「仕事？　どんなの？」

「ほらマキの方こそまずいこと言ってるんじゃない？　――ああ、違うの。別に秘密ってわけじゃないわ。私達は……モンスター退治に来ているの」

「モンスター？　すっげえなあ、冒険家なんだな」

「そうかな……やだ、女の子として変なこと言っていないかな私……」

「あんたが振った話でしょ。――ま、これくらいにして、とりあえず始めない？　陽の光の下でじっとしているのは苦手だわ」

そこでネットの両側に軽い緊張が走る。

じゃんけんをし、先攻はソウジ・カミエペア。審判のジルコニアからやる気なく投げ込まれたボールをソウジがまず受け取り、フリーゾーンへ立つ。

ネットの高さは女子公式ルールに則り二・二四メートル。一人だけの男子であるソウジには優位な高さを意識しつつ、オーバーハンドの構えで鋭く、

撃った！

「！」

アンダーで受けたのはマキ。電光石火の球を冷静に拾い上げ、ネット際で待つチエにパス。

チエは相方の身長を意識した高いトス。三手目のスパイクはまさしく天上から降り注ぐ稲妻の如く！

「――甘いよ！」

そこでカミエは点を取らせなかった。驚異的な速さで落ちてくるボールを素早く拾う。オーバーヘッドで後方に送られた球をソウジは相手のネット際を見下ろして打ち返した。

「イン！」

「やったねソウジ！」 「ああ、うまくいったな」

「やるわね……」 「本気で行く、チエ？」

左右のコートに更なる緊張が漲った。

続く二点目はカミエのスパイクで決まる。しかし三点目ではチエがブロックしカミエがネットに突っ込んだ時点でアウト。

抜きつ抜かれつ……取りつ取られつの接戦が繰り広げられる。詩人守護者ではあるが肉体的には普通の人間であるソウジが本気なのはもちろんだが、もはや「黒き月の独り子」としての本気となり反則的な能力を解放し始めたカミエ。しかし相手はついて来ていた。人智を超えたハイパープレーが繰り広げられ始めた真剣勝負にはいつしか観客までつき、最終局面である第三セット時にはコートの周囲を人垣がぐるりと囲んでいた。

そしてタイブレークで迎えた最終局面。サーブ権を持つのはマキ。

「……………」

ポン……と撃つ弾は遥か高みに、天井がないからできるスカイサーブだった。

「――カミエ！」

「うん！」

スカイサーブは風に流されやすいから難しい技であるが、ソウジはこの瞬間の風の強さや打ち出された角度から打ち出されたボールがインすることを見切りカミエに指示を出した。

手加減なしのカミエはもはや独り子としての能力全開で、太陽光で本来見えないはずの球の位置を微かな風の音と初速度と角度などでおこなう綿密な計算による弾道予測だけでとらえ、

高く跳躍し球を相手コートに叩きこむ！

「ブロックよ！」

バシン、と返されるボールはまっすぐソウジに。

早い球だったがソウジはしっかり反応した。カミエに向けてトス、

十秒前に全力のスパイクを打ったばかりの彼女だがこれまた強烈なスパイクを打ちだす。

「！」

それを迎えたマキのブロック。ボールを挟んで二人の女の手がせめぎ合い――

「てえええやあ！」

――その瞬間、ソウジはカミエの背中に翅の残滓のような光が見えた気がした。

押し切ったのはカミエ、ボールは砂地にめり込み、跳ねあがったときには黒い跡を残して海に飛び込んで行った。

「ああボールが……借り物だから回収しなければ……。ていうか、そっち大丈夫か？」

ソウジはマキの手首を氣遣う。

見れば小麦色の手首はうっすらと蒼くなっていた。

「ご、ごめん。私本気でやっちゃって……」

謝るカミエ。驚いた顔だが笑いの欠片はあるし、どこまで自分の「本気」というものを理解しているのかは謎だとソウジは思った。

大丈夫大丈夫、と答えるのはチエ。

「マキ、あんまり大げさな顔しないの」

「うん。大丈夫だよ――っつ」

「本当に大丈夫か？ 早く冷やさないと……いや、ジルコニアに治させるか」

「ううん。ほらこうすれば……」

と、チエはマキの手首に口付けした。

びっくりして硬直したカミエの目の前で、チュ、と音を立てて離れた唇のあとにはキスマークまでついていた。

「はわわわああ」

「あら、こういうのは新鮮だったかしら？」

「チエ、あんまり人様の前で悪ふざけしないの」

マキの負傷により（すでに治療されたみたいであるが）ビーチバレーの決着はつかないまま、五人はビーチパラソルの下でくつろぎ始めた。どうやら体力を余していると言われていたカミエもソウジも満足したようで、果物のジュースをおいしそうに飲んでいた。

「それにしてもジュンは何処に行っちゃったんだろう……」

ぼんやりと呟いたカミエ。先ほどから独り子の能力として持つ優れた聴覚を研ぎ澄ましてジュンを探しているが、まるで気配というものを感じられない。

「どうかしたの？」

チエがすり寄るように近寄ってきた。やわらかい肉が作る深い谷間、汗を浮かべた白い肌の艶めかしさにカミエはわずかにたじろいだ。

「う、うん。一緒に来ている人が見当たらなくて。……チエは知らないかな？ この炎天下でマントとか鎧とか着てる若い男の子なんだけど」

「そんな感じの人なら、向こうのほうの木立に入っていたわよ」

「そう？　じゃあ見てこようかな」

そう言って立ち上がったカミエの手はチエに掴まれた。

中腰のままカミエが見下ろしたチエの居姿。長い真紅の髪を今はほどき、地面にぞろりと流し三角座りしてマキはカミエに妖しい笑顔を見せていた。

「な、なにな……」

「彼、せっかくビーチに来たって言うのに水着にならないで難しい顔していたのよ？　あなたはわざわざ捜しに行かないで、私達と遊んでいれば良いと思うわ」

「でも……私の好きな人だから」

ふうん、と唇を尖らせたチエ。納得した様子はなく、ぐいと手を引いてカミエを座らせてしまった。

「恋しているのね……素敵だわ」

そう囁くチエの顔はあまりにカミエと接近している。――キスするくらいに。

私もこれくらいジュンに迫れたら良いのに、そう思うカミエの心臓は狂ったように早まっていた。

「恋するあなたの血はどんな味がするのかしら。ねえ、綺麗な金の髪のカミエ？」

「わ、わたしなんかぜんぜんきれいじゃないよ。胸も小さい……ぜんぜんジュンはわたしのこと見てくれないもの」

「そうかしら？ 肌は綺麗だし、口も、鼻も、青空と同じターコイズブルーの瞳だって私は好きだわ」

チエの口調は口説き落とすようなそれで、

眩暈を覚えるくらいに混乱し始めたカミエの胸の上に彼女の手が乗せられたときには、脳に走る微弱な電流さえ感じてしまった。

「チ、チエはマキのことが好きなんじゃないの……」

「ふふ……可愛いわ」

逃げるように言葉を振り絞ったカミエの首筋にチエの唇が、

「アッ……」

そして、カプツとという感覚と共に、

柔肌に食い込む白い牙。

その時ソウジとジルコニア、それにマキは少し離れたところのパラソルの下にいた。

ソウジとマキは何か通じ合うところがあるらしく、それぞれの旅や冒険の話をして盛り上がっていた。その話し方は吟遊詩人のジルコニアからしてみれば何も面白くも無い技巧も何もない、幼稚な語り口調であったが、二人はすっかり意気投合といった感じで、そうして元気にしているソウジを見るのはジルコニアの心情にとって悪いものではなかった。

そのようにただ黙ってソウジのことを観察しているジルコニアにマキがふと気がつき、まじまじと彼女を観察してみた。

「な、何……？」

「そんな気持ち悪そうにしないで……。顔、そっくりだなあと思つて。兄弟なんだっけ？」

「違う」

そうなの？ とマキはソウジに視線を向ける。そうらしいと彼は答える。

しかしマキは納得しない。鋼のような黒い髪、意志の強そうな鳶色の瞳。肌は夏の海岸によく映える褐色で、体格はもちろん違うが筋肉質で細めな足や低い鼻など共通点がなかなか多い。

「ぼ、帽子ないかな……」

急に帽子を探し始めたジルコニア。――そう、彼女はいつも幅広の帽子をかぶり手首などが見えないぶかぶかの服装をしているから他人から気づかれづらいが、無防備に並んでいればほとんどの人が兄弟だと思ふくらいにソウジと似ていた。――ちなみにこの日海岸に出ている間だけで五回以上、ジルコニアに使いつぱしりにされてジュースやかき氷の類を買うときなどにソウジは「可愛い妹さんですわね」のような言葉を頂戴している。

「どうしてこの子の守護者になったの？」

今話していたなかでは、ソウジはその話をマキにしていない。ジルコニアが嫌がるからだ。特に理由を口にしたときには。だからこのときも答えて良いものか（ジルコニアがいなければ迷わず答えていた）首をひねってみると、

「言えばいいじゃない。『俺の妹だと思ったから』って」 と棘のある言葉。

そこですっかり話を聞く体勢になったマキにソウジは一連の話を聞かせた。

「ふーん。そうなんだ。じゃあソウジは『妹だと思われる子』のそばにはいられるようにはなったけど、本当に兄弟になれたわけではないのね。——でも、ジルコニアはソウジのことをお兄さんだと思っ
てはいないけど、守護者には選んだんだよね。それはソウジの兄弟とかは抜きにして信じているってことだよね」

「……知っているんだ。あたしたち吟遊詩人のこと、多少は」

肯くマキ。しかし彼女はそれが具体的にどうということかは語らず、首をかしげてジルコニアの発言を促した。

ジルコニアは語る。水着姿で語るその姿は無防備で、弱々しく、いつも強気に見せている彼女が年相応の女の子だとソウジに思わせた。

「信じてるよ。はじめて会った時はびっくりしたけど、ソウジお兄ちゃんが信じられる人だっていうのは分かった。吟遊詩人として……うん、そういうのは抜きにしても。別にそれは血のつながりのせいとかじゃなくて……ただ『妹がいる』という寝るときに見る夢を信じて旅に出てあたしのところまで来た、その……その……馬鹿さ加減って言うか」

「はあ？ ジルコニアー、あんまり人のこと馬鹿馬鹿——」 「ソウジ黙って」

マキが黙らせた。

しかしジルコニアは俯いていた頭をあげ、もう語ることはないと言った。彼女の笑顔は大人びた寂しげな、どこか恥ずかしげな笑みで子供らしくはなかったけど、ソウジは可愛いと思う。やはりこの子供こそが自分の護るべき存在だと。

「——良いよね。そうやって支え合って、信じあって生きているっていうのは」

「お前だってチエとそういう関係なんだろう？」

うん、と肯いたマキの頭の向こう、チエのいるパラソルの下を見て――ソウジは驚愕した。

「な!？」

カミエの首筋にチエが齧りついている。

混乱したソウジはマキの顔を見て、ジルコニアの顔も見ろ。二人ともひどく冷静な顔でソウジと同じものを見ていて、かと思うと俄かに立ち上がりそれぞれの得物を取り出した。

ジルコニアはハミングし空中から輪琴を出現させる。

マキは手のひらに炎を顕わし、そこから剣を抜きだした。――その炎の色は、蒼。

「敵……だったのか」

「ごめん、て一応言っておいた方が良いのかな？ これも仕事だから。それに、ソウジ達だってあの子の近くにいれば誰かに襲われることだって考えているわけだよね？ だから、あんまり驚かないで欲しいよ」

そしてマキはカミエを打ち捨てて来たチエと並び立つ。チエは特に武器を持っていないが、油断できない気配がひしひしと伝わってきた。

「いいぜ……。ジルコニア、準備はいいか？」

「誰にもの言ってるの？ 戦うわよ、私の守護者^{コールド}」

―― 抜きにして遊ぶ間に襲われ（後書き）

ジルコニアは何で運動が嫌いなんでしょうね。

吟遊詩人と守護者が戦う件

蒼天の真下、戦いは霹靂のごとく火ぶたを切って始まる。

目に見えて激突するのはソウジとマキ。ソウジの槍は木製の柄に鋼の刃、全長は二千百四十三ミリメートルで刃渡り三百六十ミリメートルのそれ自体は特に普通の槍。対してマキの持つ蒼き炎から生み出された蒼い細身の剣は、十字架に円を重ねたいわゆるケルト十字とよばれる特徴的な形をしている。しかもマキの剣からは振るわれるたびに蒼い炎がほとばしった。

フォルム的には差があるが武器として振るう分にその二つに差はない。長い槍をまるで腕の延長のように巧みに操るソウジと、炎に舞う風のごとき剣戟を繰り出すマキ。蒼い剣から走る炎にまどわされることなくソウジは攻撃を畳みかけ、マキは冷静にそれを受けとめていた。

そして、二人の背後でも静かに激突はある。赤い鎖や矢がソウジに向かって飛来し、ふいに空中で分解する。力の激突をはさんで別の力の激突。

赤い鎖と矢――血液と呼ばれる赤い液体でつくられたそれを操るのはチエ。手首を大きく切った傷から流れ出す血液はチエの意志のままに凝縮し、さまざまな形となって戦場を舞う。それらは決して凝固しているわけではなく液体として固められているので、砕かれてもチエのもとに飛沫となって帰ってはまた武器となって飛来するのだった。

対するジルコニアは目に見えない、耳に聞こえる形で力をふるう。輪琴の虹色のディスクの上を少女の小さな手が走る奏でる旋律は熱く魂を奮わせる激しいマーチ。主旋律はソウジの身体能力を高める支援の効果を持つが、ところどころに臨時記号や和音、装飾音符を混ぜて旋律をかき乱せばそれが攻撃となりチエの攻撃を撃墜する。

「私の炎は蒼！ 蒼は電光！」

マキの剣が蒼くフラッシュしソウジは思わずひるむ。
そのすきを突く、形なき炎さえも千に切り裂く電光の剣撃。

「――地雷閃！」

あわやマキの剣のさびとなるかのように見えたソウジだったが、
槍の石突きを下から上に跳ね上げることで攻撃をはじき返す。

ガキン！ と音が周囲に響いたのも刹那、その時には音速を超えた二人の刃が新たに激突し火花を散らしていた。

「――」

武器と武器をぶつけ、競り合うさなかで二人の顔が間近に迫ると
四つの目の間には架空の火花が散る。二人の双眸にあるのは憎しみ
でも敵意でもなく、純粹な闘志。カミエという少女をかけた戦いで
はなく、二人は純粹に力と力をぶつけあっていた。

「ふふ……妬けるわね」

「女同士より、やっぱり男と女じゃない？」

ソウジとマキがつば競り合いする背後から、いままでにない素早く
力強い攻撃をチエが投じると、ジルコニアの輪琴を走る指にも力が
籠もる。地を轟かせる低音と空気を裂く高音。竜の歌のような旋律
が空を走り、

「うわ！」

「きゃあ！」

頭上で炸裂した力にソウジとマキ、二人ともども弾き飛ばされた。

「お前こっちのことも考えて戦えよな。支援する気あるのか？」

「もちろんないわ。ソウジは私の槍でしょ？」

仕事口調で道具扱いされたソウジはずしんと落ち込む。――てか

俺、さいきん落ち込んでばかりだな。

「ソウジはジルコニアの槍、ね。なら私の剣はマキだわ」

チエはマキの背中から抱きしめるようにして二人と向き合う。真紅の瞳はしたたるように紅く輝いていた。

「なにを見せてくれるのかしら」

「ふふ……『我が蒼き十字剣よ。その真の姿、真の脅威をここに見せよ』」

ぼわ、とマキの姿が揺らぐ。

マキの身体は蒼い炎の塊となり、彼女を抱きしめていたチエはその中に包まれる。しかしチエの長い真紅の髪も、真珠の肌も、炎に焦がされることなく、炎の中でその妖しい輝きをいや増していた。

ソウジは驚きのあまり声が出ない。その異常さ、そして美しさに、炎はほどなくしてチエの右手に収束する。圧縮され、生みだされるのは一振りの剣。右腕の肘まで密着するその剣は、刃渡りが一メートル半、全体としてマキの剣とおなじ蒼いケルト十字の形だったがそれよりもずっと幅広で、ギロチンを見ている者に連想させた。

「たぎる血と肉、すべて儚き灰に還しましょう」

ドン！ と砂浜に穴を開けるほどに強い踏み込みでチエは襲いくる。

「お、オオオオオオオオオオオ！」

ジルコニアの前に立ち、槍の柄を使って攻撃を受けとめるソウジ。槍の木製の柄では攻撃を受けとめるには向かず、そもそもソウジの戦い方自体が防御というのを苦手になっているにも拘わらず、ソウジは二本の足に力を込めてジルコニアをかばっていた。

「あら、頑張るわね」

「ソウジ！ 槍が折れるわ！」

「わかってんならさっさと援護しろよ」

チエは怒涛の攻撃を重ねる。しかしソウジが負けることはない。

——負けられないからだな。

別にドラマチックな感情はない。ただジルコニアの兄だから、守護者だから護る、それだけだ。

「あら、私たちの恰好に驚いているのかしら？」

「舐めるんじゃないわよ。私は万物を奏で操る吟遊詩人よ」

「——天よ、地よ、風よ生けるすべての者達よ聞きなさい。風信士石の詩人が炎の唄を奏でる！」

短い宣言の後、奏でるハーモニーは雄弁。

キラリとジルコニアの耳にぶら下がる風信士石の大きなブローチが煌めき、力を得たかのように彼女はこれまでより一層妙なる至高の音楽を奏ではじめた。

ハ長調からト長調への変調、かと思えば二短調からハ長調への変調、揺らめく炎のような様々な変調のそれらは決して落ち着きのない聞きづらい音楽ではなく、計算されつくした軽快さで聞くものの意識を一気に引きつける。

そして巻き起こる赤と緑の炎。淡い極彩色に輝く輪琴ディクスハープの上で少女の指が目にもとまらぬ速さで走り奏でる重厚かつ軽快な音楽に合わせ、宝石の炎は砂浜を灼熱に融かしながら踊りうねり、そして蒼の炎をまとうチエへと襲いかかる！

「——て、危ないだろ！ 俺ごと焼く気か？」

目の前に躍り出た炎に驚愕して後ずさるソウジ。

「あはは、いいわね！ 私も炎が好きよ。——『女王が命ずる、灰塵と化せ弱きものども！』」

ブオ！ とチエは大きな刃を振り回す。炎をあおるように、赤と緑の炎に自分の蒼い炎をぶつけるように。

ジルコニアは語らない。だが音楽が奏でる、語る闘志、敵対するものを撃滅せんと押し出す力はいくまでも耳に心地よく魂を鼓舞する無上の音楽。

レイジング・ワルツ
「激烈舞踏撃！」

ぶつかり合う炎の波濤をすり抜け、ソウジがチエに仕掛けた！

「な、どうしてこっちに……！」

「ジルコニアの演奏する炎は俺には効かないんだよ！」

「さっき退がったのは嘘——」

槍の穂先にプラズマのような蒼銀の炎。

下から上へ斜めに振るいあげ、さらにそのまま突き入れる！

「く——ああああああ！」

チエはマキがその身を変えた剣の平で槍を受けとめ、そして力が爆発した。

「あーあ、残念だったな、ソウジとジルちゃんが活躍しているところ私よく見てなかったよ」

「途中からは起きてたんだよね？」

「うん。そもそも何で寝かされたのかわからないんだけど、すぐ効き目がなくなってきたみたいで、最後の方で火がぼわーって燃えているのは見てたよ。あれ凄い綺麗だった。あれが吟遊詩人の音楽なの？」

「『音楽』には色々な使い方があるけど、あたしが好きで使うのは原子に運動エネルギーを与えて燃焼を起こし、それにアストラルの絵具をちよちよと入れて色をつけるって感じの戦い方。ほかにも意識に強引に作用したり、重力を操ったりすることもできるよ」

「——原子って何？」

戦いで焼焦げて白くなくなった砂浜をあとに、カミエたち三人はジルコニアの音楽を使ってジュンを搜索していた。

「お、いたいた」

木立のなかで大の字になって眠っているジュン。なかなか幸せそうな顔をしているとカミエは思った。

そして、喉元に赤い二つの点。

「――起きろう！」

「ぶわ！」

カミエが渾身の力で平手打ちすると、ジュンはゴロゴロと転がって藪の中まで入ってから起き上がってきた。

「――」

黙っているジュン。どうやら自分がどういう状況にあるのか分かっていうようだ。

「今回はソウジとジルちゃんが護ってくれたから」

「……………そうか」

「別に、謝ってくれなくてもいいよ……。ジュンはどうせ、私のことなんてやっかいなお荷物、ていうか好きでもないのに手をつながなきゃいけない相手みたいにし加思ってないんだろから」

拗ねていた。

ジュンは何一つ言わないか、それとも怒るか迷った。――いや、謝るという選択肢もあって……、

「俺はお前に俺の傍にいろと言った」

「……………だから？」

「俺もお前の傍にいてやる。――今後は、お前が死ぬ時まで手を離さないでいてやる」

それだけ言うと、答えを待たずに「戻るぞ」と言ってジュンは宿の方に歩きだした。

ソウジとジルコニアは頬笑みながら黙ってついて行く。カミエも、

照れたような拗ねたような顔のまま彼の背中から少し離れてしかし
ちゃんと後を追って行った。

「あいつらはどうした？」

「倒しきってはいない。なんか様子見に来たって感じで、さっさと
引き上げて行きやがった」

「狙いは俺とカミエではないんだな」

ほどなくして戻った海岸に人の影はなく、かわりに沈みかけの太
陽のガーネットの光があふれていた。

ジュンは特に気にもせずに進める。ソウジとジルコニアは
ちよつと立ち止まってそれを見た後、焦げた砂浜に目が行って疲れ
たように肩を落として歩きはじめる。

さ、と軽い音を立ててカミエだけが完全に立ち止まった。まぶし
い光に彼女は眼を細めずまっすぐに太陽を見ていた。

『死ぬ時まで手を離さないでいてやる』

甦る言葉。嬉しくもあったが、恋する女はさらなるものを求めて
しまう。

「……死ぬ時も手を握っていてほしいよ」

だがそれはジュンの死も願う言葉。——カミエはそのことを
理解している。

切ない言葉は夕暮れの波打ち際に落ちて、誰も知らない彼岸まで
流されていくことだろう。

—— 吟遊詩人と守護者が戦う件」 (後書き)

読者数少ない……というか書いているこちらも調子がのらないので打ち切りにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6095g/>

月陰に咲く光の詩

2010年10月8日14時10分発行